

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第71輯

池田寺遺跡Ⅳ

近畿自動車道松原海南線・都市計画道路泉州山手線・
和泉中央丘陵新住宅市街地開発事業に伴う発掘調査報告書

本文編

1 9 9 1

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第71輯

いけ だ であ
池田寺遺跡 IV

近畿自動車道松原海南線・都市計画道路泉州山手線・
和泉中央丘陵新住宅市街地開発事業に伴う発掘調査報告書

本文編

1 9 9 1

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

序 文

関西国際空港の重要アクセスとなります近畿自動車道の建設が計画されて以来、本府教育委員会では路線内にある埋蔵文化財の取り扱いについて、関係当局と慎重に協議を重ね、空港開港に向けて昭和60年度から発掘調査を進めてまいりました。

池田寺遺跡のあります和泉市室堂付近から槇尾川の南の丘陵の一带は、縄文時代以降各時期の遺跡が集中している地域です。これまでも宅地開発等に伴う調査が本府教育委員会や和泉市教育委員会、和泉丘陵遺跡調査会などによって行われてまいりました。

近畿自動車道にかかる池田寺遺跡につきましては、財団法人大阪府埋蔵文化財協会に調査を委託し、昭和61年度から発掘調査を実施しております。その成果の一部につきましてはすでに3冊の報告書に記しておりますが、本書は最後の1冊になります。従来の池田寺遺跡ではほとんど知られていなかった縄文時代後期の遺構や弥生時代から7世紀頃までの遺構・遺物の調査成果を収録しております。

本調査を実施するにあたって、日本道路公団大阪建設局ならびに、和泉市教育委員会、関係者各位、調査を担当された財団法人大阪府埋蔵文化財協会の皆様に深く感謝いたします。今後とも本府の文化財行政に対して、各位の変わらぬご理解とご援助をお願い申し上げます。

平成3年11月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 橋内 信昌

序 文

和泉市池田寺遺跡は、近畿自動車道松原海南線と都市計画道路泉州山手線が合流する付近に広がる大規模な遺跡です。この地域は古代の在地豪族の氏寺と考えられている池田寺を中心に古代の集落跡が広がっていることが早くから知られ、これまで大阪府教育委員会や和泉市教育委員会によって数次の発掘調査が行われています。

本協会でも近畿自動車道松原海南線建設に先だち、4年にわたる調査を実施してきました。その結果、奈良時代～中世の集落のほか、これまで本遺跡ではほとんど知られていなかった縄文時代後期の墓や弥生時代および7世紀頃の集落なども周辺に広がっていることが明らかになりました。同時期の遺構は槇尾川南岸の丘陵上には知られていましたが、北岸にも分布していることが分り、本遺跡について新たな知見を得ることができました。

これまでの調査成果につきましては、その一部をすでに3冊の報告書にまとめて刊行しており、本書は最後の第4冊目になります。本書の成果が、地域史の解明の一助となれば幸いです。

本調査を実施するにあたって、職員の派遣など本協会の事業にご理解をいただいている近畿各府県・市・町教育委員会ならびに大阪府教育委員会、日本道路公団大阪建設局、和泉市教育委員会、地元自治会をはじめとする関係者各位に多くのご支援とご協力を賜り、深く感謝しております。今後とも当協会の事業に変らぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成3年11月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 仁賀奈祐吉

例 言

1. 本書は近畿自動車道松原海南線・都市計画道路泉州山手線・和泉中央丘陵新住宅市街地開発事業に伴う、和泉市池田下・室堂に所在する池田寺遺跡の発掘調査報告書第Ⅳ冊である。
2. 発掘調査は、大阪府教育委員会及び財団法人大阪府埋蔵文化財協会が、日本道路公団建設局・日本住宅都市整備公団・大阪府土木部の委託を受けて実施したものである。
3. 現地調査は、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が担当した。
4. 本書に記載したのは、昭和63年度から平成元年度にかけて実施された池田寺遺跡発掘調査（その3）と平成2年度の（その5）の成果である。各年度の調査担当は以下のとおりである。
昭和63年度 調査第5班 技師 武内 雅人・石田 成年
平成元年度 調査第5班 技師 武内 雅人・田中 清美・西村 歩・岡本 武司
平成2年度 調査第2班 技師 武内 雅人
5. 発掘調査にあたっては、和泉市教育委員会ならびに地元の方々には格別の配慮を頂いた。記して感謝したい。
6. 遺物整理に際しては、奈良大学 泉 拓良、大阪府教育委員会 大野 薫、財団法人大阪市文化財協会 松尾 信裕の各氏の御教示を得た。
7. 本書は武内・田中・西村が共同で作成した。分担範囲は目次に記している。
8. 本調査では、一部の遺構の埋土について花粉分析を実施し、川崎地質株式会社に分析を委託した。
9. 本調査では、検出された骨片について、大阪市立大学医学部解剖学第二講座 安部みき子氏に分析を依頼し、玉稿を頂いた。
10. 調査・整理で収集・作成した資料はすべて当協会資料班で保管している。広く活用されたい。

凡 例

- 1、本書に掲載した地形図・遺構実測図・その他の図に付された北方位は、すべて座標北（国土座標第Ⅵ系）を示す。当該地では真北は座標北に対して18分東偏し、磁北は6度30分西偏している。また、当該地のほぼ中心位置は、北緯34度27分47秒・東経135度27分59秒である。
- 2、調査ならびに本書で使用している地区割り方法は、当協会が国土座標（第Ⅵ系）を基準に設定したものである。具体的には本文中に示している。
- 3、本書に示したレベル高はT.P.（東京湾標準潮位）+の数値を使用しているが、本書ではT.P.+を省略して記述している。
- 4、遺構の略号及び遺構番号は、当協会の定めた方法によって命名している。本書で使用した遺構略号は、竪穴住居跡－OD、掘立柱建物跡－OB、柵列－OF、溝状遺構－OS、土壌状遺構－OO、ピット状遺構－OP、水田跡－OZ、不明遺構－OXである。
- 5、本書に添付した付図では、第4層上面で検出された溝状遺構の一部を省略している。付図の遺構に付されたローマ字の記号は、Jは縄文時代・Yは弥生時代・Cは中世の遺構を表す。表示のないものは、6世紀後葉～10世紀の遺構もしくは年代の不明のものである。
- 6、本書では本文・挿図・写真図版の遺構・遺物番号は一致する。遺物のうち、写真図版だけに掲載したものは1000番台の番号を与えている。
- 7、本書の挿図で掲載した遺物の断面は、縄文土器・須恵器・陶磁器は黒塗、石器類・土製品・金属製品は斜線、瓦類は網目で各々表示した。
- 8、本書に記載した遺物の、出土地点・層位・遺構名・法量・色調・胎土の状況・焼成の状況・手法の特徴などは巻末の遺物一覧表に示しているが、縄文土器については項目の異なる一覧表を使用した。これらの表では、縄文原体の見掛けの条数や見掛けの節数・タタキメ・ハケメ・瓦の布目の系数等の細かさを1cmあたりの数で表現している。また、縄文土器の胎土については、全ての土器に包含されている石英・長石・チャートの記載は省略し、角閃石・金雲母の有無を記入している。
- 9、一部の陶磁器を除く土層及び土器の色調は、「新版 標準土色帳」5版 1976（日本色研事業株式会社）の色片との対比で記載している。

本文目次

第I章 遺跡	1
第1節 地理的環境 (西村)	1
第2節 歴史的環境 (西村)	2
第II章 調査	14
第1節 既往の調査 (西村)	14
第2節 調査に至る経緯 (西村)	16
第3節 調査・整理の方法 (武内)	16
第1項 調査の方法	16
第2項 整理の方法	18
A. パソコンの使用	18
第3項 遺物の分類と用語	20
A. 縄文土器	20
B. 須恵器・土師器	23
第III章 調査成果	29
第1節 層序 (武内)	29
第1項 旧地形	29
第2項 基本層序	29
第3項 遺物包含層と出土遺物の組成	32
第4項 遺物包含層出土遺物	36
A. 石器	36
B. 縄文土器	40
C. 弥生土器	42
D. 須恵器	42

E.	土師器	50
F.	瓦器	53
G.	瓦器系土器	53
H.	土師器系土器	53
I.	須恵器系土器	53
J.	中国製陶磁器	53
K.	瓦類	57
L.	土製品・金属製品・石製品	58
	第5項 小結	61
	第2節 縄文時代の遺構・遺物 (武内)	62
	第1項 概況	62
	第2項 各遺構と出土遺物	64
	第3項 小結	104
	A. 遺構群の特徴	104
	B. 遺構の時期	105
	C. 縄文原体の種類	108
	第3節 弥生時代の遺構・遺物 (田中)	110
	第1項 概況	110
	第2項 各遺構と遺物	110
	第3項 小結	121
	第4節 古代の遺構・遺物 (武内)	123
	第1項 竪穴住居群	123
	A. 第一単位の住居跡	124
	B. 第二単位の住居跡	132
	C. 第三単位の住居跡	138
	D. 第四単位の住居跡	140
	E. 第五単位の住居跡	142
	F. 小結	144
	第2項 掘立柱建物群	146
	A. 第一北群の建物	147

B.	第一南群の建物	154
C.	第二北群の建物	156
D.	第二南群の建物	159
E.	柱穴列	166
F.	ピット群	167
G.	小結	168
第3項	溝状遺構	170
第4項	土壙状遺構	195
1.	6世紀後葉から7世紀代の土壙	195
A.	竪穴状土壙	195
B.	不整形大規模土壙	198
C.	小規模土壙	207
D.	その他の土壙	212
2.	8世紀の土壙	216
A.	大規模土壙	217
B.	小規模土壙	227
C.	その他の土壙	234
3.	焼土・炭化物の顕著な土壙	235
4.	小結	239
第5項	立石遺構	240
第5節	中世の遺構・遺物	(武内) 241
第1項	掘立柱建物群	242
第2項	井戸	252
第3項	土壙群	254
第4項	溝状遺構	262
第5項	水田跡	267
第6項	小結	270
A.	集落の時期	270
B.	集落の構造	271
C.	規模の規格・計画性	271

D.	規格性の達成方法	272
E.	規模の規格性と尺度	273
第IV章	検討	277
第1節	土器の属性の相関関係 (武内)	277
第1項	縄文土器	277
A.	縄文原体の太さ	278
B.	沈線文の太さと縄文原体の太さ	278
C.	文様と、縄文原体・沈線文の太さ	279
D.	他の遺跡出土遺物との比較	280
第2項	須恵器蓋杯Hの、天井部・底部の最終処理と法量	284
第2節	飛鳥時代の須恵器 (武内)	286
第1項	蓋杯H類の法量と底部ならび天井部の最終処理	288
第2項	金属器形須恵器の変化と時期区分	291
第3項	時期の比定とその指標	292
第V章	分析	295
第1節	池田寺遺跡の土壌墓埋土の花粉分析 (川崎地質研究所)	295
第2節	池田寺遺跡出土の骨 (安部)	302
第VI章	総括 (武内)	303

挿図目次

第1図	和泉市位置図	1
第2図	池田寺遺跡周辺地質図	2
第3図	周辺遺跡分布図・1	4
第4図	周辺遺跡分布図・2	5
第5図	周辺遺跡分布図・3	6
第6図	調査区位置図	15
第7図	池田寺遺跡(3)・(5)地区割り図	17
第8図	パソコンのファイル	19
第9図	縄文土器の分類	22
第10図	須恵器の主要な器種	24
第11図	土師器の主要な器種	26
第12図	標準土層(F20LX付近)	30
第13図	礫層・遺物包含層の平面分布	31
第14図	出土遺物の組成	32
第15図	層別出土遺物の組成	34
第16図	第4層出土瓦器の平面分布	35
第17図	包含層出土遺物(石器)	38
第18図	包含層出土遺物(石器)	39
第19図	包含層出土遺物(石器)	40
第20図	包含層出土遺物(縄文土器)	41
第21図	包含層出土遺物(弥生土器)	42
第22図	包含層出土遺物(須恵器)	45
第23図	包含層出土遺物(須恵器)	46
第24図	包含層出土遺物(須恵器)	47
第25図	包含層出土遺物(須恵器)	48
第26図	包含層出土遺物(須恵器)	49
第27図	包含層出土遺物(土師器・黒色土器)	51
第28図	包含層出土遺物(土師器)	52

第29図	包含層出土遺物（瓦器・瓦器系・土師器系土器）	54
第30図	包含層出土遺物（須恵器系土器）	55
第31図	包含層出土遺物（陶磁器）	57
第32図	包含層出土遺物（瓦）	59
第33図	包含層出土遺物（瓦）	60
第34図	包含層出土遺物（土製品・金属製品・石製品）	61
第35図	縄文時代の土壌配置図	63
第36図	2505・2506-〇〇実測図	65
第37図	2506-〇〇出土遺物	66
第38図	2503-〇〇実測図	67
第39図	2503-〇〇出土遺物	67
第40図	2525-〇〇実測図	68
第41図	2525-〇〇出土遺物	70
第42図	2525-〇〇出土遺物	71
第43図	2510-〇〇実測図	72
第44図	2510-〇〇出土遺物	74
第45図	2510-〇〇出土遺物	75
第46図	2510-〇〇出土遺物	76
第47図	3569-〇〇実測図	77
第48図	3569-〇〇出土遺物	78
第49図	2000-〇〇実測図	80
第50図	2000-〇〇出土遺物	81
第51図	2000-〇〇出土遺物	82
第52図	3038-〇〇実測図	82
第53図	3038-〇〇出土遺物	83
第54図	3310-〇〇実測図	84
第55図	3310-〇〇出土遺物	85
第56図	3310-〇〇出土遺物	86
第57図	3310-〇〇出土遺物	87
第58図	2860-〇〇実測図	89

第59図	2860-〇〇出土遺物	90
第60図	2860-〇〇出土遺物	91
第61図	3599-〇〇実測図	92
第62図	3599-〇〇出土遺物	93
第63図	3311-〇〇実測図	94
第64図	2523-〇〇実測図	95
第65図	2520-〇〇実測図	95
第66図	2522-〇〇実測図	96
第67図	2519-〇〇実測図	96
第68図	2521-〇〇実測図	97
第69図	2561・3078-〇〇実測図	97
第70図	2933・2934-〇〇実測図	98
第71図	2851-〇〇実測図	99
第72図	3426-〇〇実測図	100
第73図	3363-〇〇実測図	101
第74図	3561-〇〇実測図	102
第75図	3552-〇〇実測図	102
第76図	その他の土壌出土遺物	103
第77図	分類項目の関係	107
第78図	弥生時代の遺構配置図	111
第79図	2461-〇D実測図	112
第80図	2461-〇D出土遺物	113
第81図	494-〇P実測図	113
第82図	3109-〇〇実測図	114
第83図	3109-〇〇出土遺物	114
第84図	313-〇〇実測図	115
第85図	313-〇〇出土遺物	116
第86図	3117-〇〇実測図	117
第87図	3117-〇〇出土遺物	118
第88図	2441-〇〇実測図	119

第89図	2441-〇〇出土遺物	120
第90図	弥生土器の平面分布	122
第91図	竪穴住居配置図	123
第92図	325-〇D実測図	125
第93図	325-〇D出土遺物	126
第94図	1179-〇D実測図	127
第95図	1179-〇D出土遺物	128
第96図	366-〇D実測図	129
第97図	366-〇D出土遺物	130
第98図	241-〇D実測図	131
第99図	241-〇D出土遺物	132
第100図	3150-〇D実測図	133
第101図	3150-〇D出土遺物	134
第102図	1805-〇D実測図	135
第103図	1805-〇D出土遺物	136
第104図	3231-〇D実測図	137
第105図	3231-〇D出土遺物	138
第106図	1916-〇D実測図	139
第107図	1916-〇D出土遺物	140
第108図	1281・1405-〇D実測図	141
第109図	1281-〇D出土遺物	142
第110図	1405-〇D出土遺物	142
第111図	2836-〇D実測図	143
第112図	2836-〇D出土遺物	144
第113図	3032-〇D実測図	145
第114図	3032-〇D出土遺物	146
第115図	古代の掘立柱建物配置図	146
第116図	古代の掘立柱建物の棟方向	147
第117図	1579-〇B柱間模式図	147
第118図	1579-〇B実測図	148

第119図	1188－O B柱間模式図	148
第120図	1188－O B実測図	149
第121図	1548－O B柱間模式図	150
第122図	1548－O B実測図	150
第123図	1550－O B柱間模式図	151
第124図	1550－O B実測図	151
第125図	1613－O B柱間模式図	152
第126図	1613－O B実測図	152
第127図	1620－O B実測図	153
第128図	1620－O B柱間模式図	154
第129図	3463－O B実測図	154
第130図	3463－O B柱間模式図	155
第131図	3378－O B実測図	155
第132図	3378－O B柱間模式図	156
第133図	2168－O B柱間模式図	156
第134図	2168－O B実測図	157
第135図	1549－O B柱間模式図	157
第136図	1549－O B実測図	158
第137図	1553－O B実測図	159
第138図	1553－O B柱間模式図	159
第139図	3377－O B実測図	160
第140図	3377－O B柱間模式図	160
第141図	1624－O B実測図	161
第142図	1624－O B柱間模式図	162
第143図	1623－O B実測図	162
第144図	1623－O B柱間模式図	163
第145図	1618－O B実測図	163
第146図	1618－O B柱間模式図	164
第147図	1617－O B柱間模式図	164
第148図	1625－O B柱間模式図	165

第149図	1617－O B実測図	165
第150図	1625－O B実測図	166
第151図	3379・3386・3439－O F断面図	167
第152図	3379・3386・3439－O F柱間模式図	168
第153図	掘立柱建物出土遺物	168
第154図	1233－O P出土遺物	168
第155図	古代の掘立柱建物の規模	170
第156図	206－O S実測図	171
第157図	206－O S出土遺物	173
第158図	206－O S出土遺物	174
第159図	206－O S出土遺物	175
第160図	1670－O S実測図	177
第161図	1670－O S出土遺物	179
第162図	1670－O S出土遺物	180
第163図	1670－O S出土遺物	181
第164図	1670－O S出土遺物	182
第165図	1659・1171－O S実測図	183
第166図	1171－O S出土遺物	184
第167図	1659－O S出土遺物	185
第168図	1228・1229－O S実測図	187
第169図	1228－O S出土遺物	187
第170図	1004－O S実測図	188
第171図	1004－O S出土遺物	189
第172図	333・617－O S実測図	190
第173図	333－O S出土遺物	191
第174図	500－O S出土遺物	192
第175図	3208－O S出土遺物	194
第176図	3203－O S出土遺物	195
第177図	1183－O O実測図	196
第178図	1183－O O出土遺物	197

第179図	2176-〇〇実測図	197
第180図	2176-〇〇出土遺物	198
第181図	1988-〇〇実測図	198
第182図	3217-〇〇実測図	199
第183図	1128-〇〇実測図	200
第184図	1128-〇〇出土遺物	201
第185図	1480-〇〇実測図	202
第186図	1480-〇〇出土遺物	203
第187図	1323-〇〇実測図	204
第188図	1323-〇〇出土遺物	204
第189図	1349-〇〇実測図	205
第190図	1349-〇〇出土遺物	206
第191図	1662-〇〇実測図	207
第192図	1662-〇〇出土遺物	207
第193図	2601-〇〇実測図	208
第194図	2601-〇〇出土遺物	208
第195図	377-〇〇実測図	209
第196図	377-〇〇出土遺物	209
第197図	3263-〇〇実測図	210
第198図	3263-〇〇出土遺物	210
第199図	3572-〇〇実測図	210
第200図	3572-〇〇出土遺物	211
第201図	587-〇〇実測図	211
第202図	587-〇〇出土遺物	211
第203図	1909-〇〇実測図	211
第204図	1909-〇〇出土遺物	211
第205図	10-〇〇実測図	212
第206図	10-〇〇出土遺物	212
第207図	その他の土壌出土遺物（1）	214
第208図	その他の土壌出土遺物（2）	215

第209図	1910-〇〇実測図	218
第210図	1910-〇〇出土遺物	219
第211図	1057-〇〇実測図	220
第212図	1057-〇〇出土遺物	221
第213図	2123-〇〇実測図	222
第214図	2123-〇〇出土遺物	223
第215図	2096-〇〇実測図	224
第216図	2096-〇〇出土遺物	225
第217図	2277-〇〇実測図	226
第218図	2277-〇〇出土遺物	227
第219図	2868-〇〇実測図	228
第220図	2868-〇〇出土遺物	228
第221図	344-〇〇実測図	229
第222図	344-〇〇出土遺物	229
第223図	2789-〇〇実測図	229
第224図	2789-〇〇出土遺物	230
第225図	1268-〇〇実測図	230
第226図	1268-〇〇出土遺物	231
第227図	2275-〇〇実測図	231
第228図	2275-〇〇出土遺物	232
第229図	1919-〇〇実測図	232
第230図	1919-〇〇出土遺物	233
第231図	1772-〇〇実測図	233
第232図	1772-〇〇出土遺物	233
第233図	2223-〇〇実測図	234
第234図	その他の土壌出土遺	235
第235図	焼土入土壌配置図	236
第236図	3465-〇〇実測図	236
第237図	2341-〇〇実測図	237
第238図	2228-〇〇実測図	237

第239図	2385-〇〇実測図	238
第240図	2429-〇〇実測図	238
第241図	2429-〇〇出土遺物	238
第242図	2029-〇〇実測図	239
第243図	2029-〇〇出土遺物	239
第244図	1673-〇〇実測図	239
第245図	1673-〇〇出土遺物	239
第246図	178-〇X実測図	241
第247図	中世の掘立柱建物配置図	242
第248図	3268-〇B実測図	243
第249図	3268-〇B柱間模式図	244
第250図	3262-〇B柱間模式図	244
第251図	3262-〇B実測図	245
第252図	1577-〇B柱間模式図	246
第253図	1577-〇B実測図	246
第254図	1091-〇B・1199-〇F柱間模式図	247
第255図	1091-〇B・1199-〇F実測図	248
第256図	1090-〇B・1424-〇F柱間模式図	249
第257図	1896-〇B柱間模式図	249
第258図	1090-〇B・1424-〇F実測図	250
第259図	1896-〇B実測図	251
第260図	掘立柱建物出土遺物	251
第261図	497-〇W実測図	252
第262図	497-〇W出土遺物	253
第263図	208-〇W実測図	254
第264図	1826-〇〇実測図	255
第265図	1826-〇〇出土遺物	255
第266図	970-〇〇実測図	256
第267図	970-〇〇出土遺物	256
第268図	462-〇〇実測図	257

第269図	462-〇〇出土遺物	257
第270図	457-〇〇実測図	258
第271図	457-〇〇出土遺物	258
第272図	440-〇〇実測図	259
第273図	440-〇〇出土遺物	259
第274図	965-〇〇実測図	260
第275図	965-〇〇出土遺物	260
第276図	993-〇〇実測図	261
第277図	499-〇〇実測図	261
第278図	499-〇〇出土遺物	262
第279図	420-〇〇出土遺物	262
第280図	1058・1731・1730・1681・1705・384・1171・1174-〇S実測図	264
第281図	1705-〇S出土遺物	265
第282図	1731-〇S出土遺物	266
第283図	1730-〇S出土遺物	266
第284図	1058-〇S出土遺物	267
第285図	水田跡実測図	268
第286図	水田跡・畦畔の実測図	269
第287図	中世の掘立柱建物の棟方向	270
第288図	中世の掘立柱建物の規模	272
第289図	池田寺・仏並遺跡の節と沈線文の太さ	281
第290図	蓋杯Hの法量と天井部・底部の最終処理	283
第291図	蓋杯H・Gの法量と金属器形の須恵器	287
第292図	試料採取位置	299
第293図	花粉分析フローチャート	300
第294図	花粉ダイアグラム	301

付 図 池田寺遺跡（3）・（5）全体図

表 目 次

第1表	池田寺遺跡周辺遺跡分布図対照表	7
第2表	縄文原体の種類	109
第3表	縄文土器の胎土・色調	110
第4表	その他の土壌（7世紀）	213
第5表	その他の土壌（8世紀）	234
第6表	池田寺・山直中遺跡検出掘立柱建物の柱間・坪数	274
第7表	縄文原体の太さと節	278
第8表	沈線文の太さと節	279
第9表-1	I類の縄文原体・沈線文の太さ	279
第9表-2	II類の縄文原体・沈線文の太さ	279
第10表-1	沈線文の太さの分割表	282
第10表-2	節数の分割表	282
第11表-1	蓋杯Hの天井部・底部の最終処理と口径	285
第11表-2	階級値の統合結果	285
第12表	各遺構出土の蓋杯Hの属性	289
第13表	花粉分析結果表	298
	出土遺物観察表	305

第I章 遺 跡

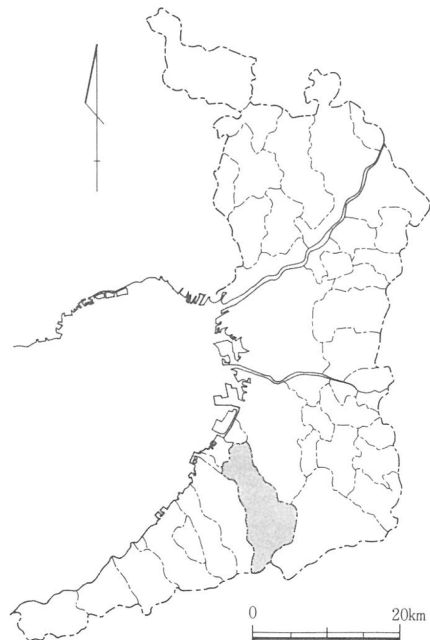
第1節 地理的環境 第1・2図

池田寺遺跡は、和泉山脈の槇尾山西斜面に源を発して北西に流れる槇尾川が形成した河岸段丘上に立地し、現在の行政区分でいえば和泉市室堂町・池田下町に所在している。

和泉山脈は北東から南西にかけて延びている基盤山地で、大阪府南部と和歌山県北部とを画している。ここから大阪側に張り出す和泉丘陵は、急峻な和歌山側と比較して緩やかな斜面を形成する。和泉丘陵は和泉山脈から北、あるいは北西流する石津川・牛滝川・近木川・佐野川等の諸河川によって分断されている。池田寺遺跡の所在する槇尾川水系もそのひとつである。槇尾川は右岸に信太山丘陵、左岸に和泉丘陵を形成しつつ、下流域で松尾川・牛滝川と合流して大津川となり大阪湾に注ぐ。これらの丘陵性部分は大坂層群であるが、その上部には段丘堆積層が形成されている。信太山丘陵や和泉丘陵上の段丘堆積層のうち、高位段丘層は和泉丘陵より信太山丘陵において顕著に残存する（信太山礫層）。丘陵部の縁辺には中位段丘面が広がっている。

低位段丘面は槇尾川水系では下流域において広範囲に分布する。大津川水系に属する三河川の合流地点付近より海側では沖積層が堆積する。槇尾川の下方侵食によって形成された谷底低地は池田谷と呼ばれている。周辺の丘陵や台地は開析されて樹枝状に入り組んだ複雑な地形を呈しており、谷筋を利用して多くの溜池が構築されて灌漑に供されている。

遺跡は槇尾川の右岸、信太山丘陵南端部の中位段丘面上に立地しており、対岸を含めた周辺地形には低位面へ移行する段丘崖が明瞭に観察される。段丘崖の高さは調査地付近で約7mである。遺跡周辺の中位段丘面の幅は約320mで槇尾川流域では幅広の地域である。標高はおよ



第1図 和泉市位置図



第2図 池田寺遺跡周辺地質図

そ54m前後で、現河床面からの比高差は約10mである。段丘層には地表下約1mで達するが、段丘層は砂岩等の円礫からなる礫層、あるいは礫をあまり含有しないシルト層で構成されている。調査地の南端部では近年まで小規模な池があり、段丘崖から東側に開析された谷地形がかつて存在していたことが推測される。段丘面は、主として水田として利用されてきたため、比較的なだらかな地形であるが、近年の開発により徐々にその姿を変えつつある。

第2節 歴史的環境 第3～5図、第1表

歴史的な環境については、既刊の『池田寺遺跡発掘調査報告書』で詳述されているので、ここでは重複を避けて簡略に報告するにとどめたい。池田寺遺跡の所在する和泉市域を中心として、隣接する泉大津市・岸和田市等を含めて分布する遺跡を概観しよう。

旧石器時代の遺跡にはナイフ形石器を出土した万町北遺跡、伯太北遺跡等がある。和気

遺跡では翼状剥片が出土している。伯太北遺跡、大園遺跡、三田遺跡では縄文時代草創期にかかる有舌尖頭器の出土も知られている。

続く縄文時代には仏並遺跡、小田遺跡から前期の土器が出土している。中期には万町北遺跡、箕土路遺跡等から土器が出土している他、槇尾川上流域の仏並遺跡では中期末から後期前半の竪穴住居址が多数検出されている。後期になると遺跡の数が増加し、府中遺跡、伯太北遺跡、板原遺跡、万町北遺跡等が知られている。晩期の虫取遺跡では船橋式縄文土器と、弥生時代前期の土器とが共伴している。

弥生時代に入ると、前期後半から後期に続く環濠集落として著名な、池上・曾根遺跡が営まれる。中期には池田下遺跡で竪穴住居址、方形周溝墓が検出されている。万町北遺跡でも中・後期に竪穴住居、方形周溝墓が営まれている。後期には丘陵上に観音寺山遺跡、惣ヶ池遺跡といったいわゆる高地性集落が出現する。

古墳時代には信太山丘陵上に黄金塚古墳、丸笠山古墳、東山丘陵上に摩湯山古墳といった前期の前方後円墳、中期に帆立貝式古墳である貝吹山古墳が造営される。後期には同じく信太山丘陵上を中心として信太山千塚古墳群が群集墳として出現する。また、5世紀初頭から須恵器の生産が開始された陶邑古窯跡群も信太山丘陵に展開している。集落遺跡としては前期の和気遺跡、府中遺跡等が知られる。大園遺跡では周辺地域に先行する中期の段階に、掘立柱建物を建築している点で注目される。後期の万町北遺跡、三田遺跡等では、竪穴住居から掘立柱建物への移行が確認されている。

7世紀中葉には当地に池田寺が建立され、これとほぼ時を同じくして信太寺、和泉寺、坂本寺、安楽寺が相次いで造営された。いずれも古代氏族の氏寺と想定されており、槇尾川流域に集中するのが特色である。安楽寺は承和6（839）年、和泉国分寺に昇格した。

和泉地方はもと河内国に属したが、天平宝字元（757）年にはここに和泉国が成立し、これ以後、池田寺遺跡は和泉国和泉郡池田郷の地に所在することになる。

奈良時代の遺跡としては和泉国府がある。和泉国府の明確な遺構は検出されていないが、和泉市府中町に所在したとされている。万町北遺跡では平安時代から鎌倉時代までの掘立柱建物で構成される集落が知られている。和気遺跡では平安時代から鎌倉時代へ続く掘立柱建物跡が多数検出されており、特に鎌倉時代のそれは明確な堀によって内外の建物が区画されていた。同様の堀の存在は福瀬遺跡でも確認されている。

なお、各時代ごとの主要遺跡の所在地、関連主要文献を第1表に示した。表の番号と分布図のそれとは一致する。

第2節 歴史的環境



(旧石器～縄文時代早期)

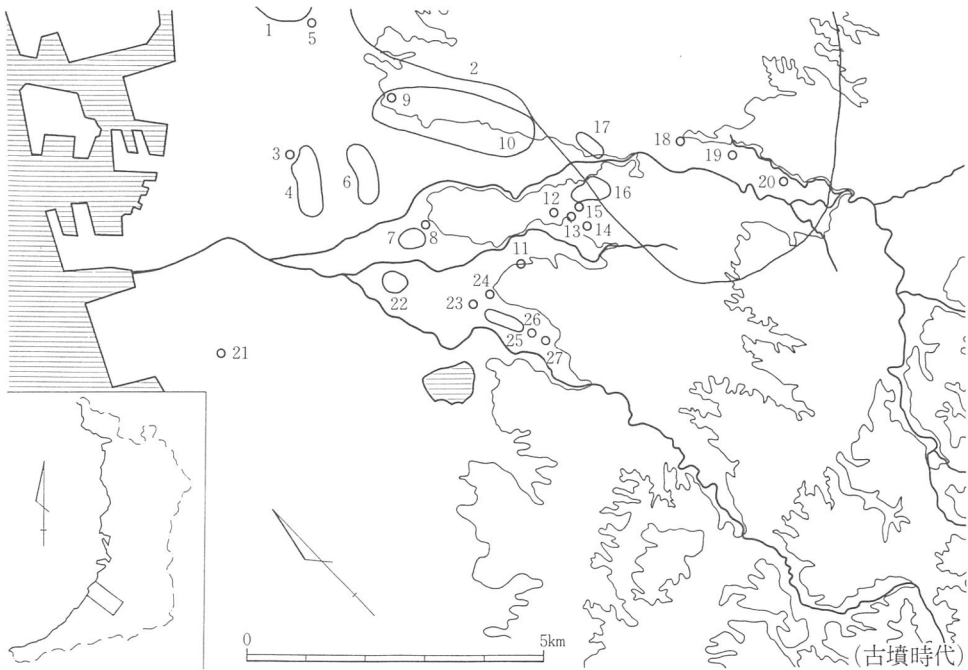


(縄文時代)

第3図 周辺遺跡分布図・1



(弥生時代)



(古墳時代)

第4図 周辺遺跡分布図・2

第2節 歴史的環境



(飛鳥～平安時代)



(中世)

第5図 周辺遺跡分布図・3

第 1 表 池田寺遺跡周辺遺跡分布図対照表

旧石器時代～縄文時代草創期 第 3 図上

No.	遺 跡 名	所 在 地	時 代	主 要 文 献
1	大園遺跡	高石市大園町	旧石器 ～縄文草創期	『大園遺跡発掘調査概報 2』大園遺跡調査会 1976 『大園遺跡発掘調査概要Ⅶ』大阪府教育委員会 1982
2	伯太北遺跡	和泉市伯太町	旧石器 ～縄文草創期	「旧石器時代の遺跡」『和泉市の文化財』和泉市 教育委員会 1984
3	和気遺跡	和泉市和気町	旧石器	「寺門地区」『和気遺跡発掘調査報告書』和気遺 跡調査会 1979
4	信太山遺跡	和泉市小野町	旧石器	『信太山遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化 財協会 1987
5	万町北遺跡	和泉市万町	旧石器	「石器」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅱ』和泉 丘陵内遺跡調査会 1983 「万町北遺跡の調査(A112地点・第1次調査)」 『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅲ』和泉丘陵内遺 跡調査会 1984 「万町北遺跡の調査(第3・4 次)」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅴ』和泉丘 陵内遺跡調査会 1986
6	栄の池遺跡	岸和田市西之内町	縄文草創期	『栄の池遺跡』岸和田遺跡調査会 1979
7	三田遺跡	岸和田市三田町	縄文草創期	『三田遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財 協会 1987
8	上フジ遺跡	岸和田市三田町	旧石器	『上フジ遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化 財協会 1988

縄文時代 第 3 図下

No.	遺 跡 名	所 在 地	時 代	主 要 文 献
1	虫取遺跡	泉大津市虫取	縄文晩期	広瀬和雄氏(大阪府教育委員会)御教示
2	板原遺跡	泉大津市板原	縄文後期	『第2阪和国道内遺跡調査概報-板原遺跡-』大 阪府教育委員会 1980
3	伯太北遺跡	和泉市伯太町	縄文後期	「縄文時代の遺跡」『和泉市の文化財』和泉市教 育委員会 1984
4	府中遺跡	和泉市府中町	縄文後期	『府中遺跡発掘調査概要・Ⅱ』和泉市教育委員会 1978 『府中遺跡発掘調査概要Ⅱ』大阪府教育委員会 1987 「府中遺跡」『府中遺跡群発掘調査概要・Ⅷ』和 泉市教育委員会 1988
5	池田下遺跡	和泉市池田下町	縄文後期	「池田下遺跡第1次調査の概要」『和泉丘陵内遺 跡発掘調査概要Ⅵ』和泉丘陵内遺跡調査会 1987
6	万町北遺跡	和泉市万町	縄文中～晩期	「A98・112地点(万町北遺跡)の調査」『和泉 丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅱ』和泉丘陵内遺跡調査 会 1983 「万町北遺跡の調査(第3・4次)」『和泉丘陵 内遺跡発掘調査概要Ⅴ』和泉丘陵内遺跡調査会

第2節 歴史的環境

No.	遺跡名	所在地	時代	主要文献
				1986 「万町北遺跡第5次調査の概要」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要VI』和泉丘陵内遺跡調査会 1987 「A111地点の調査の概要」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要VII』和泉丘陵内遺跡調査会 1989
7	池田寺遺跡	和泉市室堂町	縄文前～後期	本報告書
8	仏並遺跡	和泉市仏並町	縄文早・中・後期	『仏並遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1986
9	春木八幡山遺跡	岸和田市春木八幡町	縄文中～晩期	堅田 直『岸和田市春木八幡山遺跡の研究』岸和田市教育委員会・(財)古代学協会 1965
10	箕土路遺跡	岸和田市箕土路町	縄文中期	千地万造・石部正志編『岸和田市史』第1巻 岸和田市 1979
11	小田遺跡	岸和田市小田町	縄文前～晩期	『小田遺跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1990
12	軽部池西遺跡	岸和田市今木町	縄文後期	『軽部池西遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1987
13	山ノ内遺跡	岸和田市田治米町	縄文後～晩期	『山ノ内遺跡B地区・山直北遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1988
14	山直中遺跡	岸和田市山直中町	縄文晩期	『山直中遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1988

弥生時代 第4図上

No.	遺跡名	所在地	時代	主要文献
1	池浦遺跡	泉大津市池浦町	弥生前期	
2	虫取遺跡	泉大津市虫取	弥生前・中期	
3	穴師小学校校庭遺跡	泉大津市池浦町	弥生中期	
4	池上・曾根遺跡	和泉市池上町 泉大津市曾根町	弥生前～後期	『和泉市池上弥生式遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1967 『池上・四ツ池』第2 阪和国道内遺跡調査会 1970 『池上遺跡発掘調査概要・V』大阪府教育委員会 1975 『池上遺跡第2分冊 土器編』(財)大阪文化財センター 1979 『池上遺跡』仮称池上小学校予定地内遺跡調査会 1980
5	府中遺跡	和泉市府中町	弥生中・後期	『府中遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1985 『府中遺跡発掘調査概要・II』大阪府教育委員会 1987
6	惣ヶ池遺跡	和泉市小野町	弥生後期	『信太山遺跡調査概報』信太山遺跡調査団 1966 『和泉市信太山(鶴山台)惣ヶ池遺跡発掘調査概報』『鶴山地区 信太山遺跡(その2)調査概報』和泉市教育委員会 1970
7	和気遺跡	和泉市和気町	弥生中・後期	『和気遺跡発掘調査報告書』和気遺跡調査会 1979 『和気遺跡発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会 1985

No.	遺跡名	所在地	時代	主要文献
8	観音寺山遺跡	和泉市観音寺町	弥生後期	『和泉観音寺山弥生式遺跡発掘調査概要』観音寺山調査団 1969
9	池田下遺跡	和泉市池田下町	弥生中期	「池田下遺跡第1次調査の概要」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅵ』和泉丘陵内遺跡調査会 1987 「池田下遺跡第2次調査の概要」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅶ』和泉丘陵内遺跡調査会 1988 「池田下遺跡第3次調査の概要」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅷ』和泉丘陵内遺跡調査会 1989 『池田下遺跡』和泉丘陵内遺跡調査会 1991
10	万町北遺跡	和泉市万町	弥生中・後期	「万町北遺跡の調査(A112地点・第1次調査)」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅲ』和泉丘陵内遺跡調査会 1984 「万町北遺跡の調査(第2次調査)」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅳ』和泉丘陵内遺跡調査会 1985 「万町北遺跡第5次調査の概要」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅵ』和泉丘陵内遺跡調査会 1987 本報告書
11	池田寺遺跡	和泉市室堂町	弥生中期	
12	土生遺跡	岸和田市土生町	弥生後期	『土生遺跡第2次発掘調査概要』岸和田遺跡調査会 1975 『土生遺跡第3次発掘調査概要』岸和田遺跡調査会 1975 「土生遺跡発掘調査概要」『岸和田市文化財調査概要1』岸和田市教育委員会 1976
13	栄の池遺跡	岸和田市西之内町	弥生中期	『栄の池遺跡』岸和田遺跡調査会 1979 「土生遺跡他発掘調査概要」『岸和田市文化財調査概要5』岸和田市教育委員会 1980
14	下池田遺跡	岸和田市下池田町	弥生中・後期	近藤利由「下池田遺跡発掘調査の概要」『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会(第15回)資料』1986 『下池田遺跡第2次発掘調査報告』岸和田遺跡調査会 1987
15	箕土路遺跡	岸和田市箕土路町	弥生中・後期	『箕土路遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1987
16	西大路遺跡	岸和田市西大路町	弥生後期	『西大路遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1988
17	今木遺跡	岸和田市西大路町	弥生後期	『今木遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1989
18	小田遺跡	岸和田市小田町	弥生中・後期	『小田遺跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1990
19	軽部池西遺跡	岸和田市今木町	弥生中期	『軽部池西遺跡試掘調査概要報告書・II』大阪府教育委員会 1985 『軽部池西遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1987
20	山ノ内遺跡	岸和田市田治米町	弥生後期	『山ノ内遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1988

第2節 歴史的環境

古墳時代 第4図下

No.	遺跡名	所在地	時代	主要文献
1	大園遺跡	高石市大園	古墳中・後期	『大園遺跡発掘調査概報2』大園遺跡調査会 1976
2	陶邑 古窯跡群	堺市・和泉市	古墳中期～ 平安初期	『陶邑Ⅰ』大阪府教育委員会 1976 『陶邑Ⅱ』大阪府教育委員会 1977 『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会 1978 『陶邑Ⅳ』大阪府教育委員会 1979 『陶邑Ⅴ』大阪府教育委員会 1980 『陶邑Ⅵ』大阪府教育委員会 1988 「窯跡地点の調査」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅰ』和泉丘陵内遺跡調査会 1982
3	七ノ坪遺跡	泉大津市宮町	古墳前期	
4	豊中・古池 遺跡	泉大津市豊中町	古墳前期	
5	貝吹山古墳	和泉市太町	古墳中期	「貝吹山古墳」『府中遺跡群発掘調査概要Ⅱ』和泉市教育委員会 1982 「貝吹山古墳」『府中遺跡群発掘調査概要・Ⅴ』和泉市教育委員会 1985
6	府中遺跡	和泉市府中町	古墳前・中期	『府中遺跡発掘調査概要・Ⅱ』和泉市教育委員会 1978 「府中遺跡」『府中遺跡群発掘調査概要Ⅳ』和泉市教育委員会 1984 『府中遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1985 『府中遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会 1987
7	和気遺跡	和泉市和気町	古墳前期	『和気遺跡発掘調査報告書』和気遺跡調査会 1979
8	寺門古墳群	和泉市寺門町	古墳後期	「寺門古墳群」『和泉市の文化財』和泉市教育委員会 1984
9	丸笠山古墳	和泉市伯太町	古墳	「丸笠山古墳」『大阪府教育委員会月報』28-10 大阪府教育委員会 1976 「丸笠山古墳」『大園遺跡発掘調査概要Ⅲ』大阪府教育委員会 1976
10	信太千塚 古墳群	和泉市	古墳後期	「信太千塚」『考古学調査報告』第1冊 泉大津高等学校 社会科、生徒自治会地歴クラブ 1958 森 浩一編『和泉信太千塚の記録』和泉市市史編纂委員会・和泉市文化財保護委員会 1963 和泉市史編纂委員会編『和泉市史』第一巻 和泉市役所 1965
11	マイ山古墳	和泉市唐国町	古墳中期末 ～後期初	『和泉丘陵遺跡分布調査報告書』和泉丘陵遺跡分布状況調査会 1977
12	唐国池田山 古墳群	和泉市唐国町	古墳後期	森 浩一「大阪府和泉市唐国古墳」『日本考古学年報』 1963年に和泉市史編纂委員会が調査

No.	遺 跡 名	所 在 地	時 代	主 要 文 献
13	ウトジ池 古墳群	和泉市池田下町	古墳後期	『和泉丘陵遺跡分布調査報告書』和泉丘陵遺跡分布状況調査会 1977 「古墳の調査」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅸ』和泉丘陵内遺跡調査会 1990
14	明神原古墳	和泉市唐国町	古墳後期	「古墳の調査」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅳ』和泉丘陵内遺跡調査会 1985 「昭和63年度調査の概要」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅷ』和泉丘陵内遺跡調査会 1989 「古墳の調査」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅸ』和泉丘陵内遺跡調査会 1990
15	和泉向代 古墳群	和泉市池田下町 同 万町	古墳後期	「古墳の調査」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅳ』和泉丘陵内遺跡調査会 1985 「古墳の調査」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅷ』和泉丘陵内遺跡調査会 1989
16	万町北遺跡	和泉市万町	古墳後期	「万町北遺跡の調査(A112地点・第1次調査)」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅲ』和泉丘陵内遺跡調査会 1984 「万町北遺跡の調査(第2次調査)」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅳ』和泉丘陵内遺跡調査会 1985 「万町北遺跡の調査(第3・4次)」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅴ』和泉丘陵内遺跡調査会 1986 「万町北遺跡第5次調査の概要」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅵ』和泉丘陵内遺跡調査会 1987 「万町北遺跡第6次調査の概要」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅶ』和泉丘陵内遺跡調査会 1988 「万町北遺跡第7次調査の概要」他『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅷ』和泉丘陵内遺跡調査会 1989 「万町北遺跡の調査(第8・9次・A117地点第一・二次調査)」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅸ』和泉丘陵内遺跡調査会 1990
17	池田寺遺跡	和泉市室堂町	古墳中～後期	本報告書
18	和田古墳群	和泉市和田町	古墳中期末 ～後期	「和田第1号古墳」『府中遺跡群発掘調査概要Ⅱ』和泉市教育委員会 1982
19	三林古墳群	和泉市三林町	古墳後期	「三林古墳群」『和泉市の文化財』和泉市教育委員会 1984
20	黒石古墳群	和泉市黒石町	古墳後期	「和泉黒石1号墳石室実測調査報告書」『血沼』2 和泉考古学研究会 1983 「黒石古墳群」『和泉市の文化財』和泉市教育委員会 1984
21	春木八幡山 遺跡	岸和田市春木 八幡町	古墳	『岸和田市春木八幡山遺跡の研究』岸和田市教育委員会・(財)古代学協会 1965
22	小田遺跡	岸和田市小田町	古墳前～後期	『小田遺跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1990
23	山直北遺跡	岸和田市田治米町	古墳後期	『山ノ内遺跡B地区・山直北遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1988

第2節 歴史的環境

No.	遺跡名	所在地	時代	主要文献
24	摩湯山古墳	岸和田市摩湯町	古墳前期	梅原末治「泉南郡北部の古墳(上)」『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告第1輯』大阪府 1932
25	三田遺跡	岸和田市三田町	古墳前～後期	『三田遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1987
26	上フジ遺跡	岸和田市三田町	古墳	『上フジ遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1988
27	二俣池北遺跡	岸和田市包近町	古墳後期	『二俣池北遺跡・上フジ遺跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1989
—	黄金塚古墳	和泉市上代町	古墳前期	末永雅雄・森 浩一・嶋田 暁『和泉黄金塚古墳』1954

古代(飛鳥～平安時代) 第5図上

No.	遺跡名	所在地	時代	主要文献
1	和泉国府	和泉市府中町	奈良～平安	『和泉国府跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1966
2	府中遺跡	和泉市府中町	奈良～	『府中遺跡発掘調査概要・Ⅳ』和泉市教育委員会 1980
3	和泉寺	和泉市府中町	白鳳～平安	「和泉寺」『府中遺跡群発掘調査概要Ⅲ』和泉市教育委員会 1983
4	坂本寺 (禅寂寺)	和泉市阪本町	飛鳥～平安	石田茂作「禅寂寺」『飛鳥時代寺院址の研究』1936 『禅寂寺(坂本寺)跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1966
5	池田寺	和泉市池田下町	飛鳥～平安	本報告書第1章第1節参照
6	万町北遺跡	和泉市万町	奈良～平安	「万町北遺跡の調査(A112地点・第1次調査)」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅲ』和泉丘陵内遺跡調査会 1984 「万町北遺跡の調査(第2次調査)」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅳ』和泉丘陵内遺跡調査会 1985
7	松尾寺	和泉市松尾寺町	白鳳～室町	「松尾寺」『和泉市の文化財』和泉市教育委員会 1984
8	和泉国分寺 (安楽寺)	和泉市国分町	飛鳥～平安	藤沢一夫「安楽寺即和泉国分寺と其瓦」『和泉志』9・10 1954
—	槇尾山 施福寺	和泉市槇尾山町	奈良～室町	「槇尾山施福寺」『和泉市の文化財』和泉市教育委員会 1984
—	信太寺跡	和泉市上代町	飛鳥～平安	『信太寺跡発掘調査概要』和泉市教育委員会 1979 『観音寺遺跡発掘調査報告書』大阪府教育委員会 1982

中世 第5図下

No.	遺 跡 名	所 在 地	時 代	主 要 文 献
1	大園遺跡	高石市大園町	中世	『大園遺跡発掘調査概報2』大園遺跡調査会 1976
2	池上・ 曾根遺跡	和泉市池上町	中世	
3	和気遺跡	和泉市和気町	平安末～鎌倉	『和気遺跡発掘調査報告書』和気遺跡調査会 1979 『和気遺跡発掘調査報告書II』和気遺跡調査会 1981
4	池田下遺跡	和泉市池田下町	中世	
5	万町北遺跡	和泉市万町	鎌倉	「万町北遺跡の調査(第2次)」『和泉丘陵内遺 跡発掘調査概要IV』和泉丘陵内遺跡調査会 1985
6	池田寺遺跡	和泉市室堂町	鎌倉～室町	本報告書
7	万町遺跡	和泉市万町	鎌倉～室町	「A100・117・119、C5・6地点の調査」 『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要III』和泉丘陵内遺 跡調査会 1984 「万町遺跡第二次調査の概要」『和泉丘陵内遺跡 発掘調査概要IX』和泉丘陵内遺跡調査会 1990 『万町遺跡』和泉丘陵内遺跡調査会 1991
8	福瀬遺跡	和泉市福瀬町	鎌倉～室町	『福瀬遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財 協会 1989
9	箕土路遺跡	岸和田市箕土路町	鎌倉～室町	『箕土路遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化 財協会 1987

第II章 調 査

第1節 既往の調査

池田寺遺跡は、和泉市池田下町所在の「明王院」の一带と、隣接する室堂町に広がりを持つ遺跡である。遺跡の名称は、かつてこの地に存在した古代寺院「池田寺」に由来している。明王院は池田寺跡に建つ真言宗の寺院で、池田寺の遺構の一部と考えられている。

文献からみると、池田寺については「和泉名所図会」に記載があり、行基の開基と伝えられている。金堂等の伽藍は南北朝時代の戦火にあい、明王院一坊を残してすべて灰燼に帰したという。また現在の明王院は、明徳年中（1390～1394年）に池田寺を墳寺とする池田氏が再興したと記されている。

当地に古代の瓦が散布することは早くから知られていた。地形の現況や採集された古瓦から、池田寺を法起寺式伽藍配置と推定し、その建立時期を飛鳥時代末期を下るものではないとした著名な研究がある。^{註2)}

池田寺遺跡には、1978年以降これまでに複数の機関が発掘調査のメスを加えている。既往の調査を含め、今回の調査区位置図を示した（第6図）。

本格的な発掘調査は、大阪府教育委員会によって1978～1980年に実施されたものが最初で、多大な成果があげられている。^{註3)} 調査は推定寺域を含む明王院の北側一帯の地域についておこなわれた。その結果、7世紀初頭から9世紀前葉、14世紀に経営された、合計81棟に及ぶ掘立柱建物跡が検出された。また瓦窯、大溝等の遺構も検出されている。寺院に関しては伽藍等の遺構は確認されなかったものの、灌漑用と推定される東西方向に延びる中世の大溝の位置が、池田寺の推定寺域の北限とほぼ一致している点で注目される。また調査で出土した瓦から、池田寺の創建は7世紀中葉であり、平安時代には衰退することが判明した。また創建当初の瓦の中には「池田」、「堂」のへら描きのある平瓦が含まれており、池田寺が「新撰姓氏録」にみえる当地一帯を支配した古代氏族、池田首の氏寺として建立されたことを示唆している。また、今回の調査区域の東側で、狭い面積ながら調査がおこなわれており、6世紀末から7世紀初頭の時期になると推定される「方形堅穴遺構」の一部、及び同時期の掘立柱建物跡2棟が検出された。

さらに1980年には、和泉市教育委員会が明王院の南東約50mの地点で発掘調査を実施し

註4) ている。この調査では、6世紀末から7世紀初頭の溝、鎌倉時代以降の掘立柱建物跡が2棟検出されている。

1981～1982年、大阪府教育委員会が再び発掘調査を実施した。註5) 調査地は明王院の南東約200mの地域であるが、近世の削平により中・近世の遺構を僅かに検出したにとどまった。

1987～1989年にかけては、当協会が2次にわたって発掘調査を実施した。註6) 調査地は明王院の南東約150mの区域である。その結果、6世紀末から7世紀初頭の土壌、8世紀後半の溝、9世紀中葉の掘立柱建物跡9棟や井戸が検出された。従前の調査結果と比較してそれまで明王院の北側に展開していた集落が、9世紀中葉に寺域の東側に移動した可能性を指摘した。また、6世紀末から7世紀初頭の包含層が確認され、当該時期の遺構が付近に存在したことが推測されている。

以上、断続的ではあるが、ある程度まとまった調査により、池田寺の創建と維持経営に関与したと解される集落の実態が徐々に明らかとなってきた。しかしながら、周辺地域の調査が進められる反面、寺域内については調査面積が限られていることもあって、池田寺の伽藍等、寺院に直接関係する遺構については、いまだ不明な点が多い。



第6図 調査区位置図

第2節 調査に至る経緯

池田寺遺跡は、古代瓦を散布することで早くから知られている周知の遺跡である。

関西国際空港建設事業が軌道に乗り、周辺路線の整備が急務となってきたなか、近畿自動車道松原海南線・都市計画道路泉州山手線の建設も空港建設関連事業として具体的な日程が生まれ、またその周辺地域開発に呼応して和泉中央丘陵新住宅市街地開発事業の構想も具体化することとなった。

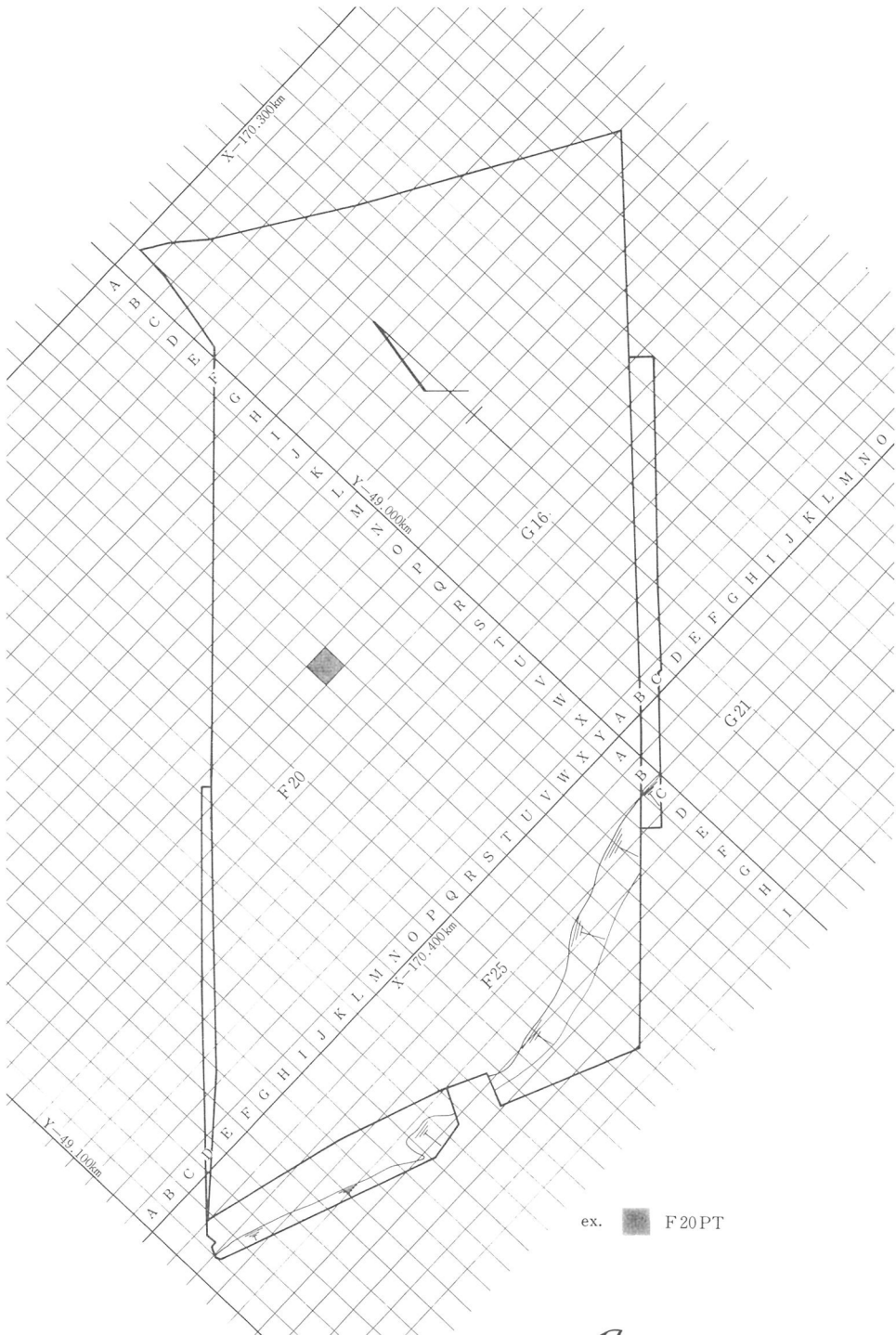
これらの建設・開発事業は遺跡範囲内に予定されており、大阪府教育委員会は全面的な発掘調査の必要を認めた。事業に先立ち大阪府教育委員会の指示により、日本道路公団・大阪府鳳土木事務所・住宅都市整備公団・財団法人大阪府埋蔵文化財協会の四者間で1988年4月1日付をもって発掘調査委託契約を締結、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が現地調査を担当する運びとなった。しかしながら、地元自治体との間に環境保全等の問題で軋轢が生じたため、1988年度には本格的な調査を実施できず、1989年4月1日、再び契約を締結して調査に臨むこととなった。現地における発掘調査は、1989年5月8日に開始、1990年3月24日に終了した。また、この調査で未調査部分として残された官民境界部分については、再び当協会が1990年9月8日に現地調査を開始し、同年12月25日に終了した。遺物整理・報告書作成等の作業は、以上2次にわたる調査をあわせて実施することとし、1990年4月1日より開始、一部は現地調査と併行して進め、1991年11月30日に本報告書の刊行をもって終了した。

第3節 調査・整理の方法

第1項 調査の方法 付図 第7図

現代表土層・現代整地層は機械力で、それより下層については人力で発掘し各層毎に遺構・遺物の検出に努めた。この手順で基本的には最終遺構面である無遺物層まで発掘をおこなったが、3268-O B周辺の一部の調査地は遺構保存のため、第5 b層を掘り下げている。調査地の地区割りは第7図に示したとおりで、調査・報告に際しての地区の呼称はすべてこれに従っている。

検出された柱穴遺構については掘形内埋土の上層で柱痕跡の検出につとめたが、柱痕跡の発掘は上部5 cm程度にとどめ、写真撮影・実測後に断ち割りや底面近くでの再確認をお



第7図 池田寺遺跡(3)・(5)地区割り図

第3節 調査・整理の方法

こない、平面図・断面図の完成をおこなった。その結果、上部で検出した柱痕跡が誤認であったことが判明した例が少なからずあったし、断面観察では柱痕跡が確認できない場合でも、底面に鉄分や灰白色粘土が柱材の大きさで沈着していることが観察され、柱材の位置・規模を正確に知ることができる例が間々あった。また、掘形内の底を埋めて柱材の寸法あわせをおこなった例も知ることができた。

第2項 整理の方法 第8図

出土遺物の内容の把握のため、遺物の収納単位毎に遺物の種類・器種を計数した遺物登録台帳を作成したが、遺物の収納単位が計7108に達したため、台帳及び遺物の集計・管理・検索にはパソコンを使用した。なお、遺物登録台帳でカウントした数値はすべて遺物の破片数で、これには発掘調査中に破砕した破片数も含まれている。

A. パソコンの使用

使用したパソコンはNEC PC-9801で、目的別に作成した4種類のデータファイルをインフォミックスver3.3により作成・利用した。

収納された遺物の基礎的管理のため四項目からなるファイル（第8図1）を作成した。これは遺物登録台帳のインデックスに相当するもので、四項目夫々からの検索が可能であり、遺物の接合作業には大いに役立った。

次に第8図2のファイルを作成した。これは遺物台帳の簡略化版である。出土遺物の統計処理のほか、特定の時期を代表する遺物の出土遺構・層位を検索することに共された。このファイル中の瓦器系土器とは瓦質焼成による摺鉢・甕・羽釜を、須恵器系土器とは播磨産の甕・鉢で、土師器系土器とは土釜・皿類を指す。いずれも器形・製作手法・胎土・焼成の状況で他の遺物との識別が比較的容易で、しかもかなり短期間の時期を代表する遺物と言える。その他の項目に分類したのは、石製品・土製品・銭貨・国産陶磁器や種類不明の遺物である。

遺構の時期を把握するためには第8図3のファイルを作成した。これは検出した遺構数が計3500を超えたため、すべての遺構別に遺物を収納することが著しく困難であったためである。これによる遺構年代の検索は、指定した時期より新しい時代の遺物を出土していない遺構を表示させることによっておこなった。無論、最終的な遺構の時期決定には、検出面・重複する遺構との比較・混入遺物の可能性・埋土の状況等の総合的な検討が必要なことは言うまでもない。

***** 池田寺遺跡(その3) 遺物登録台帳 *****

登録番号	[0]	地区名	[]
遺構番号/層位	[]	遺構種類	[]
備 考	[]		

1.

***** 池田寺遺跡(その3) 遺物登録台帳 *****

登録番号	[0]	地区名	[]
遺構番号	[]	層 位	[]
須恵器 [0]	土師器 [0]	瓦器 [0]	瓦器系 [0]
須恵系 [0]	土師系 [0]	弥生土器 [0]	縄文土器 [0]
石器・剥片 [0]	瓦 [0]	陶磁器 [0]	その他 [0]

2.

***** 池田寺遺跡(その3) 遺構年代 *****

遺構番号 []			
縄文 []	登録 []	遺物 []	
弥生 []	登録 []	遺物 []	
7 C初 []	登録 []	遺物 []	
7 C中 []	登録 []	遺物 []	
7 C後 []	登録 []	遺物 []	
7 C代 []	登録 []	遺物 []	
8 C前 []	登録 []	遺物 []	
8 C後 []	登録 []	遺物 []	
8 C代 []	登録 []	遺物 []	
7・8 C []	登録 []	遺物 []	
9～11C []	登録 []	遺物 []	
11C以前 []	登録 []	遺物 []	
中世 []	登録 []	遺物 []	

3.

池田寺遺跡(3)

カードNo.[] v 2. 0

挿図番号 []	報告書挿図遺物番号 []	
図版番号 []	報告書図版遺物番号 []	
登録番号 []	枝番号 []	実測遺物番号 []
実測図面番号 []	写真登録番号 []	
収納場所 []-[]-[]	コンテナ番号 []	
<メモ>		
遺物種類 []	遺物名称 []	
遺構番号(層位) []-[]		
備 考 []		

4.

第8図 パソコンのファイル

報告書作成後の遺物・図面・写真の管理には第8図4のファイルを使用した。これは当協会ではすでに使用され始めているシステムである。

第3項 遺物の分類と用語

出土遺物のうち数量の多い縄文土器ならびに7・8世紀の須恵器については極力分類し、分類結果と出土状況や遺物自体の持つ諸属性との有機的関連を検討するように努めた。以下に本書で使用した遺物の分類概念や用語について説明する。

A. 縄文土器

小破片資料の多い縄文土器については、土器のもつ諸属性をいったん分解して、複数の属性で構成される土器の類似度を知ることを念頭にして遺物一覧表を作成した。以下、一覧表並びに本文で使用した分類概念・用語の説明をおこなう。

口縁部・口唇部の形態 第9図

口縁部の形態は平口縁と波状口縁に大別できる。平口縁には口縁部が段をなすものと直線的なものがある。前者を平口縁1、後者を平口縁2と称する。波状口縁には波頂部が台形状または凹形をなすものと、波頂部が三角形をなすものがある。前者を波状口縁1、後者を波状口縁2とする。波状口縁2の波頂部には口縁部の文様から独立した沈線文を加えたものが相当数ある。これを波状口縁2 aとし、このような沈線文のないものを波状口縁2 bとする。なお、小破片のため口縁部の基本形態が何れとも決め難いものは、図面上では平口縁の扱いをしている。

口唇部は、肥厚するものと肥厚しないものがある。肥厚するもののうち、内面に稜が付くものを肥厚1、丸みを帯びたものを肥厚2、外方に拡張されたものを肥厚3とする。

文様

文様の構成単位・文様の用語と分類について幾つか定義しておく。なお、縄文原体の種類を表記法は単節R・L、複節R・L、無節r・l等とした。

1. 沈線区画縄文帯

資料中最も多く見られるのは、沈線で器面の区画をおこない、縄文を充填した区画と無文のままの区画で文様を構成するものである。同種の文様には、区画外にはみ出した縄文が一部に残っていたり、沈線との切り合い関係から、予め沈線で区画されたことが明らかなる例が多数認められる。そして、そうした痕跡を留めない資料には、沈線で区画された文

様帯の曲線に合わせて縄文原体を回転させ施文した例が多数確認できる。これについても予め沈線による区画がなされた可能性が強く、両者の違いは区画外に縄文がはみ出すか否か、または、はみ出し部分の調整が丁重か否かの差である公算が大であろう。つまり、本資料においては、この種文様の施文方法は、沈線による区画後に縄文を充填したものといえる。

こうした施文技術で施された文様のモチーフのうち、複雑なモチーフのものは「磨消縄文」と称され、後期を代表する文様とされている。一方、本資料中にはこれと同じ文様単単位で構成されながら、モチーフがシンプルで「磨消縄文」の範疇に含めにくいものが多く認められる。両者の差異はとりもなおさず縄文帯と無文帯の関係の深さの相違とみることができ、その相違にはモチーフを印象付ける縄文帯と無文帯の重層度のみならず、文様の構成単位の完結性も起因しているものと思われる。本書ではこの点に着目して同種文様の付く土器を分類・把握することにする。この作業のために本書では、同種文様の単位を沈線区画縄文帯と称することにする。あまり適当な用語とは思えないが、様式的概念の色彩の強い「磨消縄文」という用語と区別する必要があるからである。「磨消縄文」という場合には後期の様式的特徴を完備したものという意味で使用する。

2. 沈線区画縄文帯の分類 第9図

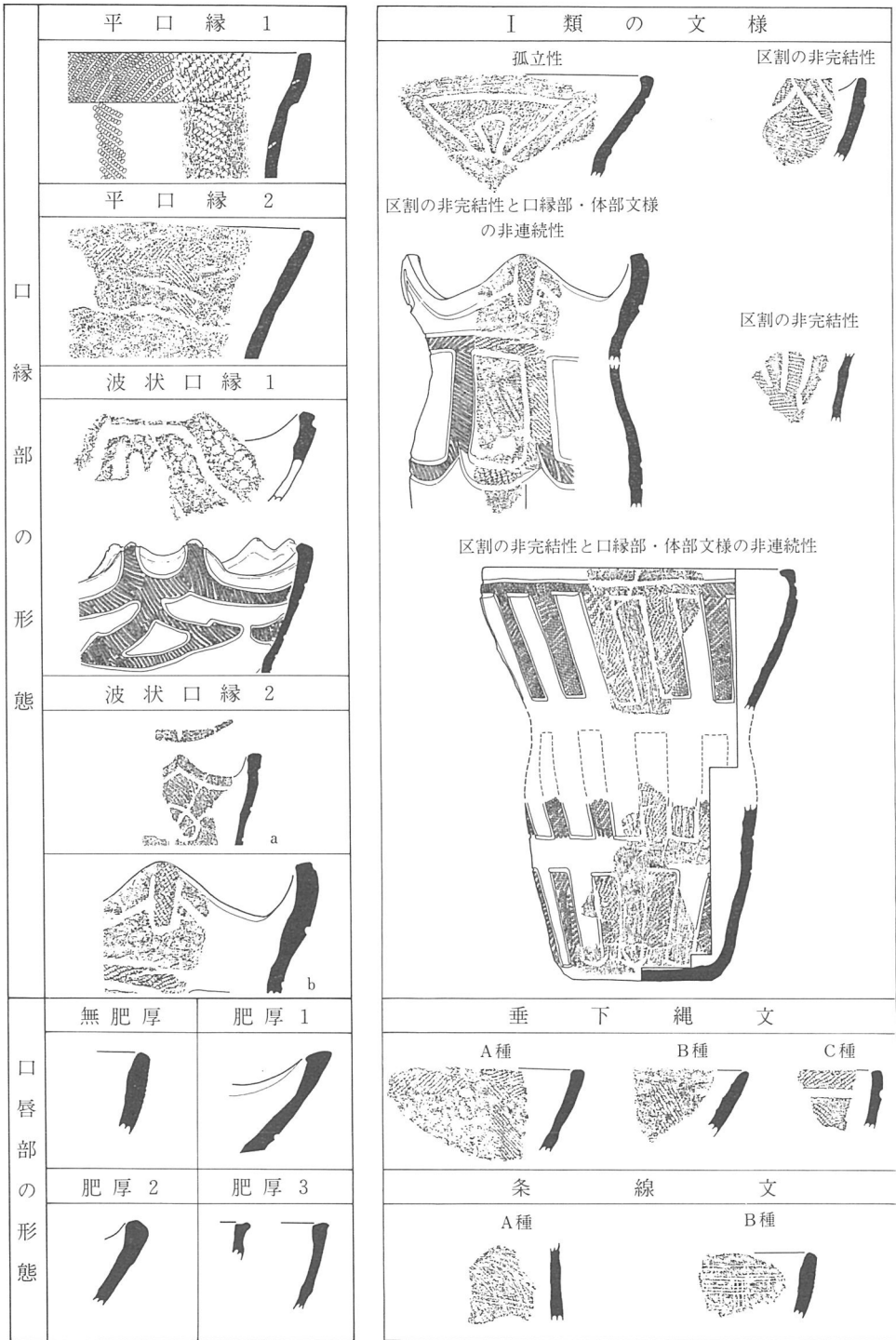
I類

沈線による区画文と縄文がありながら、縄文と無文部分の境目に沈線がなかったり途切れているもので、縄文の充填された区画と無文区画の境目が明瞭でないもの。両区画の境目は明瞭であるが、口縁部と体部の文様体が連続していなかったり、縄文の充填された区画が無文部分の中で孤立した文様を示しているものなどである。総じて無文帯の文様構成上の地位が低く、シンプルなモチーフが多い。

II類

いわゆる二本沈線の磨消縄文。縄文の充填された区画と無文の区画の境目が明瞭で、両区画があいまって文様を構成している。I類に対してモチーフは複雑で曲線的な文様を多用する。文様構成上の無文帯の地位が高く、無文帯で「J」字状などの文様を表現する例もある。完形に近い資料では口縁部から体部の文様は連続することが確認できる。「磨消縄文」として定型化した「J」字状・紡錘状もしくは「O」字状・鋬頭状等のモチーフが確認でき、中津式の古い段階の平行期といえる資料が多い。

なお、この分類に則した個々の遺物についての具体的説明は本文中でおこなう。



第9図 縄文土器の分類

3. 垂下縄文 第9図

口縁部から体部にかけて縄文帯が垂下する文様構成のものを指す。このうち、口縁部に横位の縄文帯があるものをA種、横位の縄文帯がないものをB種、これらに沈線文が付加されたものをC種とする。C種には他のモチーフを構成する可能性の高いものは含まない。

4. 条線文 第9図

条線文のうち櫛歯状原体の使用が想定できるものをB種、そうでないものをA種とする。

B. 須恵器・土師器

須恵器・土師器の器種分類については、基本的には飛鳥・藤原宮及び平城宮^{註7)}の分類に従っているが、須恵器の高杯には独自に命名したものもある。従って、器種名について以下簡単に記述する。

須恵器の主要な器種 第10図

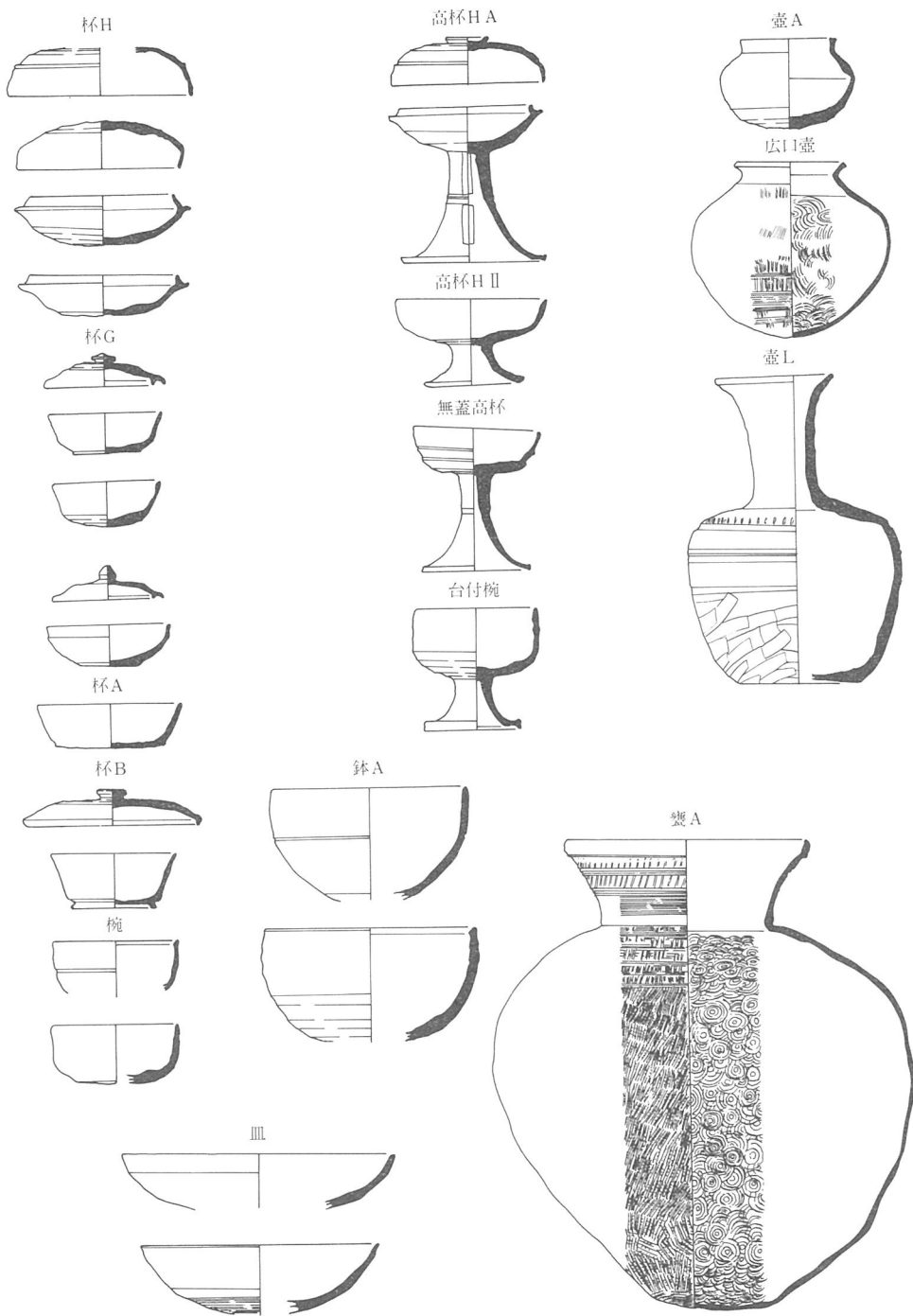
杯H 古墳時代以来の器種で、かえりのある身と蓋とがセットをなす。今回の出土資料中でも最も多数を占める。

杯・蓋Hは底部・天井部の最終処理の違いで三類に分けられる。底部・天井部を回転ヘラケズリにより丸く仕上げているのをa類、ヘラギリ不調整のものをc類、両者の中間的な手法といえる底部・天井部の外周部の狭い範囲だけに回転ヘラケズリを施すものをb類とする。c類は当然のことながら底部・天井部が扁平な器形である。a類が最も多数を占めるが、b・c類とも相当数があり、定量的に確認される。

杯G 金属器模倣形態の蓋杯で飛鳥Iの段階に出現する。杯の器形は口縁部の立ち上がりかたの違う二形態がある。一つは平底と垂直に近い角度で立ち上がる口縁部を特徴とするもので、もう一つは口径と底径の差が大きく、小さな平底から「S」字状に屈曲する口縁部を特徴とする。後者は溝状遺構206-O Sから多数が出土した器形で、口径が9.4~11.4 cmとよくまとまっている。両者とも底部の最終処理の違いで杯Hと同様にa・b・cの三類に分けられるが、切り離し後に底部に簡単なナデ調整を加えた例がある。これについては分類上はc類に含めている。蓋は宝珠形ないしは乳頭形の摘みと、かえりが付くことが特徴である。

杯A 平底と直線的に立ち上がる口縁部をもつ、杯Gに比べると径高指数が小さく扁平である。

杯B 杯Aの有台形態。摘みのある蓋はかえりのあるものとないものがある。



第10図 須恵器の主要な器種

碗 金属器模倣の器形である。丸みのある底部から垂直あるいは内傾気味に口縁部が立ち上がる。口径と底径の差が殆どなく、径高指数が大きい。口縁部中位に凹線を巡らせたものと、凹線を欠いたものがある。

鉢 金属器模倣の器形である。いわゆる鉄鉢形と称される器形、碗の一形態をスケールアップしたもの、口縁部の外傾度の高いもの、など多様な器形がある。同じ器形で口縁部中位に凹線を持つものと持たないものがある。鉄鉢形の器形には平底のものと尖り底のものがある。

皿 口径20cm以上のものが多く、底部に回転ヘラケズリを施し、丸底である。

高杯H 杯Hの蓋もしくは身に脚が付加されたもので有蓋・無蓋形態がある。脚部の長さで二つに分けられ、長脚のものをI類、短脚のものをII類とする。杯部底の最終処理の違いにより杯Hと同様a・b・cの三類に分類され、これらの分類項目の組み合わせにより、例えば高杯H a I類と表示することができる。高杯H I類の透かしは二段二方向が基本であるが、透かしの無いものや三方・四方透かしも稀にある。また脚端部には、凹面をなすものと、内側に屈曲する二形態がある。

無蓋高杯 長脚無蓋形態で、杯口縁部は直線的に立ち上がり、口縁部に二条の突線を巡らせるが波状文の付いたものはない。脚部は長脚二段二方向透かしが基本であるが、まれに透かしの無いものや三方透かしがある。

台付碗 碗に短い脚の付いたもので、金属器の模倣形態である。

壺A 口縁部が直立する短頸壺。口縁端部の形態には数種のバリエーションがある。

広口壺 口縁部が「く」字状に外反する短頸壺。口縁端部の形態は数種に分けられ、なかには二重口縁をなすものもある。

壺L 長頸壺。有台形態と無台形態のものがあり、口縁端部の形態にも相違がある。

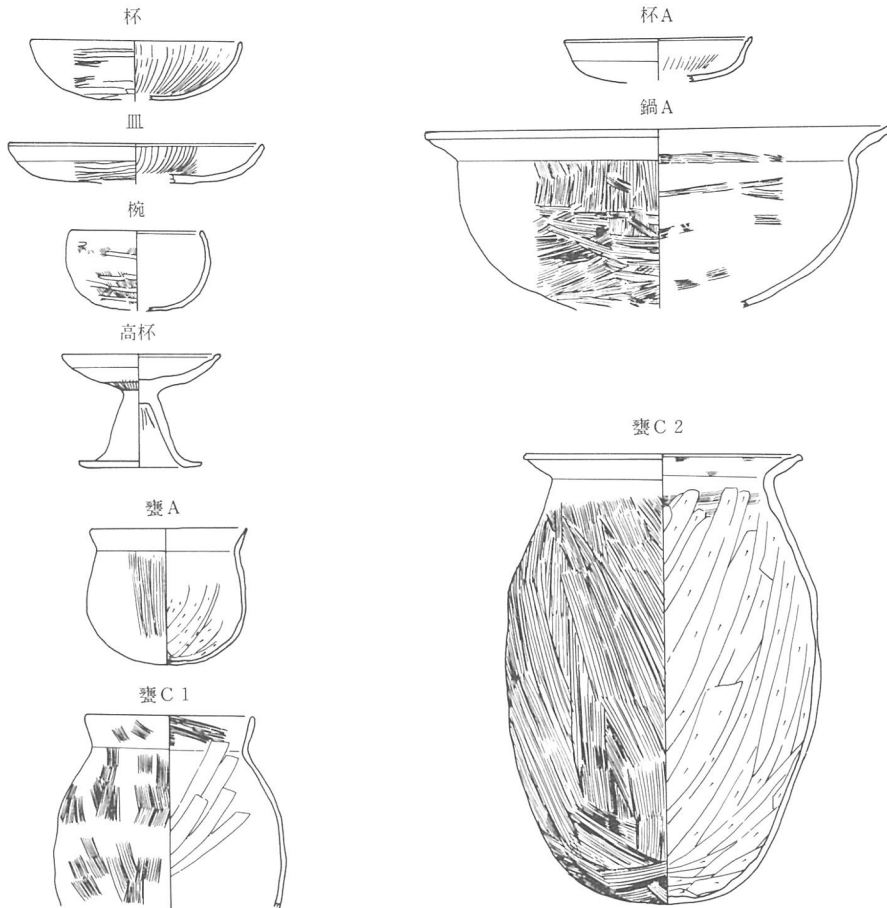
甕A 口縁部が長く大きく外反し、体部はリング果実形をする。口縁端部の形態は数種に分けられる。

土師器の主要な器種 第11図

土師器は須恵器に比べると資料数が少なく、遺存状況も悪い。従って器形の全体や手法を知ることのできる資料は限られている。

杯 平底から口縁部が内湾しながら立ち上がる。金属器模倣形態の土器で、放射暗文をつけたり器面にヘラミガキを施す。

皿 杯に比べて口径が大きく、器高が低い。暗文やヘラミガキの状況は杯と同様である。



第11図 土師器の主要な器種

碗 口径に対して器高が高い。金属器模倣形態の器形で、器面にヘラミガキを施した例が確認される。

高杯 A 上記の三器種が何れも金属器の模倣形態の器形であるのに対して、図示したのは伝統的器形の範疇にあるといえる。なお、杯部の口径が大きく器高が低く、暗文をつけたものも少数ある。

杯 A 平底から口縁部が「S」字状に立ち上がる。平城宮域の杯 A と違い、口縁端部を「巻き込む」かわりに凹線を巡らせたものが主である。遺存状況が悪く図示していないが杯 A の有台形態の杯 B や、杯 A に対する径高指数の低い皿 A、及びその有台形態である杯 B もある。

甕A 球形の体部をもつ小型の甕。

甕C 長胴形の甕で口縁部が直立気味のもの、口縁部が大きく外反するものがある。前者をC1、後者をC2とする。C2には口縁端部を拡張したものが多く、「巻き込み」のものはない。

鍋A 口縁部の状況は甕C2と同様である。なお、小型の同じ器形のもので舌状の把手が付く鍋Bも少数ある。

須恵器・土師器の編年・年代観

第14図に示したように出土資料中最も多数を占めるのは須恵器であり、器種の判明した須恵器のなかの五割近くを占めるのは杯・皿類である。この杯類について見てみると杯Hの法量は口径8～16cm・器高2.4～5cmの範囲にあり、蓋の口径・器高は夫々9.4～16.3cm・2.6～4.6cmにある。口縁部と天井部の境目に稜や凹線をつけた蓋は極めて少数で、大多数は天井部と口縁部の境目が不明瞭で、なだらかに連続する。身の立ち上がりは内傾しており、立ち上がりの高さは0.6～0.8cm程度で低い。また、杯・蓋とも口縁部内面に段を持つものはない。

従って、今回の出土資料の杯Hは陶邑窯跡群のTK-10・TK-43・TK-209・TK-217の四型式^{註8)}に納まるものといえる。そして、以降TK-7型式に至る杯G・A・Bが夫々相当数出土している。その他の須恵器も当然のことながらこの型式差のなかに含まれている。土師器についても、この須恵器の年代観を遡るものはなく、9世紀から中世にかけての資料が少数あるだけである。つまり、今回出土したこれらの遺物の大方は、6世紀後葉～8世紀にかけてのものといえる。

ところで、飛鳥・平城宮域での研究により、およそ6世紀後葉から8世紀代にかけての土器編年^{註9)}は提示されており、これにより本書で扱う須恵器・土師器の殆どが網羅されることになる。そこで、本書ではこの時期の遺物には飛鳥・平城宮の土器編年を適合させて記述する。ただし、飛鳥IからIIにかけての須恵器については、第4章で試みた検討結果に従っている。詳しくはそれを見て頂きたいが、大筋では飛鳥Iの時期については、金属器模倣形態の須恵器の出現をメルクマールにし、その形態変化ならびに連関する杯Hの変化を以て当該期を古・新段階に二分して考えることにしている。

陶邑窯の型式編年でいえば、飛鳥I古段階とするものには陶邑窯TK-43・209型式が、新段階とするものにはTK-217型式が概ね相当する。そして、TK-10型式の須恵器及び平行する土師器については、飛鳥I前段階として年代観を示すことにするが、純粋な当

第3節 調査・整理の方法

該時期の可能性のある遺構は極めて少数である。9世紀以降の須恵器あるいは土師器については、近年の成果から最も適切な編年観を選択し、各々の項で明記し記述する。

註)

1. 秋里 籬嶋 編『和泉名所図絵』1796
2. 石田 茂作「池田寺」『飛鳥時代寺院址の研究』1936
3. 「池田寺遺跡発掘調査現地説明会資料Ⅰ」大阪府教育委員会 1979
「池田寺遺跡発掘調査現地説明会資料Ⅱ」大阪府教育委員会 1979
広瀬 和雄「池田寺遺跡における7、8世紀の集落構成」『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会（第2回）資料』1980
4. 「池田寺跡」『府中遺跡群発掘調査概要』和泉市教育委員会 1989
5. 「池田寺跡、須恵器窯跡発掘調査概要」『泉北丘陵内遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1982
6. 『池田寺遺跡発掘調査報告書』大阪府教育委員会・（財）大阪府埋蔵文化財協会 1989
『池田寺遺跡Ⅱ』大阪府教育委員会・（財）大阪府埋蔵文化財協会 1990
7. 『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所 1978
8. 『陶邑窯跡群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966
9. 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所 1978
西 弘海「法隆寺出土の土器」『土器様式の成立とその背景』真陽社 1986
『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所 1978

第Ⅲ章 調査成果

第1節 層序

第1項 旧地形 付図 第13図

当該調査地は巨視的には槇尾川の形成した河成段丘上に立地している。発掘調査の結果、調査地のほぼ全面で多くの遺構を検出した。このことは後世の地形改変が然程のものではなかったことを示していよう。従って発掘調査の結果から調査地の古い微地形をある程度知ることができる。それは、地層の堆積や遺構の分布の状況と有機的な関連を持つもので、遺跡を考えるうえで重要な要素となるので、ここで触れることにする。

調査地の北西部で真北方向に延びる幅約14mの小規模な谷状の地形と、南部の段丘崖が内湾する部分から北東に延びる谷状の地形を検出した。後者は主たる部分が調査区域外にあるため、その規模は不明である。その他、調査区の北東隅に小規模な窪地状の地形を検出している。

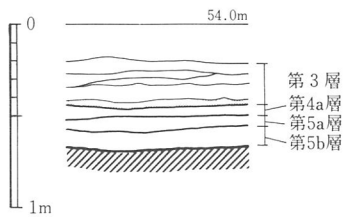
これらの谷状地形及び窪地状地形の調査区域内における最深部の標高は、北西部の谷状地形が約53.2m・南部の谷状地形が51.0m以下・北東部の窪地状地形が約53.3mである。その他の調査区の部分は標高約53.3m～53.7mを測るほぼ平坦な地形を呈しているが、その大部分は第13図に示したように遺構検出面で段丘礫層が露呈している。このことと、調査区南側の段丘礫層が完全に露呈している部分の遺構が、概して浅いことを合わせ考えると、この部分は嘗ては現状より高かったことが推察でき、谷状・窪地状の地形から段丘崖にかけては微高地状の地形であったものと思われる。

以上が発掘調査の結果から復原される調査地の旧地形である。遺物包含層は専ら谷状地形とその緩斜面及び窪地状地形に遺存しており、後に記述する水田遺構の区画もまた、一定程度は旧地形に規制されたものであった。

第2項 基本層序 第12・13図

第1層は現代の地表面を構成する層で、近年までの耕作・工場の造成に関わる地層及び最近の盛り土などである。第2層は現代の耕作面を支持する層で、現代耕作面の床土及び現代の耕作面を造成するための整地層である。この整地層は調査地南端の旧溜池部分に顕

第1節 層序



第12図 標準土層（F20LX付近）

著にみられ、これについては人力で発掘をおこなった。

第3層の主たる部分は埋没していた水田遺構の耕作土である。砂泥化したシルト質土で、下部に約3cm厚の鉄分沈着層が顕著である。最大で約40cmの層厚を測るが、層中に一～二層の約5cm厚の鉄分沈着層が水平に堆積していることが観察でき、

二面以上の耕作面が確認できる。この層から出土した遺物は概して摩耗の度合いが著しい。水田遺構については後述する。

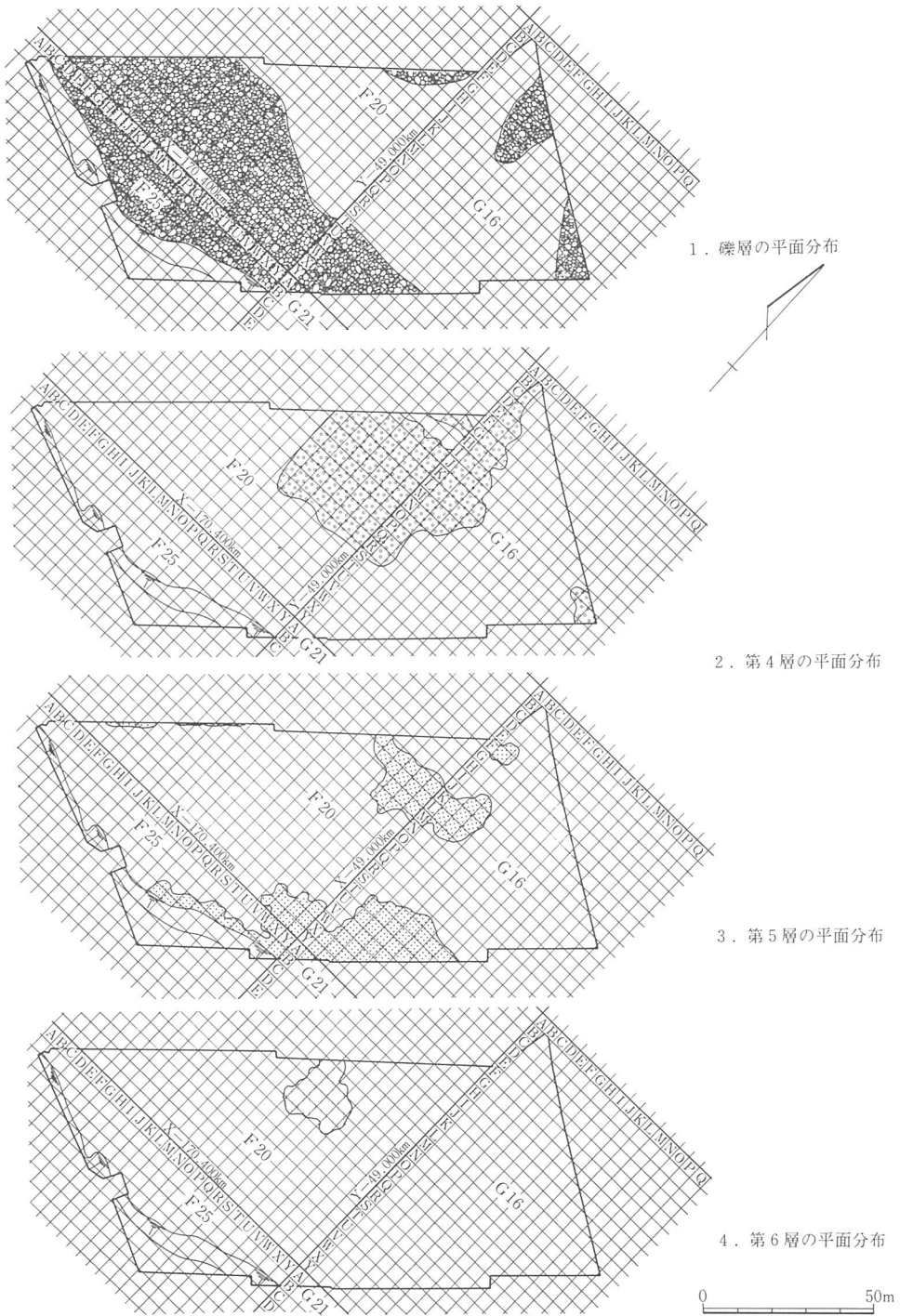
また、南部の谷地形の部分には下部の鉄分沈着層を欠いた第3層の堆積が認められる。この層中に包含される遺物の時期は第3層と同じであるが、摩耗の度合いは然程ではない。遺物の摩耗の度合いと下部の鉄分沈着が認められないことを勘案すると、この第3層は水田耕作を受けていない状態のものと判断される。そして、その一部は10cm大の円礫を多量に包含していることから、水田化のおりの整地土層の可能性が考慮される。

第4層はマンガン粒の含有の著しいシルト質土で、北西の谷地形とそれに続く緩斜面・北東の窪地部分に認められた。最大で約25cmの層厚を測り、水田遺構の基盤層となっているほか掘立柱建物や土壌の検出面を構成している。第4層の平面分布形が西・南側で方形を呈するのは、水田遺構の区画に関わる削平を受けたためである。

第5層は北西の谷地形とその緩斜面及び南部の谷地形の部分、それに西南部の小範囲に認められた。周辺の地質の影響を受け前者はシルト質土であるが、後者は粗砂を多く含むシルト質土である。北西部の第5層は質・色調が酷似しており、肉眼観察では分層は容易ではないが、各々遺構の検出面を構成しており、包含される遺物の時期にも差異が認められることから二層に分層される。これら分層された二つの層を第5aならびに第5b層と称する。層厚は夫々10cmに満たず、第5b層に包含される遺物は少数である。南部の谷地形・西南部に堆積する第5層は遺物の組成や遺構との関係から見れば第5a層に相当する。第5層は他の遺物包含層とは異なり有機物を殆ど包含しない。なお、第5b層には遺構保存のため発掘しなかった部分もある。

第6層は調査地の中央付近の南側の狭い範囲に認められた層で、10～20cm大の円礫を多く含むことから整地層の可能性が大といえる。最大で30cm程の厚さを測る。

第7層は無遺物層で、シルト質土や大礫混じりシルト質土及び大礫・粗砂混じりシルト



第13図 礫層・遺物包含層の平面分布

第1節 層序

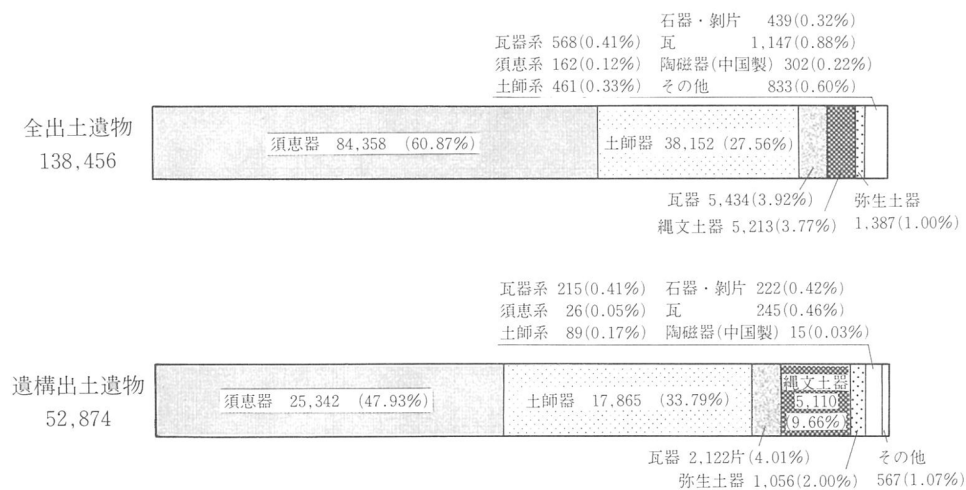
質土である。シルト質土の部分には乾痕が多く見られた。

以上が調査で峻別した土層であるが、第1層・第2層はともかく、先にも触れたように第3～第6層は全面に分布しているわけではなく、全ての層序関係を連続した土層の観察として検証することはできない。第1層～第5 a・第5 b層は、与えた数字・アルファベットの順に上層から下層への層序関係が確認できるが、第5 a・第5 b層と第6層は各々分布する範囲が異なっており、その層序を直接検証することはできない。ただし、出土遺物から判断すると、第5 a層と第6層には時期的な差異は認められない。

第3項 遺物包含層と出土遺物の組成 第14～16図

前項までに調査地の旧地形・層序について触れてきた。ここでは層序とその出土遺物の組成との関わりを検討してみたい。

まず最初に各層出土遺物の組成を手掛りにして各遺物包含層の堆積のおおまかな年代について検討する。第14図に全出土遺物・遺構出土遺物の組成を示した。



第14図 出土遺物の組成

第14図の両者の組成を比較してみると、1%を超える遺物では縄文土器の組成比率がかなり異なっている。縄文土器が専ら遺構から出土したことによる両者の相違は、縄文時代には遺物包含層が殆ど形成されなかったか、あるいは縄文の包含層や遺構の上部が削平されて調査地内から失われてしまったかの何れかの理由による。縄文時代の遺構が検出された地域は、第2層の直下が概ね段丘礫層になっていた状況から推察すると、一定程度の後

世の削平を考慮せざるを得ないし、縄文時代の遺構の遺物出土状況から判断すれば、縄文時代に一定程度の遺物包含層が形成されていた可能性が大といえる。従って、削平された縄文時代の遺物包含層が調査地内から失われてしまったものと判断することができよう。他にはこのような注意を払うべき相違点をみせる遺物はなく、1%以上を占める遺物の種類とその順位・比率も似通っている。

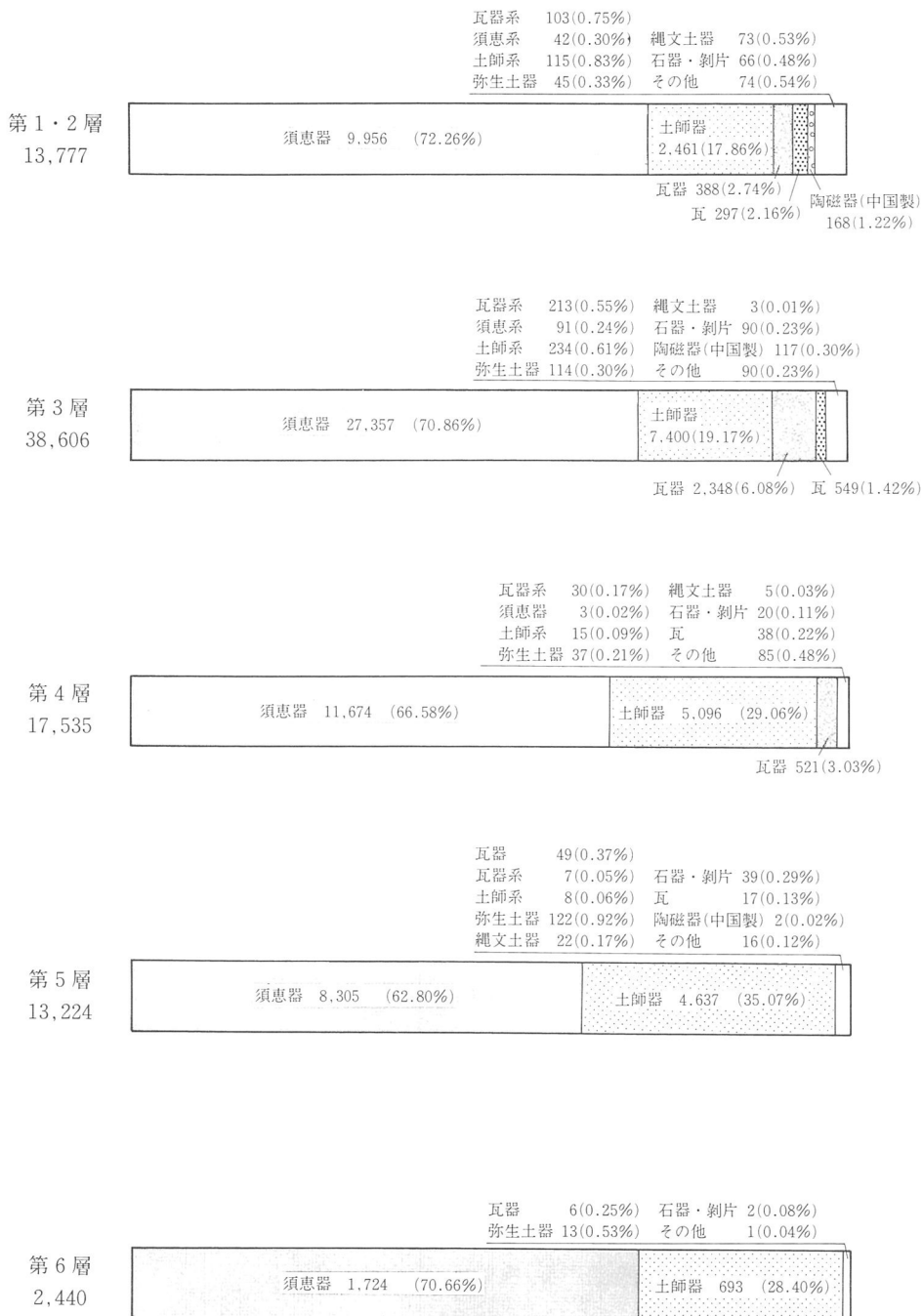
次に第15図に各遺物包含層出土遺物の組成を示した。第15図では部分的発掘に留めた第5b層から出土した少数の遺物は第5層に編入している。各層とも須恵器・土師器が組成上主要な地位を占めており、縄文・弥生時代の純粋な遺物包含層は存在しないことが一目瞭然である。そしてまた、中世遺物が主たる組成となる遺物包含層もない。つまり、今回検出された遺物包含層は、6世紀後葉以降、常に古い時期の遺物を多量に混在させた状態で堆積していったものといえ、人為的な削平・堆積が繰り返されたことが想定できる。

以下、各層毎の遺物の組成をもう少し細かく検討してみる。各層をとおして須恵器の占める比率と順位はほぼ一定しているが、土師器は、順位は一定しているものの第1・2層及び第3層に占める比率と第4層以下の層のそれとはかなり相違する。土師器の占める比率は第1・2層では20%以下であるのに対し、第4層以下の各層では何れも30%近いかそれ以上となっている。この現象と裏腹になるものとして、瓦器・瓦器系土器・須恵器系土器・土師器系土器・瓦・中国製陶磁器などがある。つまり、土師器の比率の変化はこれらの遺物の数量の変動に規定された相対的な変化で、須恵器の場合は絶対数が大なため、比率としては然程の影響を受けなかったと見做すことができよう。

土師器の組成に変化を与えた遺物は、瓦を除けば何れも凡そ中世といって良い時期の遺物である。これらの遺物のうち量的に主となる瓦器についてみてみると、瓦器の組成比率が3位を占めるのは第4層までで、第5層、第6層と激減する。他の中世遺物についても、ほぼ同様の傾向にある。第15図からみる限り、中世遺物が確実に包含されるのは第4層までの層で、第5・6層出土として取り上げられた夫々0.4%に満たない数量の中世遺物は、発掘調査の誤差範囲にあるものと考えられる。つまり、第5層以下の遺物包含層は古代に形成されたが、第1～4層は概ね中世以降形成された層と見做すことができる。

瓦については古代瓦と中世瓦を分離した数字を示していないが、第4層以下の各層には殆ど包含されておらず、第6層に至っては皆無となっている点で他の中世遺物と共通している。このことから、出土した瓦の殆どは中世遺物に伴ったもの、つまり出土した古代瓦も同時代の遺構・遺物と確実に伴う例は少ないと考えられる。古代瓦の絶対数からみても、

第1節 層序

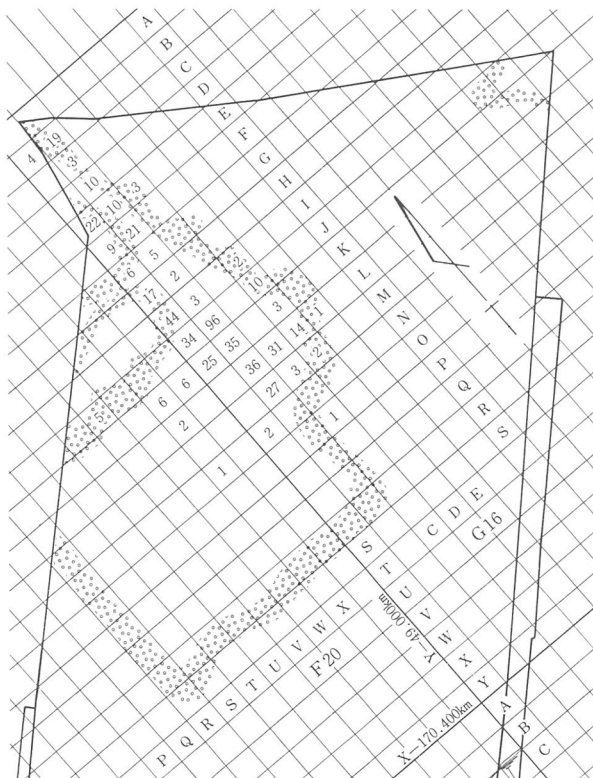


第15図 層別出土遺物の組成

調査地内に瓦葺の建物が存在したことは考えにくく、近在の池田寺に直接関わる地域から、後世になんらかの事情で搬入された可能性が強いといえよう。

次に瓦器等の大きく時代を画する遺物が初めて包含される第4層について、もう少し検討を進める。というのは、この層が多数の中世遺構の検出面を構成する層であり、後に触れる遺構の年代観にとっては重要な地位を占めるからである。

第16図に第4層の平面分布出土の瓦器の出土地点（方4 m単位）と数量を示した。非常に不自然な分布傾向が一目でわかる。図示していないが、他の中世遺物についても同様の分布傾向が確かめられた。一方、須恵器についてはこうした顕著な傾向は認められない。第4層の層厚そのものは、瓦器が密に分布している範囲と殆ど分布していない範囲に顕著な差はないので、包含層の体積量以外に瓦器片の分布傾向の差異の原因を認めねばならない。もう一度、第15図の瓦器の平面分布を見てみると、その分布の主体はG16A・B列とG16LCを中心とする小範囲にあると言える。そして、この二つの分布の中心は、1705・1730・1731-O S（第281図）と1910-O X（第210図）の位置に合致している。後に詳しく触れるが、前者は第4層上面を遺構面とする12世紀後半の時期に比定される溝状遺構で、後者は第5b層上面を遺構面とする8世紀の遺構である。また、これらの遺構が位置するのは調査地北西部の谷地形の緩斜面に相当する。第4層中の瓦器の平面分布傾向と特定の遺構の位置の合致、及びその立地する地形との相互関連は到底偶然の所産とは考えられない。



第16図 第4層出土瓦器の平面分布

これらの事象の原因は、瓦器等の中世遺物を含む第4層が、谷地形とその部分にある遺構もしくは遺構埋土上層に堆積していた結果であると見るべきであろう。つまり、調査中には認識できなかった

第1節 層序

が、第4層は中世遺物を包含する層と包含しない層とに分層される可能性が大きい。そして、中世遺物を包含する第4層は谷地形とその部分の遺構を覆う最終堆積層ということになろう。そう考えたほうが、第4層上面を検出面とする遺構の年代観との整合性が高い。

第4項 遺物包含層出土遺物 第17～34図 図版第79～90

人力で発掘を進めた第3～6層からは夫々多数の遺物が出土している。各層から出土した遺物の組成は第15図に示した如くである。図示したものは、その層から出土した遺物の遺存状態の良いものだけでなく、その地層の形成の上限に関わると思われるものである。また、遺構から出土した遺物のうち、その遺構の年代とかけ離れた古い時期の遺物、例えば7世紀の遺構から出土した縄文・弥生土器や中世の遺構から出土した古代の瓦などはここで扱うことにする。

以下、遺物の種類毎に記述をおこなうが、遺物包含層の年代観に関わる点に力点をおいて触れていく。個々の遺物の詳細な情報は遺物一覧表を参照されたい。

A. 石器 (1～23) 第17～19図 図版第79・80

遺物包含層・後世の遺構からは43点の石器が出土した。石器の内訳は石鏃10点、石錐2点、スクレイパー11点、二次加工のある剥片(不定形刃器・未製品を含む)12点、石核4点、石包丁2点、石錘1点、叩き石1点である。素材となった石材は、石包丁が結晶片岩、石錘・叩き石が砂岩のほかはすべてサヌカイトである。これらのうち代表的なものを図化した。図化したものでは(1～8・11～15)は縄文時代の遺物、石鏃(9)・石包丁及び石錘は弥生時代の遺物といえるが、石錐や石核・叩き石はいずれの時代の遺物とも決め難い。なお、図示した遺物の説明では左側に示した面をA面、右側に示した面をB面とするが、素材剥片の腹面が明らかなものについては、その面をB面側に示している。また、遺物一覧表に示した石器類の長さ・幅・厚さは、定型化した石器については器長・器幅・器厚のことであり、それ以外の不定形なものについては図上の天地ないしは左右の長い方を長さとし、それに直交する数値を幅とする。

石鏃(1～9)

凹基式のもの(1～6)、平基式のもの(7)、凸基式のもの(8・9)がある。図示していない資料には凸基式のものが1点あるが、他は凹基式のものばかりである。(3・6・7)には素材剥片の一部が残されている。

石錐(10)

横長剥片を素材にしたもので、先端部と把手部の一部を欠損している。

スクレイパー (11～13)

(11) は原礫面を打面にして作出された縦長剥片を素材にしたもので、A面右側縁に両面から調整を加え、刃部としている。(12) は平面形が台形を呈する横長剥片を素材にし、二縁に調整剥離を加えているが、両面からの調整がみられる縁が刃部と判断される。刃部の調整は主として腹面側に加えられている。(13) は原礫面を打面にして作出された平面形が台形を呈する横長剥片を素材にし、A面左側には急角度の調整を、下縁には浅角度の調整剥離を加えているので下縁が刃部と判断される。調整はいずれも腹面側に加えられている。

不定形刃器 (14)

縦長とも横長ともつかない木葉形の剥片を素材にして、周縁の背面側に調整剥離を加えている。調整剥離の角度からみて下縁が刃部と判断される。

二次加工のある剥片 (15・16)

(15) は小型の平面形が三角形を呈する横長剥片に、A面の左及び下縁・B面の右縁に計三ヵ所の調整剥離を加えている。形状から判断して石鏃の未製品と考えられる。

(16) は主として腹面側に、左右からの調整剥離が認められる横長剥片である。

石核 (17～19)

(17) は不定形な小型の剥片を打点を回転させながら作出している。この作業は台石上でおこなわれたらしく、周縁の稜線の潰れが顕著である。(18) は厚みのない小型の転石の一側縁から、表裏交互に小型の不定形な剥片を作出したものである。(19) は多方向から不定形な剥片を作出したものである。B面左縁にはヒンジ状の部分がみられ、折り取ったことが観察できる。

石包丁 (20・21)

いずれも小型のもので、(21) は片刃であるが(20) は両刃の可能性はある。

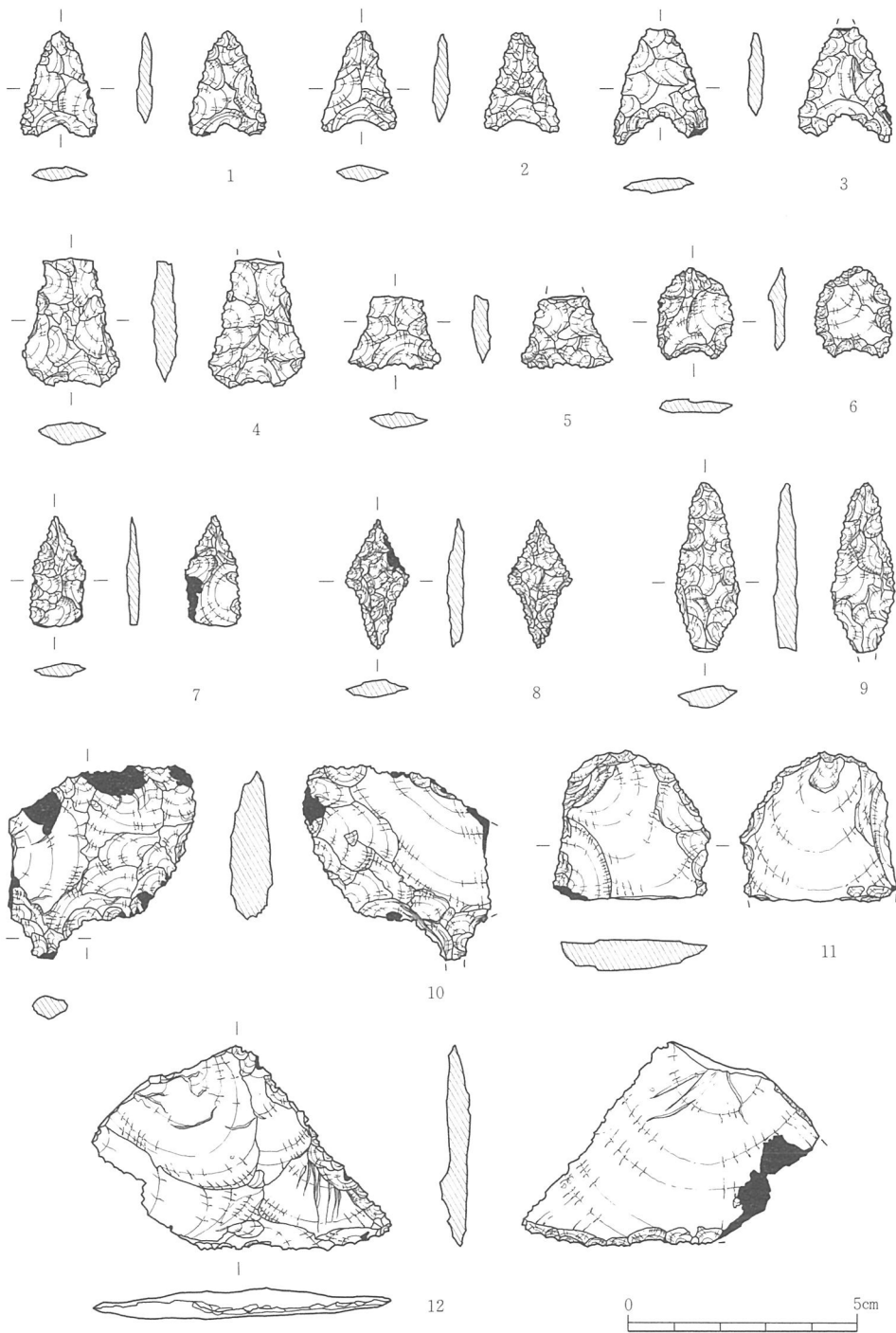
叩き石 (22)

ソーセージ状の砂岩の自然礫の両端に使用痕が認められる。

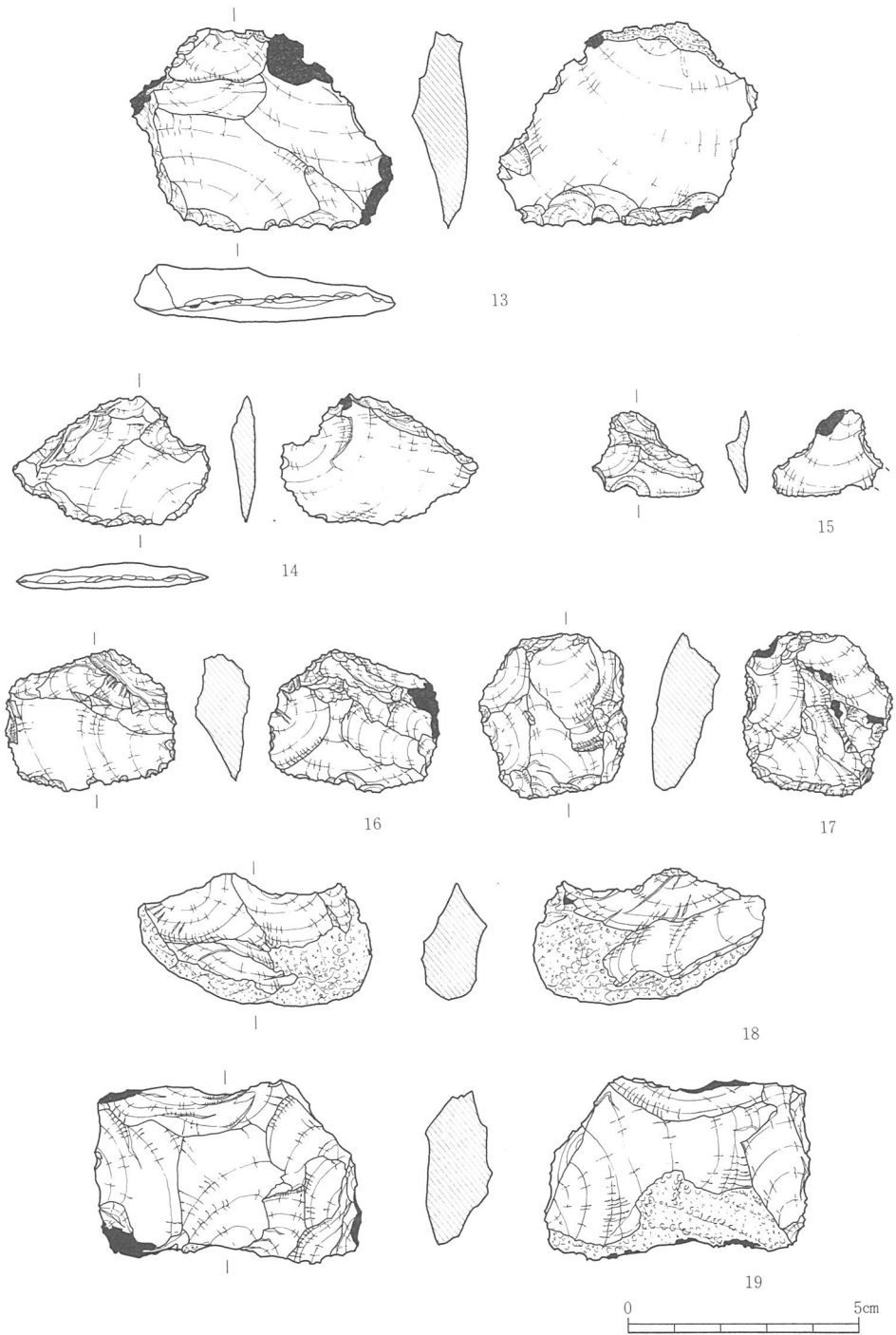
石錘 (23)

約7 cm～9 cm大の砂岩の円礫の中央部に幅約3 cmの溝を一周させている。7世紀初頭の堅穴住居跡366-O Dの貼り床から弥生時代中期の土器(34)と共に出土したものである。この堅穴住居跡は弥生時代中期の溝状遺構1396-O Sを壊してつくられており、石錘も本

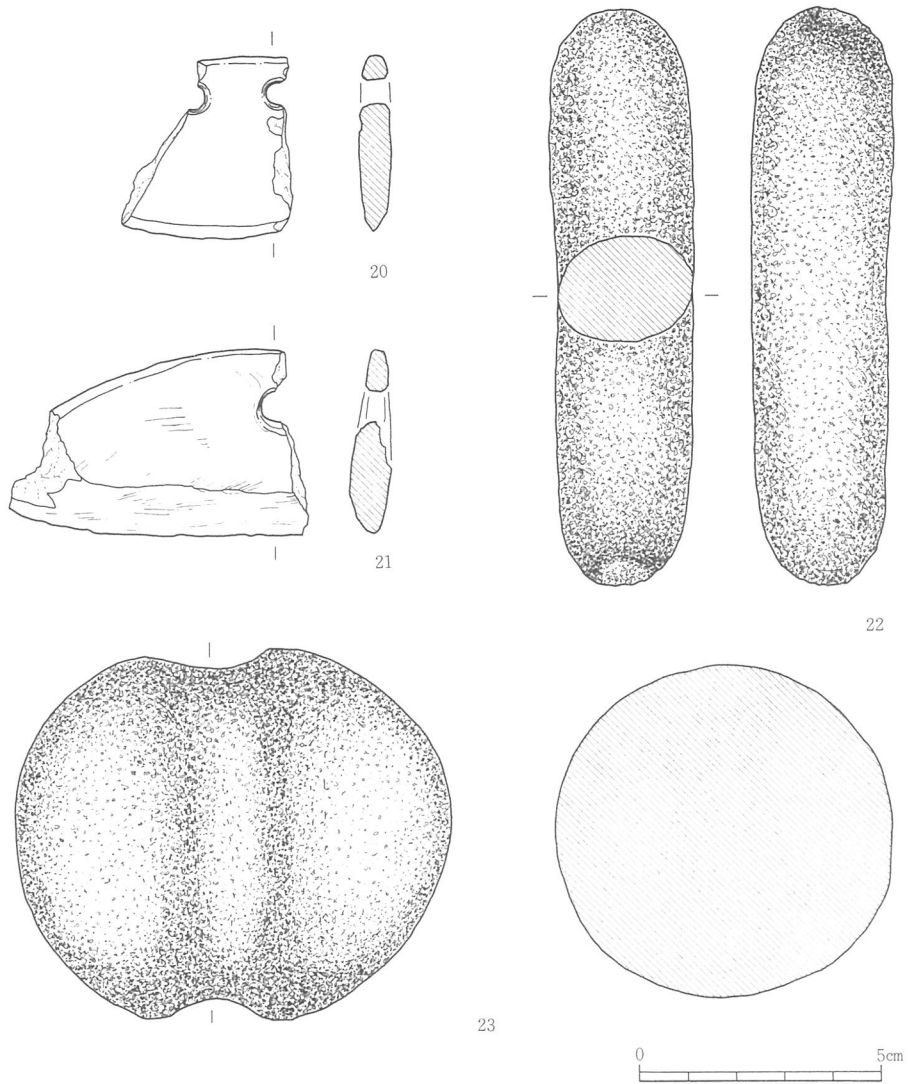
第1節 層序



第17圖 包含層出土遺物（石器）



第18図 包含層出土遺物（石器）

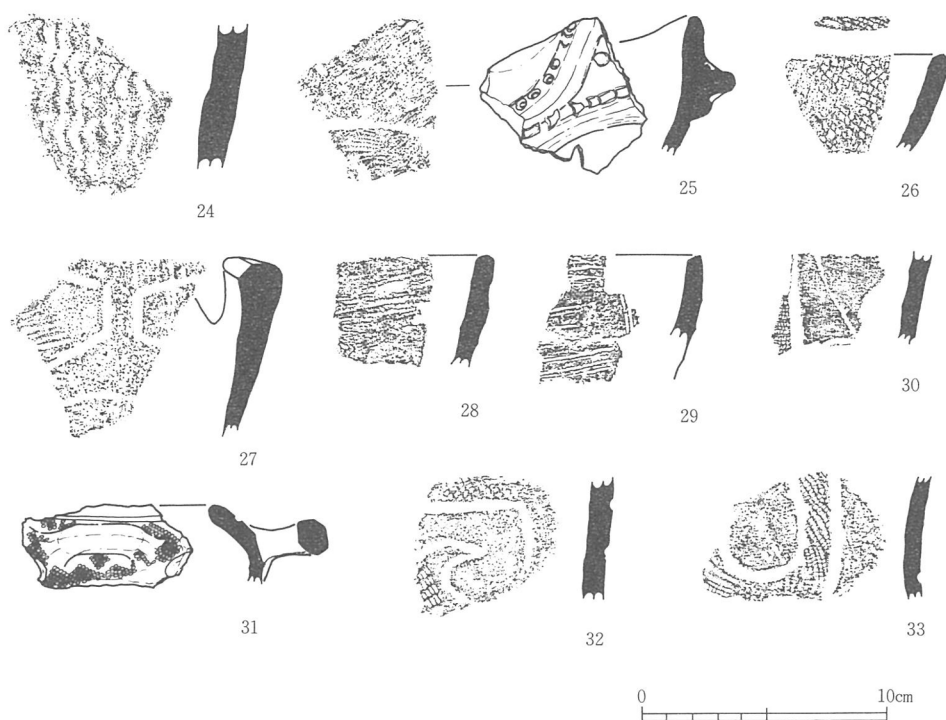


第19図 包含層出土遺物（石器）

来は1396-OSに伴っていた公算が大といえる。

B. 縄文土器（24～33） 第20図 図版第81

第1・2層及び後世の遺構中から出土したものである。これらの出土地区は、縄文時代の遺構が集中している調査区の南西部に限られている。遺構からは出土していない前期の土器（24）が1点あるほかは、いずれも中期末（25・26）～後期前半（27～33）に比定されるもので、遺構出土遺物と時期を同じくする。器種については、図示したものでは（31）



第20図 包含層出土遺物（縄文土器）

以外はすべて深鉢と考えられる。

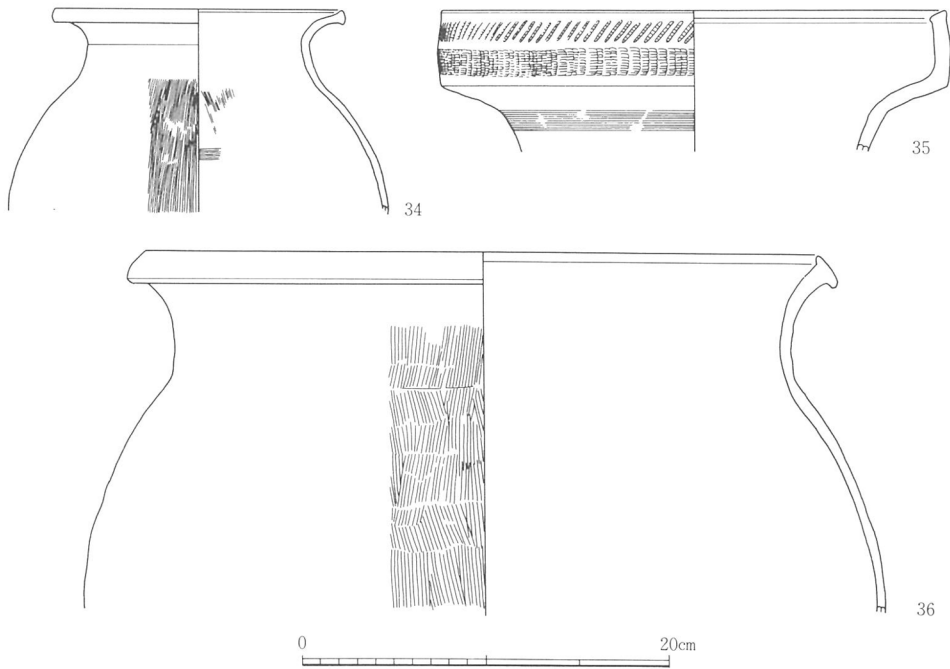
(24) は山形押し型文で加飾された深鉢の底部近くの破片で、胎土中に角閃石粒を多く含む。(25) は隆線文・竹管文で加飾されており、竹管文は一部「押し引き」の状態^{註1)}で施文されている。また、内面の一部に細かい単節Rの縄文が付いている。(26) は口縁部外面及び口唇部に単節Rの縄文が施文されている。(27) は波状口縁の波長部で、巻貝による条痕文を地文にしたうえで沈線文で加飾している。(28) も巻貝による条痕文が外面に付く。(29) は縦横の条線文で加飾されており、図示した遺物の中では新しい要素を示す。(30) は研磨された器面に沈線文と単節Lの縄文が付くが、縄文は深浅交互の状態に施文されている。(31~33) は二本沈線の磨消縄文で加飾された土器で、(32・33) には中津式に特徴的な「J」字文様が認められる。(31) は環状把手の付く浅鉢で、図上の下縁及び下方の左右は沈線文のところ^{註1)}で割れている。

これらの遺物は口縁部形態の分類に従えば(25) は波状口縁2、(26・28・29・31) は平口縁2に分類される。口唇部の形態は(27) が肥厚2、他は無肥厚である。沈線区画縄文帯の付く土器は(27・31~33) の4点あり、すべてII類に分類される。

第1節 層序

C. 弥生土器 (34~36) 第21図 図版第81

いずれも中期の土器である。(35)は受け口状口縁の壺で、口縁端部は僅かに肥厚して内傾する面をなす。原体が同一の櫛状工具による刺突文・簾状文・直線文で加飾されている。(34・36)は口縁部が逆「コ」字状を呈する甕で、口縁端部は上下に拡張されている。いずれも体部の外面にはハケメ調整を、内面にはナデ調整を施すが、(34)は体部内面に一次調整にハケメ調整を施している。(34)は先に触れた石錘(23)と同じ理由から、本来は1390-00に伴う遺物である公算が大である。



第21図 包含層出土遺物(弥生土器)

D. 須恵器 (37~113) 第22~26図 図版第82~84

最も数量の多い遺物で、全ての遺物包含層出土遺物の主体をなしているが、断片資料が多い。全体を器種毎に簡単に紹介しながら、遺物包含層との関係について重要な点について触れる。

杯・皿類 (37~66) 第22図 図版第82

杯・蓋H (37~45)・杯・蓋G (48・49~51)・杯A (58)・杯B (59~63)・皿A (57)・皿B (64~66)や金属器模倣形態の蓋(52)がある。

杯・蓋H類の口径には差異が多く、蓋・杯の天井部や底部の最終処理には a・b・c の三種が認められる。b 技法のものは (43)、c 技法のものは (45)、それ以外は a 技法である。これらの杯・蓋H類は各遺物包含層から夫々出土しており、第5 b 層出土遺物が殆どないため、杯・蓋Hの形態や手法の差異と層位の関係は明瞭ではない。ただし、第5 b 層出土遺物には飛鳥IIに比定される (45) のような新しいタイプは見当たらない。

杯G類についても、数量は然程多くはないが各遺物包含層から普遍的に出土している。資料数の多い杯・皿のB類には遺物の年代観に関わる形態上の差異が多くある。蓋Bの形態は内面にかえりがある (46・47) と、かえりの消失した (53~56) に大別される。(46・47) は飛鳥V (平城I) に比定されるが、かえりのない蓋は口径と器高比率、つまり扁平度の違いで (54) と他のものに分けられる。(54) は平城I、他は平城IIもしくはIIIに比定できる。また、(52) は環状の摘みと器面の回転ヘラミガキ調整から金属器形の椀に伴う蓋と判断され、天井部の屈曲の具合から平城IIIの時期に比定される。杯B・皿Bは口縁部の外反の具合や、高台の位置と形態に差異がある。口縁部が「S」字状に屈曲して、「ハ」字状に開く高台が底部の内側についた (63) と、口縁部が直線的に外反し、直立気味の短い高台が底部の外側についた (59・60・62) とに大別できる。前者は飛鳥IVに後者は平城IIIないしIVに比定され、その中間的な形態である (61・64~66) は平城IIかIIIに比定できる。杯A (58) ・皿A (57) は扁平な不調整の底部から外傾度の強い口縁部が直線的に延びる形態で、平城IIIないしIVに比定される。

出土層位との関係では、第5 a 層ならびに第6層には平城IIIに比定される遺物が含まれていることが言える。なお、H類以外の杯皿類には法量の違いによる複数以上の器種分化が認められるが、その実体は明瞭ではない。

高杯 (67~72) 第23図 図版第82

図示したのは全てH類に分類されるが、さらに脚部の長さで長脚のH I 類 (67・68・70) と短脚のH II 類 (71・72) に分類される。(67) のような無蓋形態のものや、脚端部が屈曲する形態のもの (67・72) は両者に共通して認められる。H I 類は長方形の透かしを二方二段に配置するのが基本で、(68) の如く三方に配置するのは稀である。(69) は形態からみて高杯H類に伴う蓋である。

椀 (77・78) 第23図 図版第83

何れも金属器形態のもので、口縁部を二条の凹線で加飾する。(77) の底部は静止ヘラケズリである。資料数が少なく形態の変化などは明瞭ではないが、飛鳥Iに比定される。

第1節 層序

鉢（73～76・79～82・87・88） 第23・24図 図版第83

金属器形態のいわゆる鉄鉢形の鉢A（73・74・79・80）、メガホン形の（81・82）、深い体部で口縁部が直立気味に付く（76・87・88）、口径に対して器高が低く口縁部が大きく外反する（75）がある。（75）は少数であるが他は相当数の個体が確認できる。これらの内、鉄鉢形のものには口径に対して器高が低く、平底をなす（79・80）と口径に対して器高が高く、尖り底になる（73・74）の二種の形態が認められ、口縁部の内湾の具合も相違する。前者は飛鳥Iから存在するが、後者は平城III以降に普遍化する形態である。（79）には凹線が認められ、（73・74）には回転ヘラミガキ調整が施されているが、この相違点は形態上の差異とは関連しない。

壺（83～86・89～104・108・109） 第24～26図 図版第83・84

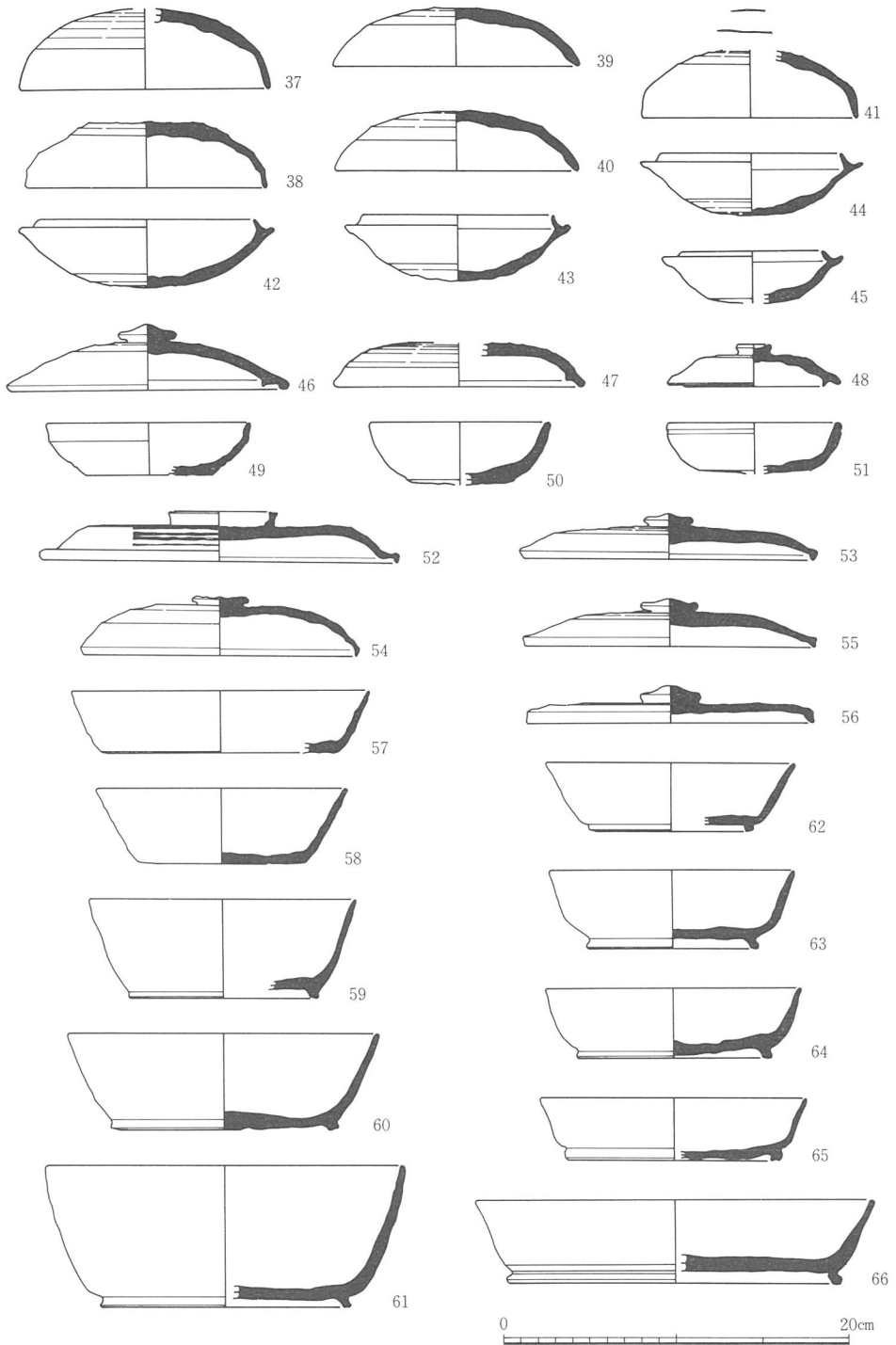
大きさや形態の差異で様々な種類がある。蛸壺（100）・平瓶（98・99）・甕（101・102）・横瓶（103）など特殊な機能・形態のもの以外は、口縁部の形態で次のように大別される。口縁部が長い壺L（90・96・97）、口縁部が短くて直立気味の壺A（83～85・89・92）、短い口縁部が外反する広口壺（86・104・108・109）である。壺Lには（96・97）のような有蓋形態があり、（93～95）はその蓋である。壺Aには小型の器種が多く、これらには口縁部がやや外反するものが多い。また（92）のような双耳の付く有蓋形態のものもある。広口壺の主体は口縁部が玉縁状に肥厚する（86・108・109）で、高台の付いた（91）や口縁部が直線的な（104）は少数である。なお、（104）の体部内面には丁寧な磨消し状のナデ調整が施されている。これらの壺のうち、（97）は飛鳥Iの前段階に、（90・102）は飛鳥Iに、（92・98・104）は平城III以降に夫々比定できるが、他のものについては今のところ必ずしも時期が特定できない。飛鳥Iから平城IIまでの幅を考えておきたい。壺類の形態・年代観の差異と出土層位には有意の関係は認められない。

甕（110～113） 第26図

口縁端部の肥厚の具合で、上下に小さく肥厚する（110）と、断面が長方形をなすように外面に肥厚する（111～113）に分類される。何れも口縁部を凹線で区分し、櫛書き文や波状文で加飾している。後者のほうが量的には多い。図示したものは何れも飛鳥Iから平城IIまでの時期のものである。

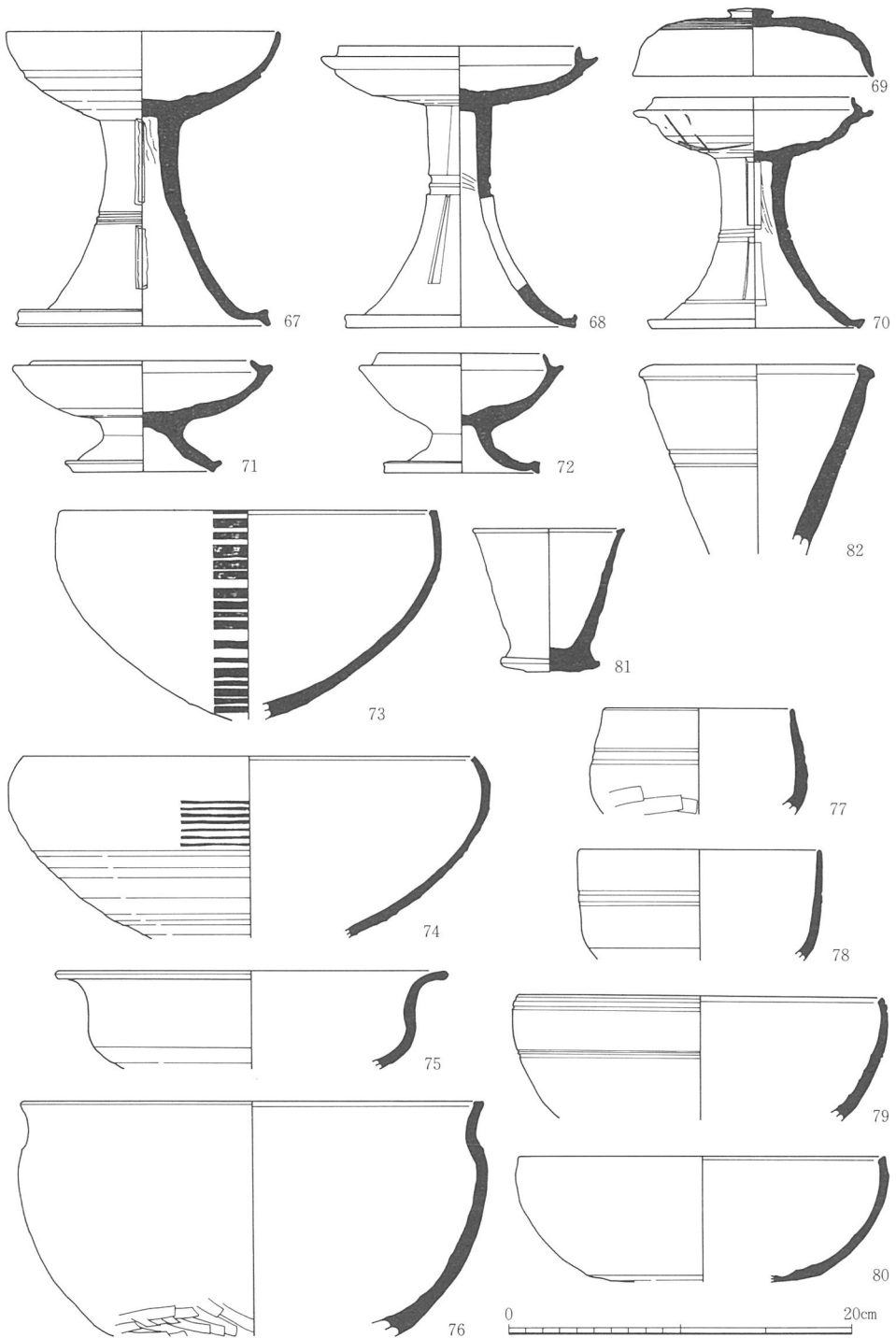
その他（105～107） 第25図 図版第84

盤（105）や甗（106・107）などの器種も少数出土している。（105）は平城IIIに、（106・107）は平城Iまでの時期に各々比定される。

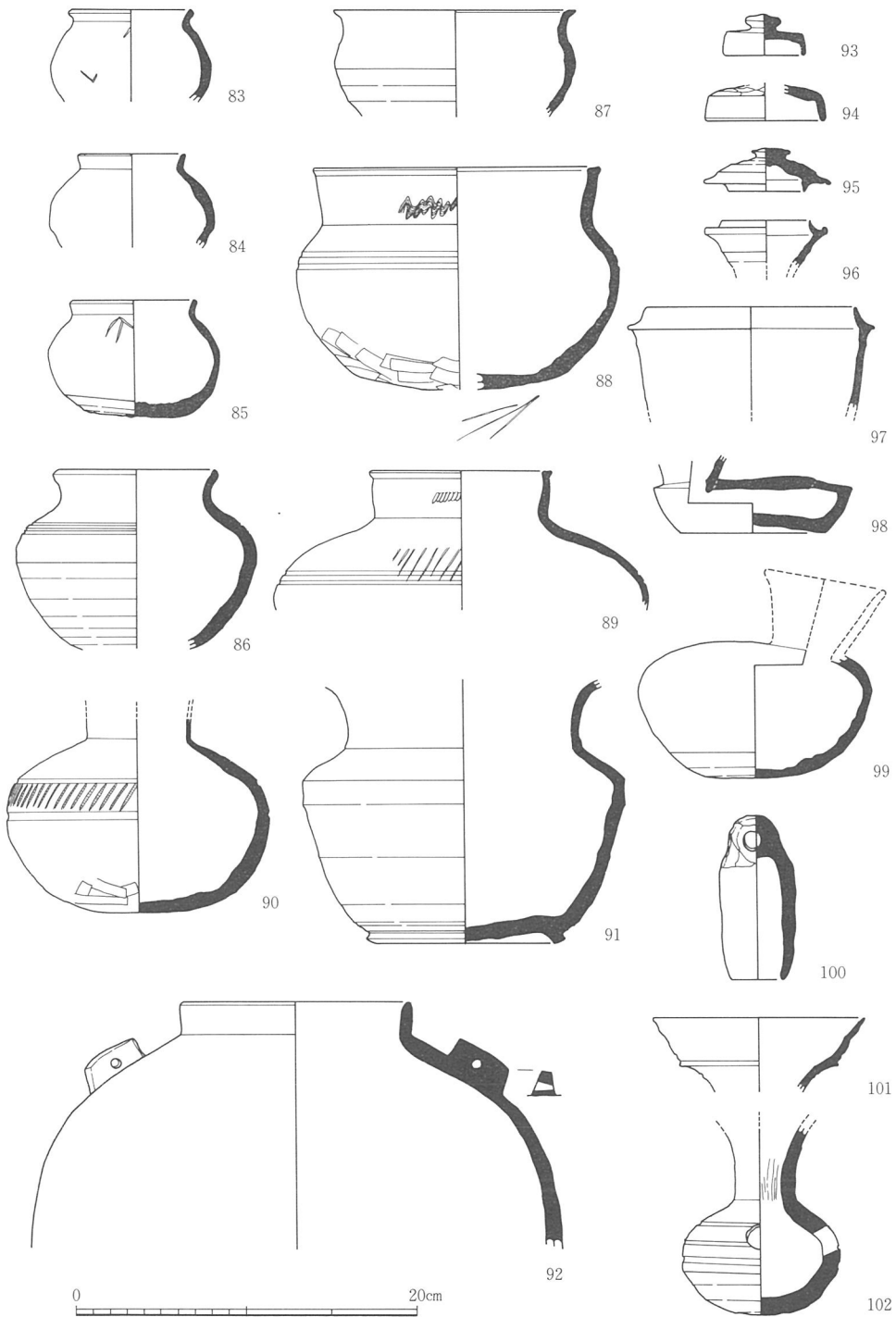


第22図 包含層出土遺物（須恵器）

第1節 層序

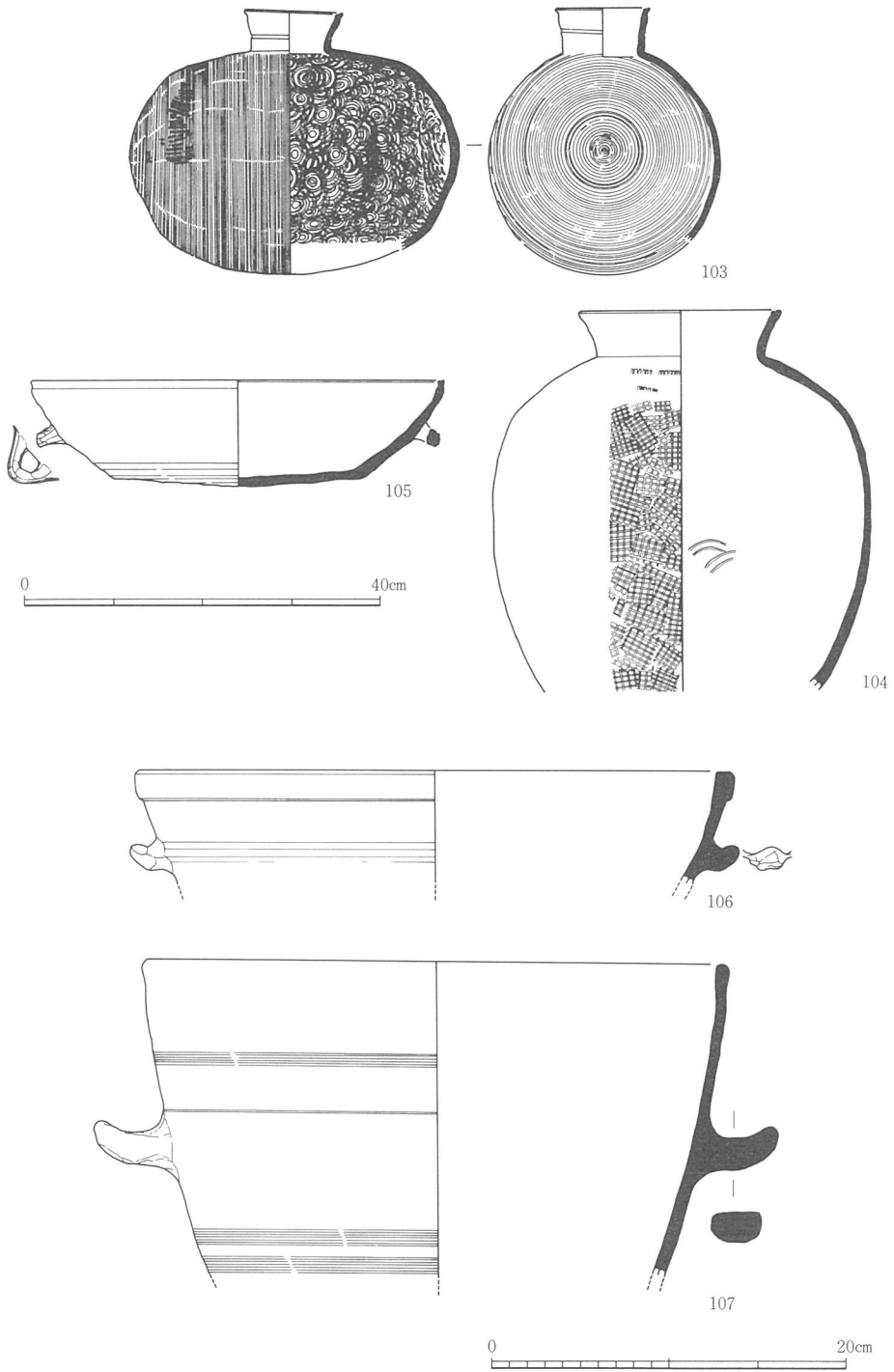


第23図 包含層出土遺物 (須恵器)

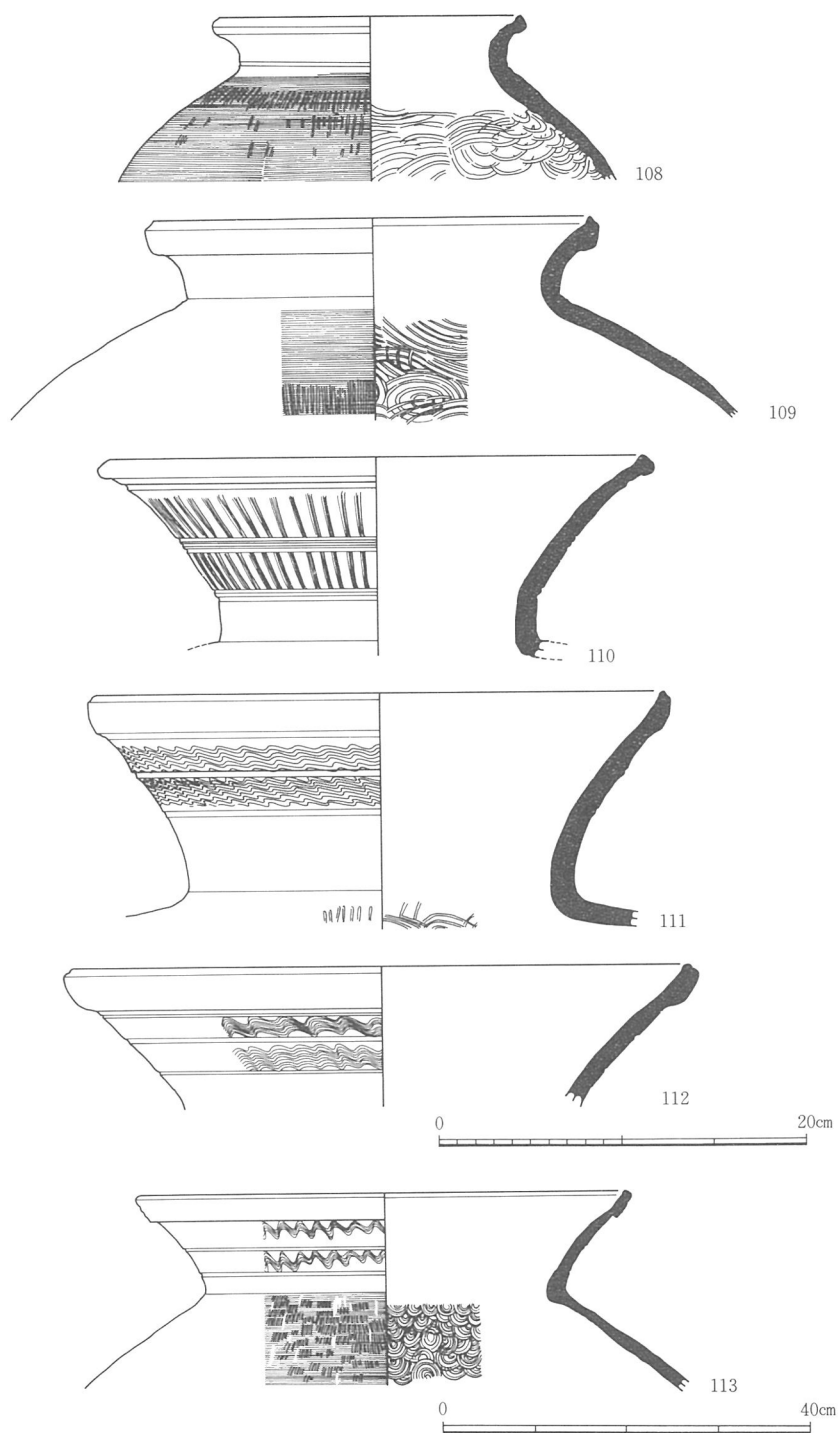


第24図 包含層出土遺物 (須恵器)

第1節 層序



第25図 包含層出土遺物 (須恵器)



第26図 包含層出土遺物（須恵器）

第1節 層序

E. 土師器 (114~148) 第27・28図 図版第85

破片数では相当数が出土しているが、何れも細片で器面の遺存状態も悪い。従って図示したものが当該遺物の代表例とは言い切れないし、時期が特定できないものもある。

杯 (129・130) 第27図 図版第85

(129)は口径に対して器高が高く、底部から口縁部が丸く連続し、口縁端部は内傾する面をなす。遺存する器面から判断すると、a 3手法^{註2)}で正放射暗文が付く。(130)はb手法で、底部が扁平で口縁端部は巻き込まれている。前者は飛鳥II、後者は飛鳥IVに夫々比定できる。

皿 (114~128) 第27図 図版第85

口径が16cm以上のもの(126~128)と口径10~12cmのものに二分される。前者は、暗文の状況・口縁端部の巻き込みの具合・口縁部の外傾度から判断して、(128)は飛鳥IIIないしIV、(126・127)は平城IIIないしIVに比定できる。後者には口縁端部を巻き込み風にした(114~116)と巻き込まない(117~125)があるが、そのうち(114・115)は赤褐色系の色調を呈するのに対し、他は全て黄褐色系の色調を呈する相違がある。また、(114・115)は他のものに比べると口縁部のヨコナデの範囲がひろく、口縁部の屈曲や端部の巻き込みの具合も異なっている。以上のことから(114・115)と、他は時期的に異なったものと考えることができ、(114・115)は平城IIIないしIVに比定できる。他は次にふれる黒色土器A類と同時期のものと考えられる。

黒色土器 (132~134) 第27図

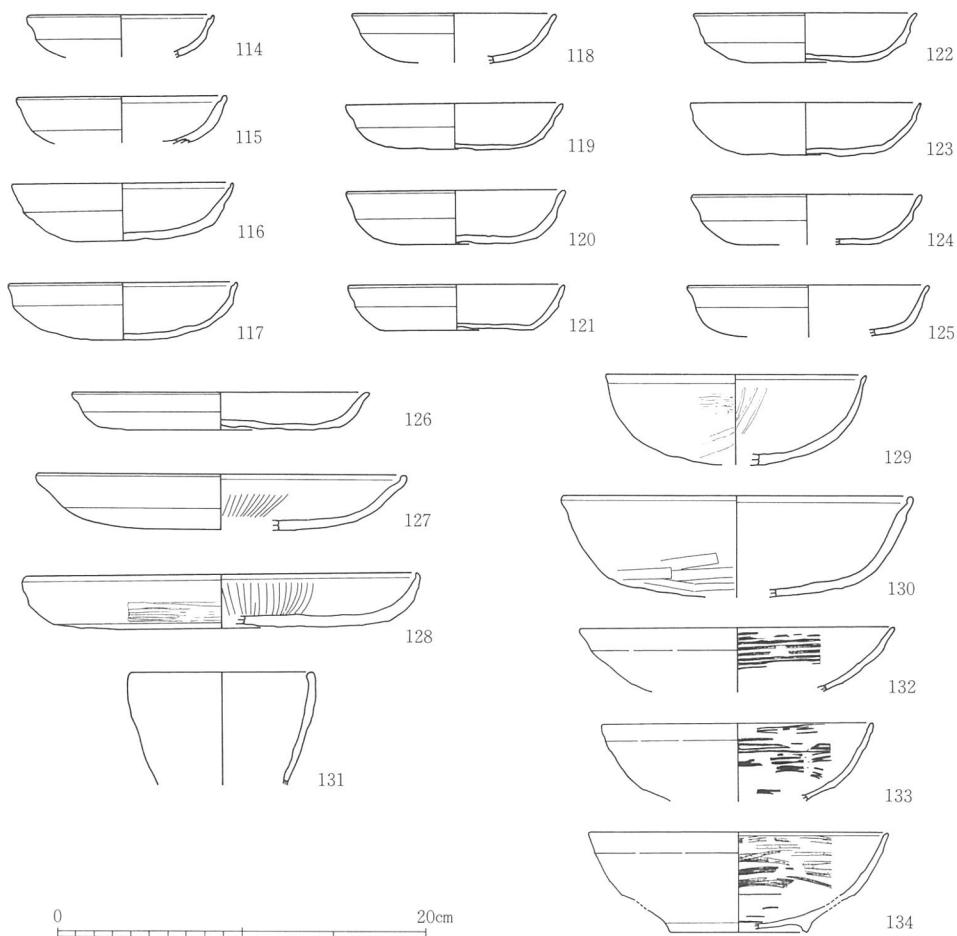
A類の碗が極めて少数出土ただけで、破片数で28片を数える。口径に対して器高が低く碗形態としては古い形態で10世紀前半に比定できる。これらの出土地点は(116~125)の皿と共に調査地南東部の小範囲に限られており、第5 a層上部とそれより上層から出土している。限定された数量の遺物のほぼ全てが、限定された範囲から出土した現象は、付近に当該時期の遺構が存在したことを窺わせる。

製塩土器 (131) 第27図

図示できるものは1点だけである。丸底III式^{註3)}に分類されるもので、8世紀以降のものと考えられる。

甕類 (135~148) 第28図 図版第85

(140)は鍋A、(148)は羽釜になるが、他は体部が球形の甕A(135~139・141)と長胴形の甕C(142~147)とに分かれる。甕Aの口縁部は、直立気味のもの(135・141)、

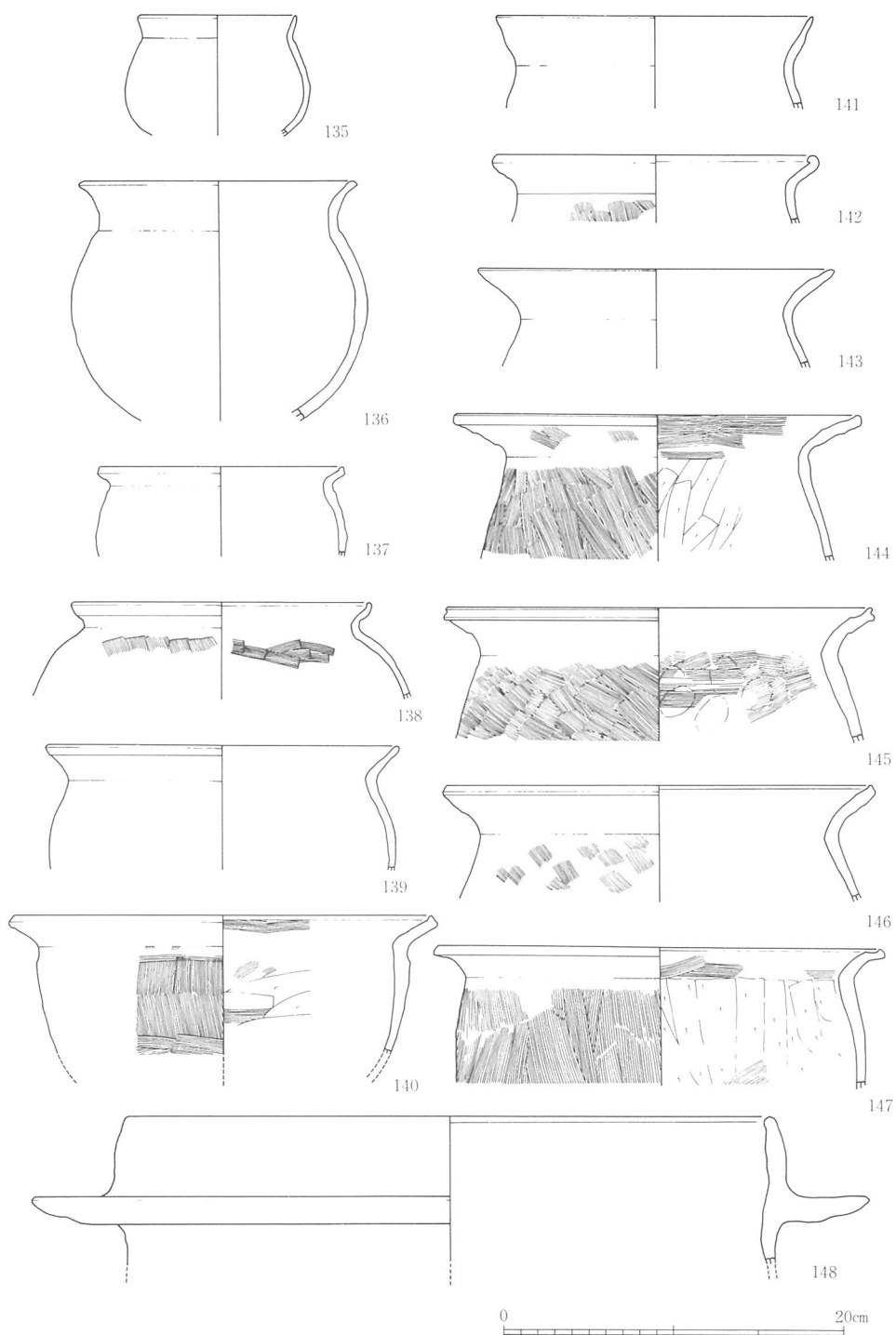


第27図 包含層出土遺物（土師器・黒色土器）

逆「コ」字状を呈するもの（136・138）、「く」字状に大きく外反する（139）など多様であるが、甕Cの口縁部は「く」字状に大きく外反するC2類が多数で、口縁部が直立気味の（141）のようなC1類は少数である。口縁端部を巻き込み風にしたものは長胴形のものに多い。器面の遺存状況が悪く、制作手法が窺えるものは少ないが、（137）は外器面の凹凸が激しく不調整の部分が多いし、（140・144・147）は和泉型の特徴を備えている。詳細な時期が特定できるものは少ないが、口縁部が直立気味の（135・141）は飛鳥Iに、口縁端部を巻き込み風にした（140・142・144～147）は飛鳥II～平城IVに、口縁部が短く外器面に凹凸の多い（137）は10世紀前半に夫々比定できる。

F. 瓦器（151～160） 第29図 図版第86

第1節 層序



第28図 包含層出土遺物（土師器）

相当数量が出土しているが、遺存状況が悪くて図示できるものは少ない。

椀（157～160）と小皿（151～156）がある。（152・155・156）は第3層、他は第4層から出土した遺物である。椀の法量は口径14～16cm・器高5.0～5.6cm、小皿のそれは口径9.0～10.0cm前後・器高2.0～2.6cm程である。暗文・ヘラミガキの状況には不明な点が多いが、（160・151）は格子状暗文が、（159・158・152）の見込みには不定方向のヘラミガキが確認できる。口縁部内面は分割性を欠いたヘラミガキが確認できる例（158～160・153）が多いが、外面については遺存状態が悪く観察できない。椀の高台の形態は断面形が方形をなすものが多い。以上のことから、図示した瓦器は尾上編年II-2ないし3に比定でき、凡そ12世紀後半～13世紀前後の時期を考えることができる。そして、先に検討した第4層の瓦器の偏在する部分の堆積年代も当該時期と判断される。

G. 瓦器系土器（161～164） 第29図 図版第86

摺鉢と羽釜がある。図示したものは（164）が第2層から出土したが、他は第3層の出土遺物である。山直中遺跡出土遺物でおこなった分類と年代観^{註6)}に従えば、摺鉢（163）はB1類で、羽釜（161）はE2類である。これらの摺鉢・羽釜は14世紀後半の時期が考えられるが、（162）・（164）は山直中分類には該当せず、これらより後出する15世紀前半のものと考えられる。この二つの遺物は第3層の下限遺物と評価できるので、第3層の堆積の年代と第3層を耕作した水田遺構の上限年代は15世紀前半とすることができる。

H. 土師器系土器（149・150・165・166） 第29図 図版第86

口径11cm以下の小皿（149・150）と羽釜（165・166）がある。（150）は第4層、（165・166）は第3層から出土した。山直中分類では（166）はB類、（165）はC類で、夫々12世紀後半～13世紀前後、14世紀前半に比定される。（150）は第4層出土の瓦器に伴う時期のものであろう。

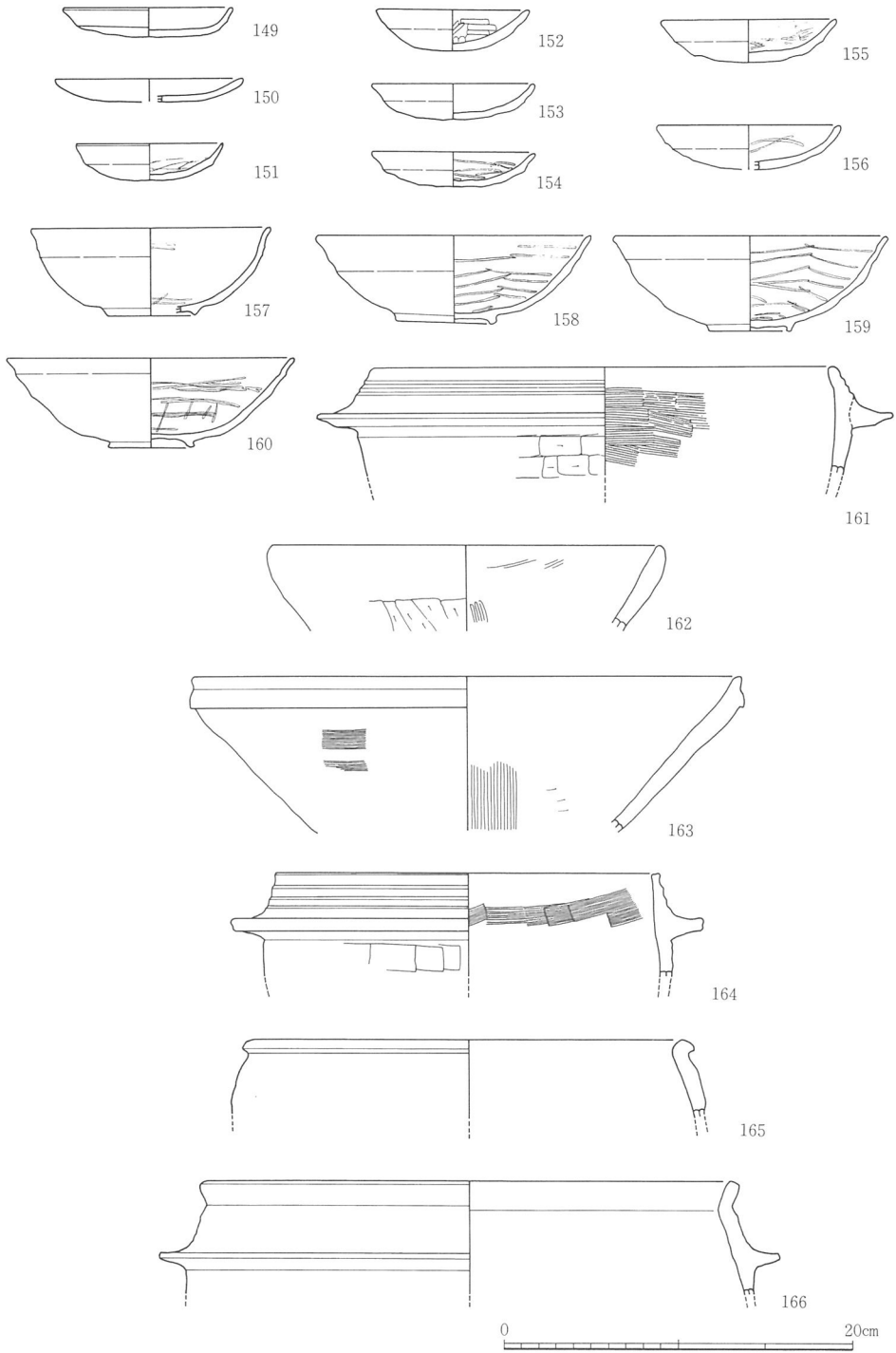
I. 須恵器系土器（167～169） 第30図 図版第86

いわゆる東播系の土器で、図示した鉢以外には甕がある。山直中分類では、（167）はB1類、（169）はC1類、（168）はC2類に分類でき、各々12世紀末、14世紀前後、14世紀後半の年代に比定できる。

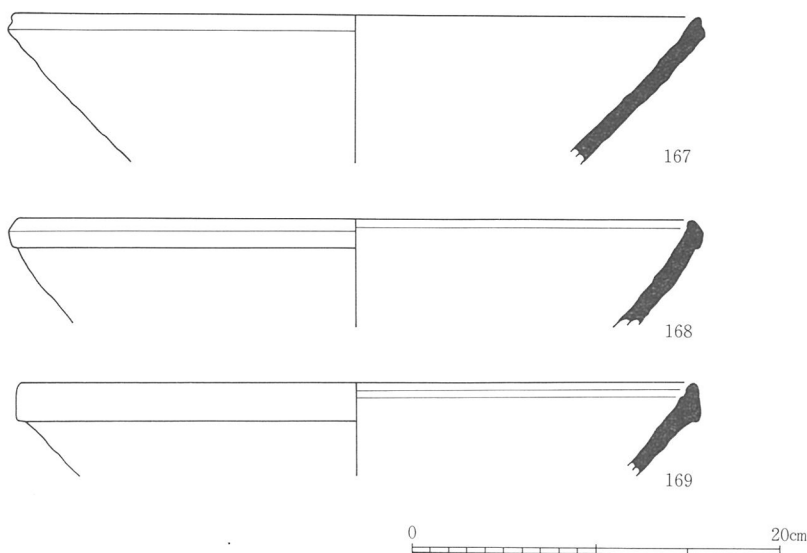
J. 中国製陶磁器（170～194） 第31図 図版第87

白磁・青磁・青花があるが、何れも小破片で総数も少ない。白磁と青磁はほぼ同数であるが、青花は2点だけである。図示したものは全て第2・3層から出土した。白磁・青磁については森田分類^{註7)}に従って記述する。

第1節 層序



第29図 包含層出土遺物（瓦器・瓦器系・土師器系土器）



第30図 包含層出土遺物（須恵器系土器）

白磁には碗（170～174）・鉢（175）・皿（176～178）、四耳壺（179）がある。碗の口縁端部は玉縁状に肥厚するものが多い。そのうち、玉縁が小さくて口縁部が内湾する（171）はⅡ類に、玉縁の大きい（170・172）はⅣ類に相当する。幅広で低い削りだし高台の（174）はⅣ類の底部であるが、高台径が小さくて細く高い高台を削りだした（173）はⅢ類の底部かも知れない。（174）の内面には圈線が三条巡る。これら碗の釉調は（171）は黄味を帯びた白色、（170）は灰白色、他は灰緑色である。

鉢（175）は青味を帯びた青白釉が厚くかかる。皿（176）は内面に片彫りで花卉文様を表現しており、底部から口縁部下半は丁寧な回転ヘラケズリを施している。釉調は黄味を帯びており、細かい貫入が入っている。皿（177・178）は口禿・碁笥底でⅨ類に相当するが、全面に施釉の確認ができる（178）はⅨ-1類になる。釉調は何れも白色である。四耳壺（179）の釉調は青みを帯びている。これらの白磁のうち（171・176）の胎土は灰白色を呈しキメが粗いが、他の胎土は灰白色でキメ細かい。

青磁には碗（180～190）と杯（191・192）がある。胎土・釉調の状況からみて同安窯系と目されるのは（187）だけで、他は龍泉窯系のものだと判断される。

碗には連弁文のあるもの（181～186・189）と、ないもの（180・187・188）がある。片彫りで連弁文を表現したもので鎬のある（182・185・186）は、龍泉窯系碗Ⅰ-5・b類に、鎬のない（183）は、龍泉窯系碗Ⅰ-5・a類に相当する。（189）は口縁部下部に鎬

第1節 層序

に相当する凹凸が見られ、龍泉窯系碗Ⅰ－5・b類の底部と思われる。釉調は（185・186・189）が青味を帯びた緑色、（182）は茶色味のある灰緑色、（183）は灰緑色で貫入が多い。（181・184）は毛彫りで短冊型の連弁文を表現している。釉調は（184）は灰緑色で、（181）は茶色味を帯びている。

（187）は口縁端部が僅かに外反し、薄い灰緑色の釉で内外面に櫛書き文があり、同安窯系碗Ⅲ－1・b類に相当する。（190）は内面に印花文があり、灰緑色の釉がかかる。

（190）は口縁部外面に片彫りによる雷文があり、青味を帯びた釉がかかる。（180）は口縁端部の外面に圈線を一条だけ巡らせており、灰緑色の釉がかかる。

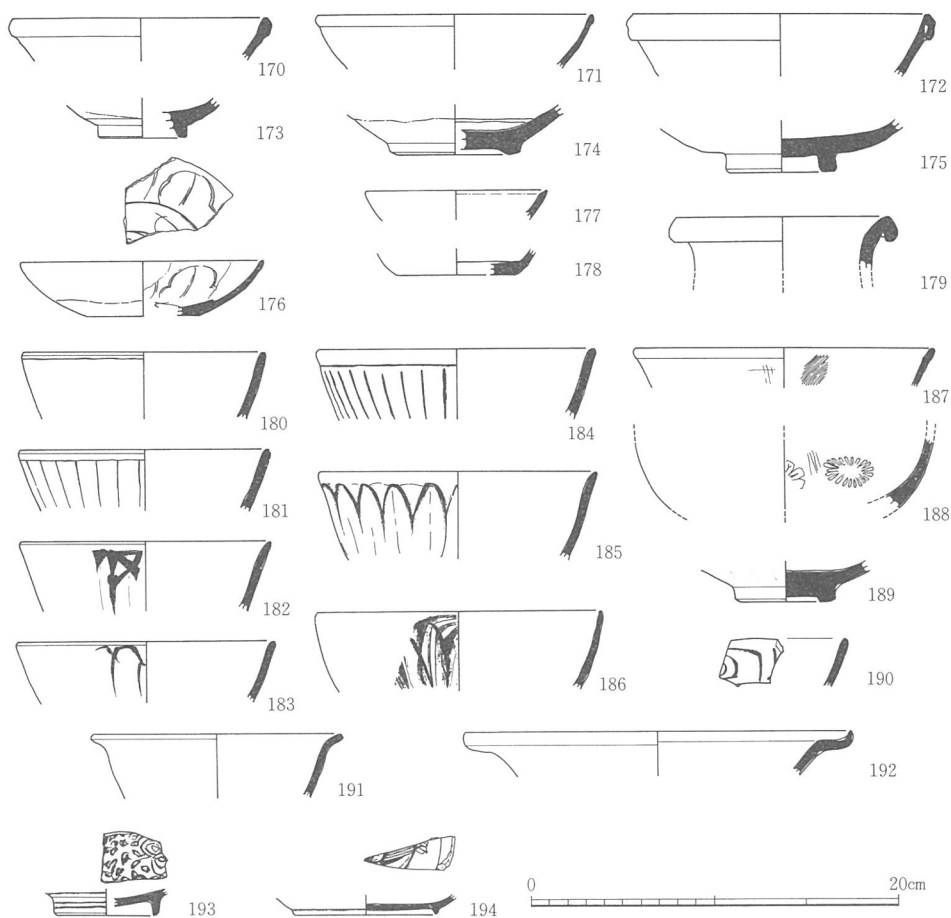
杯（191）は口縁端部が外反し龍泉窯系杯Ⅲ類に、口縁端部が直立する形態の（192）は龍泉窯系杯Ⅲ－3類に相当する。釉調は何れも青味のある緑色である。

これら青磁の胎土は、（181・183・184・188）が灰色もしくは暗灰色を呈しキメが粗いが、その他は白色もしくは灰白色でキメが細かい。

青花には碗（193）と皿（194）がある。内面の文様は、（193）が連続渦文、（194）は蛟龍文と思われる。外面に（193）は三条、（194）は一条の圈線が夫々認められる。

今日明らかにされている中国製陶磁器の年代観には一定の幅がある。また、ここで図示したものは何れも人為的移動の想定される第2層からの出土で、検出された遺構とどれほど関連するかは不明であるが、他の包含層や遺構出土遺物の年代観と図示した中国製陶磁器が如何に対応するのかをしてみることにする。

白磁碗Ⅱ・Ⅳ類や青磁碗Ⅰ類は大略12世紀代の年代が考えられ、和泉地方の出土例でも尾上編年の瓦器Ⅱ－2・3と共伴することが確認^{註8)}されており、今回出土した瓦器碗と同じ時期ものとみなせる。白磁鉢（175）・皿（176）もこの時期と考えると良いであろう。白磁皿Ⅸ類や青磁杯は13世紀中葉～14世紀中葉と考えられており、ほぼ同時期の遺物としては14世紀後半代に比定される瓦器系摺鉢や須恵器系鉢がある。他の青磁碗は15世紀代と考えられ、瓦器系羽釜と時期的には一致すると見ても良い。以上の中国製陶磁器については、年代観の一致する他の遺物が包含層や遺構から出土しているのも、下層・遺構の遺物の一部が第2層に混入されたものと見做すことが可能である。一方、16世紀に比定される青花には同時期と考えられる他の遺物は皆無であり、そのように考えることは困難である。青花については、近辺から移動された第2層に包含されていた公算が強いであろう。何れにせよ、青花自体2点しか出土していないので、今回の調査では大局的には16世紀の遺物は皆無に近いといえる。



第31図 包含層出土遺物（陶磁器）

K. 瓦類 (195~206・1000・1001) 第32・33図 図版第88~90

瓦類は計1,147片出土した。そのうち遺構から出土した分は計239片あるが、先にも触れたようにこれらの瓦類は出土した遺構には直接伴わない場合が多い。それらは混入した古い時期の遺物であったり、手頃な建築資材として後世に再利用されたりしたものである。ここで紹介したもので後者の例としては、中世後期の水田跡の畦畔の基礎として利用された(201・1001)や、平安時代末の土壙から出土した(202)や同時期の井戸497-OWから出土した(1000)がある。(1000)は凹面・破碎面に煤が付着しており、竈などの施設の一部に利用されたことが窺える。

ここでは、以上のような出土状況の瓦類ならびに遺物包含層出土の瓦類のうち、代表的なものや注目すべきものを示す。なお、出土した瓦類のうち、縄目のタタキメや布目を持つ

第1節 層序

つものは計258片あり、平瓦が多数で丸瓦は少ない。これらのうちタタキメの確認できるものはすべてが縄目である。その他、軒丸瓦の瓦当が2片・鴟尾2片・埴(1000)1片があるが、残りは離れ砂を使用した中世の平瓦や近世の棧瓦である。

軒丸瓦 (195・196)

(195)は池田寺式の単弁蓮華文軒丸瓦で、外区の唐草文に特徴がある。池田寺創建期の瓦と考えられる。(196)は単弁蓮華文軒丸瓦で、雄芯帯と呼ばれる独特の文様帯が認められることから東播系註9)と称されるものである。平安京の出土事例註10)から平安時代末のものとして判断される。

鴟尾 (197・198)

胎土・色調・焼成の状況や厚みが酷似しており、二条の沈線文も共通することから、(197)と(198)は同一個体である公算が大である。そうだとすると、(198)に見られる珠文から鴟尾の一部と判断することができる。

丸瓦 (199)

丸瓦で図化できるのはこれだけである。端部はすべてヘラケズリで仕上げられており、復原すると直径約14cmの型が使われている。

平瓦 (200～206)

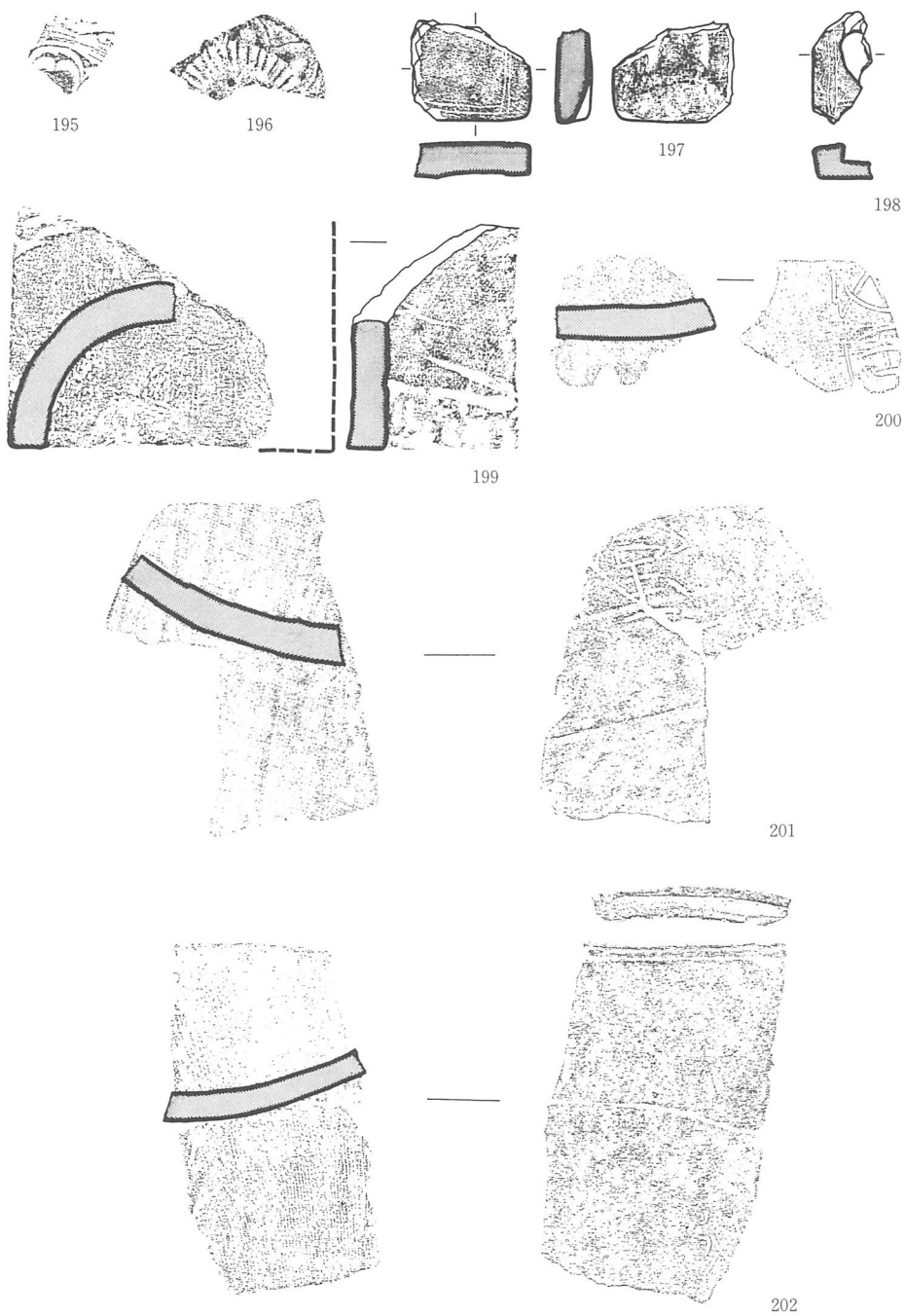
凸面に縄目タタキメを持つもの(203・204)とナデ調整を施したもの(200～202・205・206)がある。ナデ調整を施したもののうちには(206)のように調整前の縄目が確認できる例もある。凹面には摸骨痕と布目痕が、図示したもののすべてに認められる。布目痕は経系・緯系の密度が1cmあたり11本～13本を数える「細布」に限られるが、摸骨の幅は2～3cmのもの(200～202・206)と3～4cmのもの(203・204・205)がある。端部はいずれもヘラケズリで仕上げている。

平瓦のうち、線刻文字が認められるものが3点ある。(200)は「池田」、(201)は「堂」(堂の異体字)、(202)は「池」の三水遍と夫々判読でき、「池」には三水遍が連続する(200)と、断続的に書かれた(202)の二書体が認められる。これらの文字瓦は胎土・焼成・色調・調整の状況が近似している。

L. 土製品・金属製品・石製品 (207～212) 第34図 図版第90

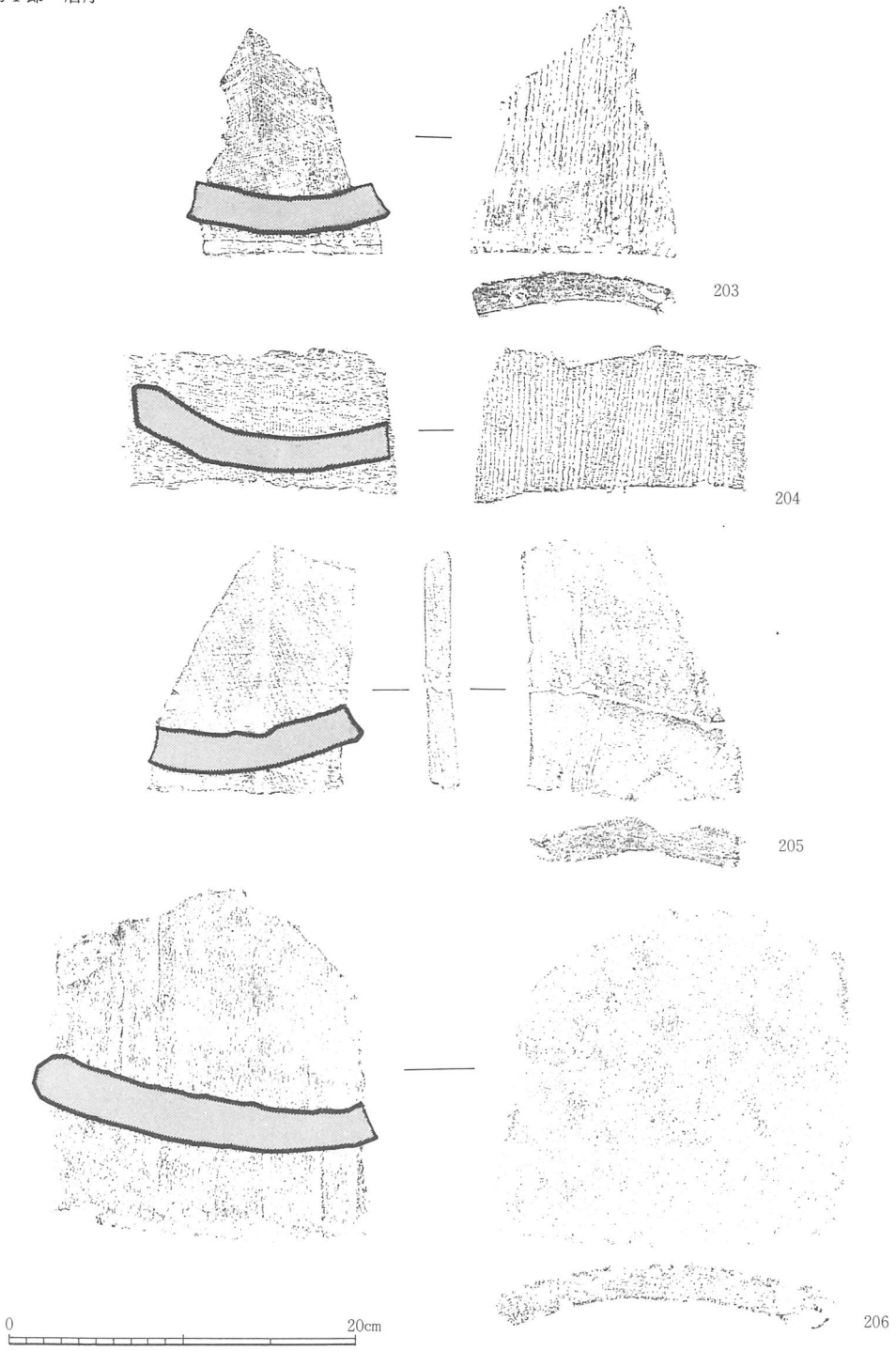
いずれも少数しか出土していない。図化したものの他には2点の釘と思われる鉄製品があるだけである。

土錘(207・208)は大小2種類あるが、何れも竹管状のものに粘土を巻きつけて作った

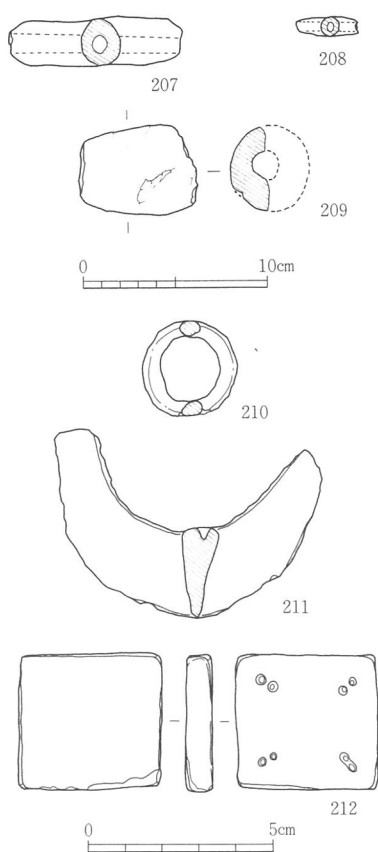


第32図 包含層出土遺物 (瓦)

第1節 層序



第33図 包含層出土遺物（瓦）



第34図 包含層出土遺物
(土製品・金属製品・石製品)

管状のものである。(209)はフィゴの羽口である。

(210)は径約3cmのリング状鉄製品で用途は不明である。(211)は「U」字状をなす鉄製の鋤先であるが、復原最大幅が約7.3cmの小型品である。

(212)は巡方で四ヶ所に潜穴を穿っている。質の悪い凝灰岩を素材にしており、火中した形跡があるが、一部に漆と思われる黒い被膜が遺存している。

これらの遺物の年代について、形態から8～9世紀のものであることが明らかな巡方以外のものは、それらが出土した遺物包含層の年代観以上のことは直接には判明しない。

ただし、鋤先については、その出土地点から水田跡1615-OZに伴うものである公算が大と言える。

第5項 小結

以上、調査地の旧地形・基本層序・遺物包含層出土遺物の組成・各層出土遺物について夫々記述してきた。そのなかでも触れてきたが、出土遺物の整理・分析をとおして、新しく得た所見も少なくないので、今一度簡単に取りまとめておくことにしたい。

1. 検出した遺物包含層は、調査地の基盤地形の制約及び堆積後の削平により、全面には遺存していない。第3・4層は連続した分布範囲が確認できるが、第5層は調査地内の三箇所に孤立して分布している。
2. 第3層以下のすべての遺物包含層は、古い時期の遺物を多量に混在させつつ堆積し、歴史的に何回かの人為的移動を受けた可能性がある。堆積年代の決定は各時代の包含遺物のうち、混入の疑いのない最も新しい時期の遺物の抽出に依らねばならない。
3. 各層の堆積の上限年代と遺構面の関係は以下のとおりである。
 - A. 第3層は15世紀前半を上限としており、第3層を耕作した水田遺構の上限年代もその時期と考えられる。
 - B. 第4層は谷地形の最終堆積層である12世紀後半の遺物を含む部分と、中世の遺物

を含まない部分とを分離して考えねばならない。その具体的手掛りは出土遺物の平面分布にある。

中世遺物を含まない第4層の下限遺物は平城ⅢないしⅣの時期であるが、下層にある第5 a層の年代と谷地形の最終堆積層の年代を考慮すると、その堆積は10世紀後半～12世紀前半の間にあると考えられる。そして、第3層の年代観を勘案すれば、中世遺物を含まない第4層上面を検出面とする遺構の時期は、12世紀後半～14世紀後半の間とすることができる。後述する中世の遺構で、第4層上面を検出面と記述したものは、全てこれに該当すると判断される。

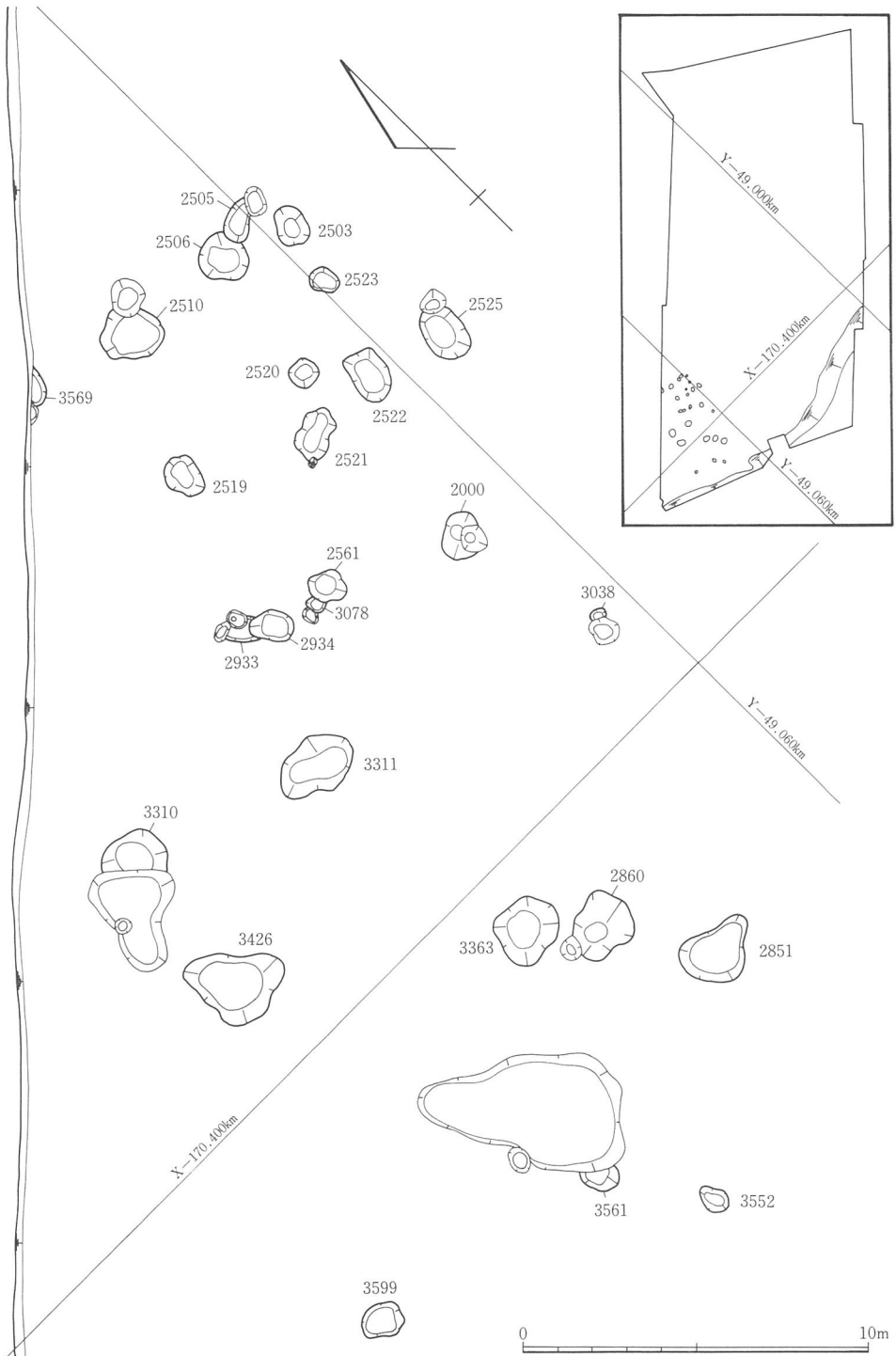
- C. 北西部と西部に分布する第5 a層の下限遺物は平城ⅢないしⅣの時期であるが、南東部の第5 a層には10世紀前半期の遺物が含まれている。しかしながら当該時期の遺物は少数であり、その全てが限られた範囲の第5 a層上部より出土していることから、当該期の遺物が第5 a層の堆積年代を示すというより、この部分の第5 a層上面を生活面とした時代の所産と考えるのが妥当であろう。従って、第5 a層上面を検出面とする遺構は平城ⅢないしⅣ～10世紀前半の間のもと考えられる。
- D. 第5 b層は飛鳥Ⅰ古段階を下限遺物とする薄い堆積層で、飛鳥Ⅰ新段階期の遺構の検出面となっていることから、飛鳥Ⅰ古段階期に生成したものと判断できる。
- E. 第6層は平城ⅢあるいはⅣの時期を上限とし、巨礫を多く含むことから整地層である公算が大である。

第2節 縄文時代の遺構・遺物

第1項 概況 第35図 図版第1・5・6

出土遺物・埋土の状況・遺構の重複関係から縄文時代のものと判断できる土壌状の遺構が、合計26基検出された。これらは調査区西南部の800m²程の範囲に集中して群をなしており、地形的に見れば河成段丘の縁辺に分布するといえる。遺構検出面の標高は凡そ53.5 mである。

これらの遺構群を構成する土壌状遺構（以下、土壌とする。）には、規模・形状から長さ1.0m以下の小規模なもの（3078・3038）と、その他の比較的大規模なものがある。後者は長さ1.0m以上で平面形が長円形のもの、長さ2.0m以上の不整形なものに大きく二分されるが、円形を呈するものも少数ある。そして、大規模で平面形が不整形を呈する



第35図 縄文時代の土坑配置図

第2節 縄文時代の遺構・遺物

土壌は、遺構群の南側にだけ分布している。土壌の深さは0.3m～0.7m程度で、底面形は船底状もしくは鍋底状を呈する。

土壌群の埋土は暗褐色系の色調を呈する砂質の多いシルトを基調にしており、炭化物や有機質分に富んでいる。土壌群のなかには特殊な埋土の堆積状況を示す一群がある。それは土壌中央部に、遺物を多数包含した黒褐色もしくは暗褐色系のシルト質土が、断面形が「U」字状を呈するように堆積している類で、この類のなかには土壌内の周縁部に周辺のベース層に近似した明黄褐色系のシルトが堆積しているものもある。このような埋土の堆積状況は2510・2851・3310・3311-〇〇の土層断面で顕著に観察できる。

遺物は土壌の埋土上層に集中して出土する場合が多い。出土した遺物は縄文時代中期末から後期に属する土器及びサヌカイトの剥片であるが、土器の大部分は小破片で完形品は少数である。また、2503-〇〇からはヒト・獣の骨片も検出されている。

以下、各遺構と遺物について記述を進めていく。

第2項 各遺構と出土遺物

2506-〇〇 第36図 図版第7

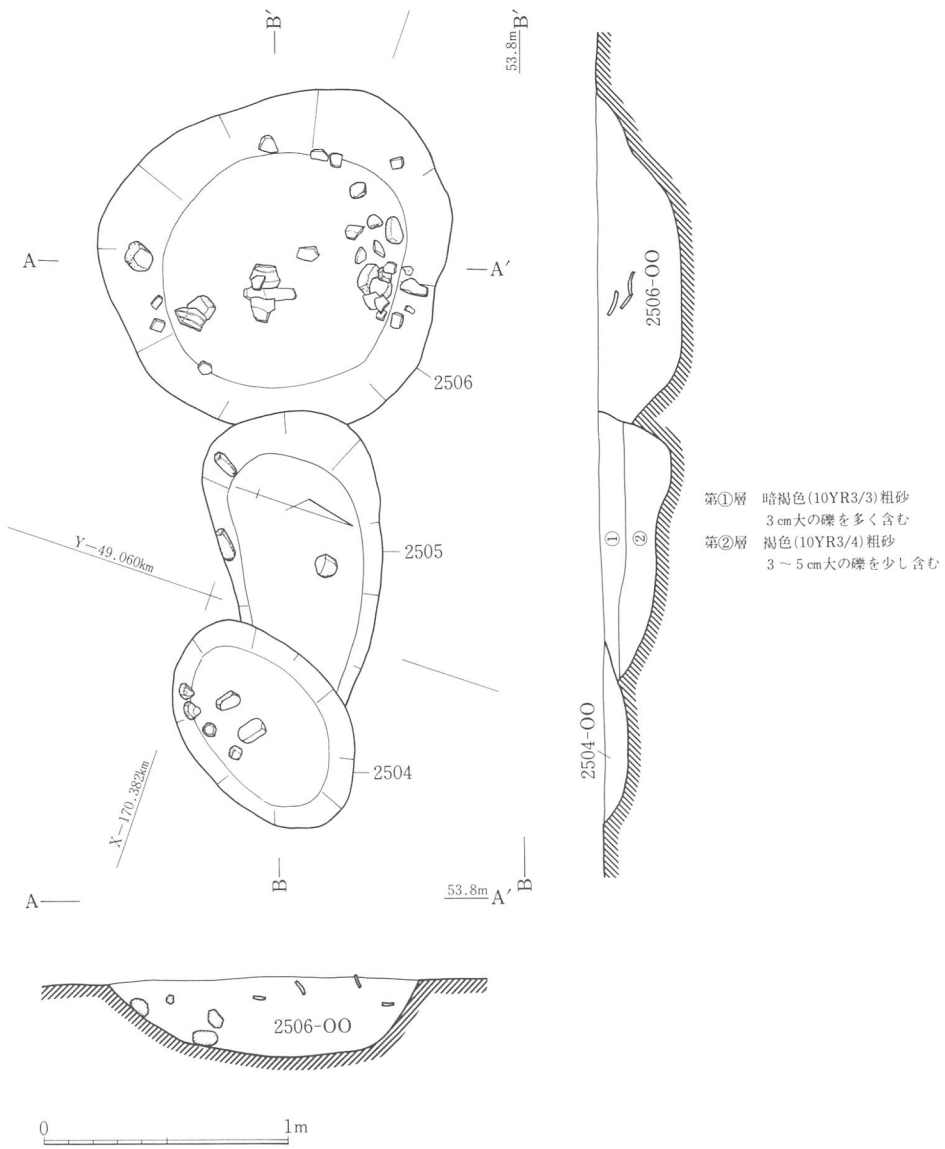
東側の一部を縄文時代の土壌2505-〇〇に壊されているが、平面形は径約1.4mの円形を呈し、最深部の深さは約0.34mを測る。底面の形は鍋底状を呈する。埋土は暗褐色(10Y R 3/4)粗砂・中礫を多く含むシルトの単一層である。遺物は主として埋土の上部で出土した。

出土遺物(213～218) 第37図 図版第91

縄文土器184片・剥片3片のほか、摩耗著しいが縄文土器と考えられる土器片4片が出土している。そのうち5点を図化した。その器種は、(218)が浅鉢もしくは壺になる可能性があるが、他は深鉢と考えられる。口縁部形態は、平口縁2(213)・波状口縁2 a(215)・波状口縁2 b(214)に、口唇部形態は無肥厚(213)・肥厚1(214・215)に夫々分類できる。

文様については(218)以外は全て沈線区画縄文帯をもつ。そのなかで、(215・217)は「J」字状文が確認でき、(216)は縄文帯と無文帯が横位の曲線的・重層的な文様を構成していることからII類と判断される。(213・214)はI・II類の区別が困難である。

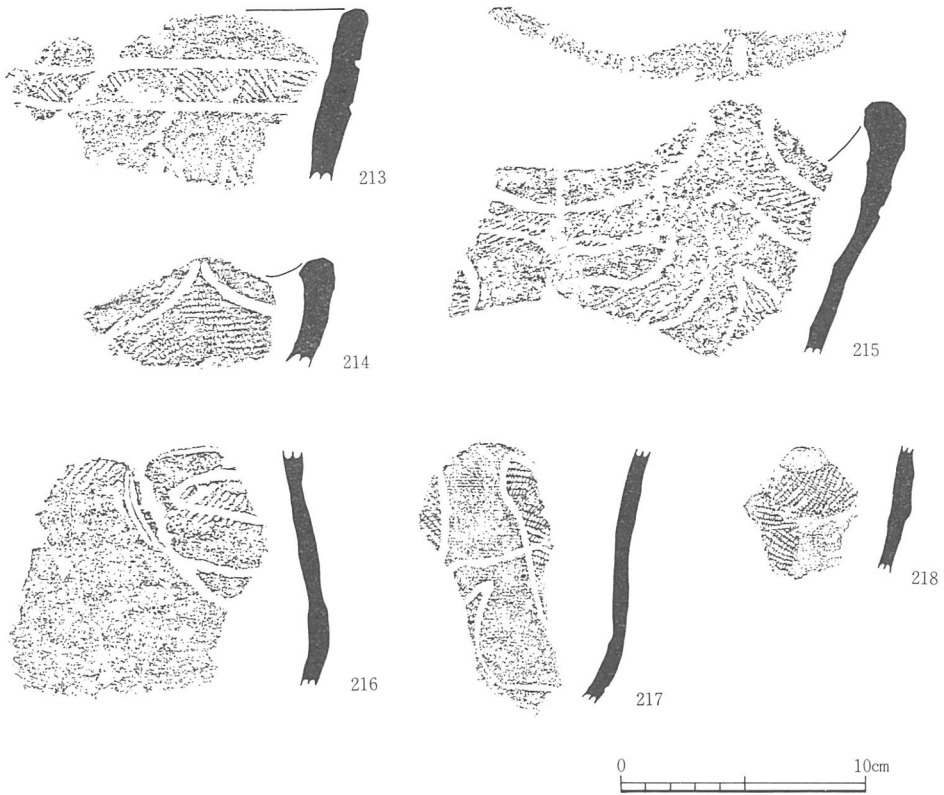
(218)は器面の一部を幅広の隆帯状にして、その上に縄文を付け、曲線と垂下する文様を表現している。



第36図 2505・2506-〇〇実測図

2505-〇〇 第36図

東側の一部を8世紀の土壌2504-〇〇に壊されているが、平面形は東西に主軸を置く長円形を呈するものと思われ、遺存する限りでは南北0.87m・東西1.20mの規模を測る。最深部での深さは約0.32mで底面形は船底状をなす。埋土は二層に分層でき、遺物は主として埋土の上層から出土したが、縄文土器4片を数えるに過ぎない。出土遺物は乏しいが、



第37図 2506-〇〇出土遺物

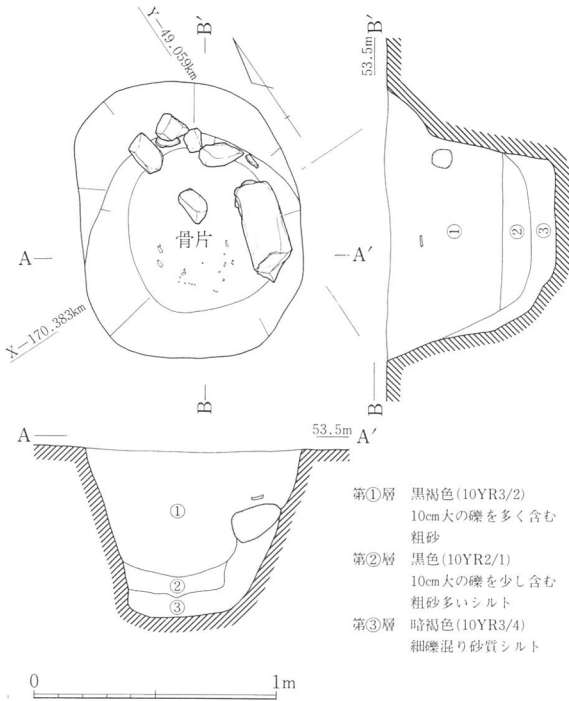
他の縄文時代の遺構と埋土が近似している点と、後世の遺物が出土していないことから縄文時代の遺構と判断した。なお、図化するに足る遺物はない。

2503-〇〇 第38図 図版第8

骨片の検出された土壌である。平面形は南北に長軸をおく長円形を呈しており、規模は南北約1.15m・東西約0.9mを測る。最深部での深さは約0.7mで、底面形は鍋底状をなしている。埋土は三層に分層でき、夫々レンズ状に堆積する。埋土②・③層は有機質分や炭化物に富んでいる。土器片は殆どが埋土①層から出土しているが、骨片の多くは埋土②層中から検出された。また、土壌底面から約30cm上部、土壌東側の壁面に一部が接した状態で、長さ約40cm・幅約20cmの石英質の自然礫が、横位の状態で出土している。埋土③層の上面にあたる。この種の自然礫は付近の段丘礫層には見られない石材なので、作為的に埋置された公算が大といえよう。なお、骨片の分析結果は第V章第2節に記載されている。

出土遺物 (219~222) 第39図 図版第91

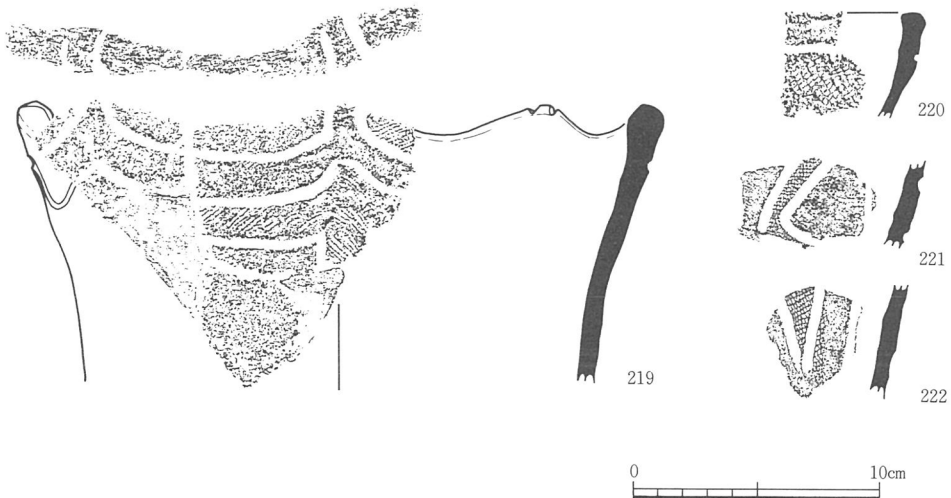
縄文土器104片が出土しているが、そのうち33片が埋土③層から出土しただけで、他は埋土①層からの出土である。図示した4点のうちでは(220)が埋土第3層出土遺物である。



第38図 2503-〇〇実測図

器種の判明するものはすべて深鉢であるが、以下、図示したものについて説明する。口縁部形態は、(219)は波状口縁2bに分類されるが、(220)は波状口縁平口縁であるか判別できない。口唇部形態は(219・220)とも肥厚1に分類できる。(219)の口唇部には外面の円弧状文が連続する。

文様は全て沈線区画縄文帯をもつもので、図示しなかったものについてもそれ以外の文様は確認できない。(220)はI・IIの類別が困難であるが、(219)は口縁部から体部に続く文様



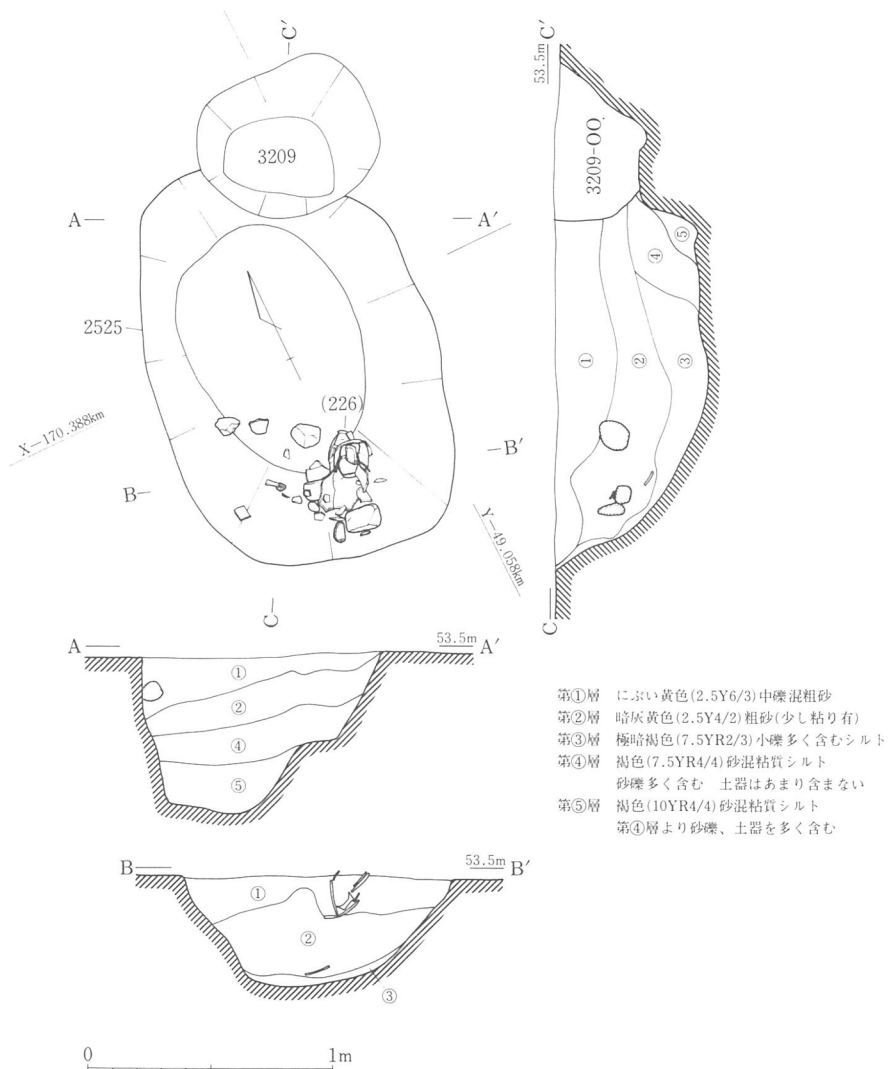
第39図 2503-〇〇出土遺物

第2節 縄文時代の遺構・遺物

(おそらく「J」字状文)があることから、また(221)は逆「J」字状文、(222)は鉤頭状の文様と考えられ、これらはII類に分類される。

2525-〇〇 第40図 図版第9

北側を3209-〇〇により壊されているが、平面形は南北に長軸をおく長円形を呈し、規模は南北約1.7m・東西約1.2mを測る。最深部の深さは約0.62mで、底面形は船底状をなす。埋土は五層に分層できるが、基本的には埋土①層と埋土②層及び埋土③～⑤層の三つの層がレンズ状に堆積していると言える。



第40図 2525-〇〇実測図

土壌の南端の埋土①層中で、完形に近い深鉢（226）が底部を北側にして横倒しになった状態で出土したほか、各層中から多数の遺物が出土している。

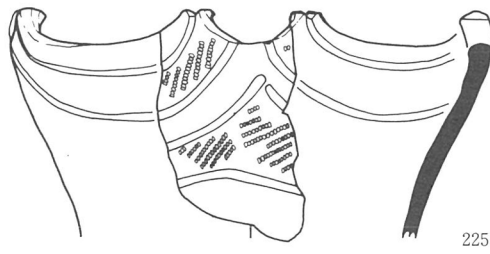
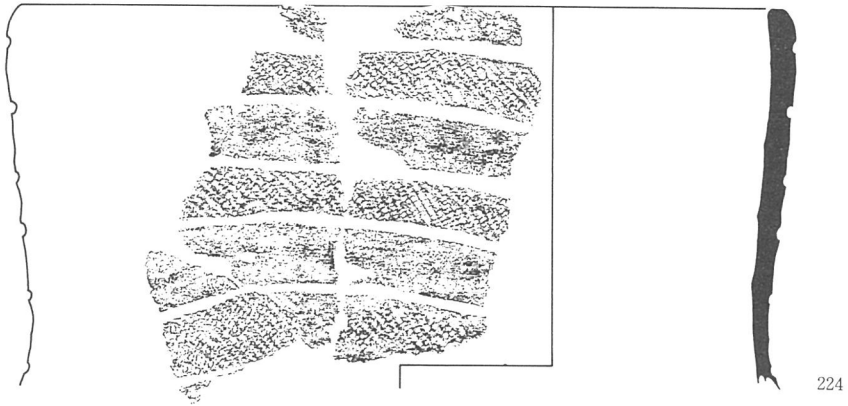
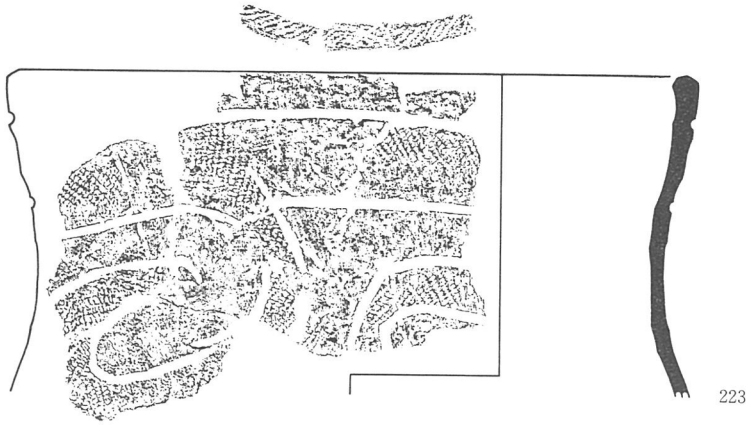
出土遺物（223～235） 第41・42図 図版第93・94

縄文土器567片・剥片10片があるが、各層から出土した縄文土器は埋土①層からは385片、埋土②層からは116片、埋土③～⑤層からは66片を夫々数える。そのうち10点を図化した。図化したものでは、（223・225・226・227・229・233・234）が埋土①層、（228）は埋土②層、（224・231・232・235）は埋土③～⑤層からの出土遺物である。以下、図示した遺物の説明をする。

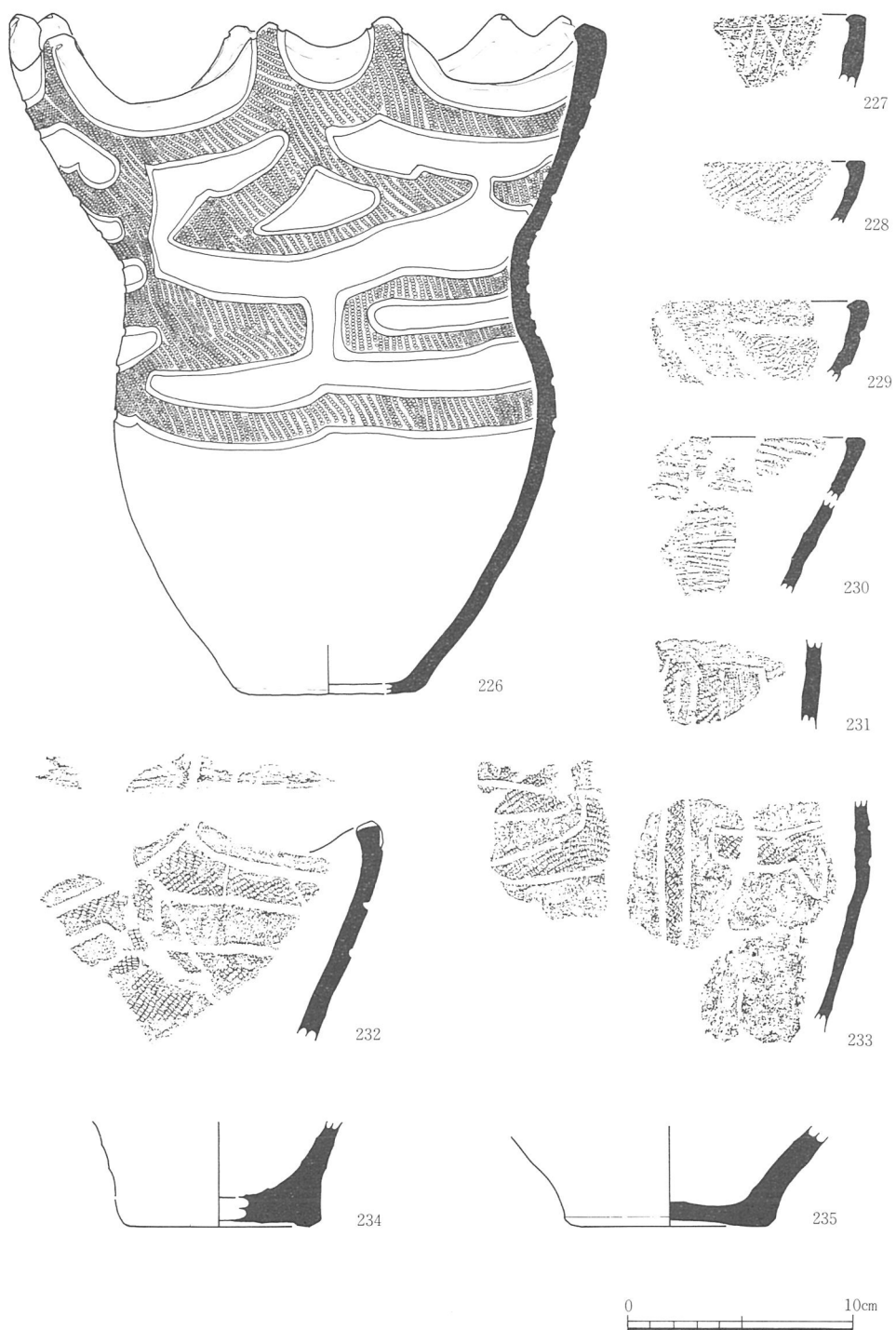
何れも器種は深鉢で、口縁部の形態は平口縁 2（223・224・227～230）、波状口縁 1（225・226）、波状口縁 2 a（232）に分類できる。（226）は波頂部の突起が二個一対で凹形をなすものと、一個のものを夫々三箇所づつ組み合わせている。口唇部の形態は肥厚 1（225～230・232）、肥厚 2（223）・無肥厚（224）に分類できる。（223）は口唇部に縄文が付き、（225・226）は口縁部の円弧状文が口唇部まで連続する。

文様構成は沈線区画縄文帯を持つものが主体で、沈線文（227）・巻貝条痕文（230）や口縁部に横位の縄文帯をもつ（228）は少数である。（228）は垂下縄文 A 種の可能性がある。沈線区画縄文帯を持つものには（223～226・229・231～233）などがあるが、（223）には「J」字文が確認でき、（224～226・232）も無文帯と縄文帯が重層的な文様を構成しており、これらは何れもⅡ類に分類できる土器と言える。特に、完形品に近い（226）は口縁部と体部の文様が連続していることが確認できる。

一方、（231）は垂下する縄文帯を画する沈線が上方で完結せず、Ⅰ類の土器といえる。（231）と同種の文様は3569-〇〇出土の（264）にも認められる。また、（233）についても個々の文様を画する二本沈線は完結しているが、「T」字ないしは逆「T」字状の文様が垂下縄文帯で分断されており、孤立した文様配置をしておりⅠ類の土器と理解できる。（229）は三角形の沈線区画縄文帯が付くが、2561-〇〇出土（384）と類似のモチーフと考えられ、文様の孤立性からⅠ類と判断される。なお、（229）はモチーフだけでなく、器形や「寄り戻し」の縄文原体の使用、胎土・焼成の状況が（384）と類似しており、同一個体の可能性がある。底部片（234・235）は僅かに上げ底状をなす。



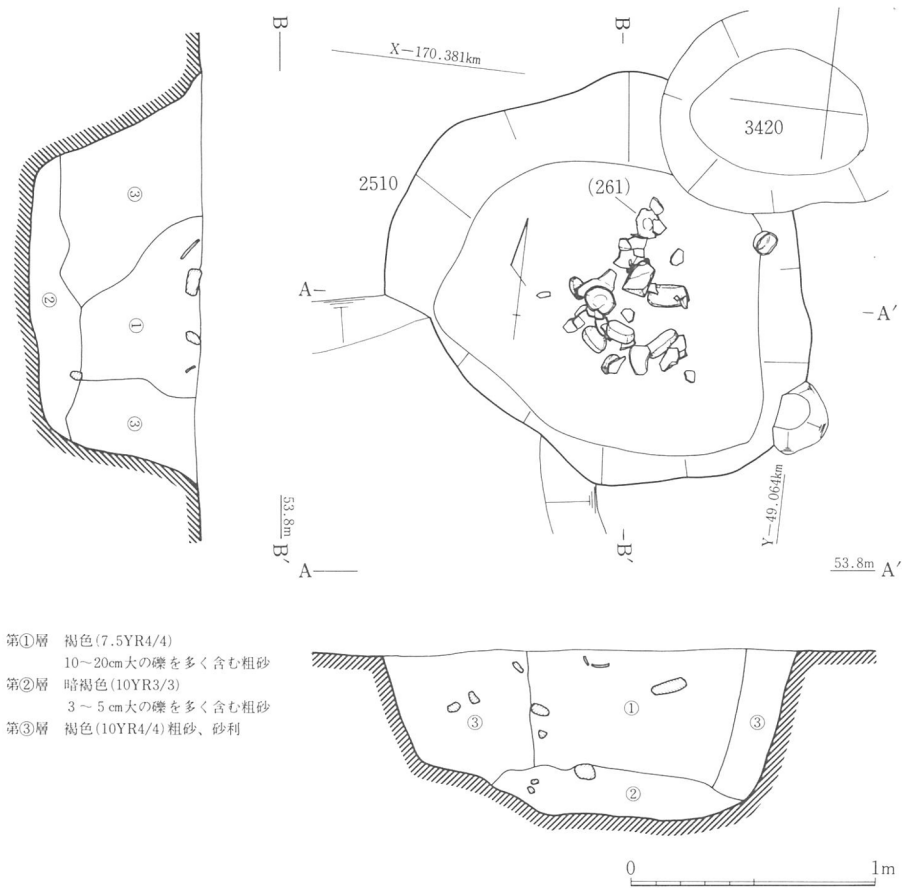
第41図 2525-O O出土遺物



第42図 2525-〇〇出土遺物

2510-〇〇 第43図 図版第10

南側を攪乱墳に、北東側は奈良時代の遺物を出土した3420-〇〇に夫々破壊されているが、平面形は径約1.7mを測る不整形円形を呈している。最深部の深さは約0.68mで、底面形は鍋底状をなしている。埋土は三層に分層でき、埋土①層は「U」字状に堆積している。遺物の殆どは埋土①層に集中し、完形に近い(261)は、①層上部に正立した状態で検出された。



第43図 2510-〇〇実測図

出土遺物 (236~263) 第44~46図 図版第95・96

縄文土器939片・剥片13片がある。縄文土器のうち128片は埋土②層からの出土で、他は埋土①層からの出土である。器種の判別できるものはすべてが深鉢で、そのうち28点を図示した。図示したものについては、(240・241・246・247)が埋土②層出土で他は埋土①

層出土の土器である。以下、図示した遺物の説明をする。

口縁部形態が判別できるものは、平口縁（236～244）と波状口縁（245～252・261）に大別できる。平口縁では、（236・237）が平口縁1に、（238・239・243・244）は平口縁2に分類できる。残りのものは細分不能であるが、（242）は平口縁1の公算が大である。波状口縁は、（261）が波状口縁1に、他はすべて波状口縁2に分類される。波状口縁2のうち（246・251・252）は2 a、（245・247・249）は2 bに細分される。口唇部の形態では、平口縁の多くは口唇部が無肥厚で、肥厚3（241・243）は少数である。一方、波状口縁は（261）のような口唇部が無肥厚のものは少数で、殆どが肥厚し、（246～250）は肥厚1、（245・251）は肥厚2に分類できる。口唇部に文様のあるもののうち、縄文があるのは（236～238・241・245～247）で、沈線文があるのは（246・251）、（240）は円形刺突文が付く。

土器の文様は沈線区画縄文帯を持つ土器（236・237・245～256）と、そうでないか確認できない土器（238～244・257～261）に分けられるので、前者から説明をする。

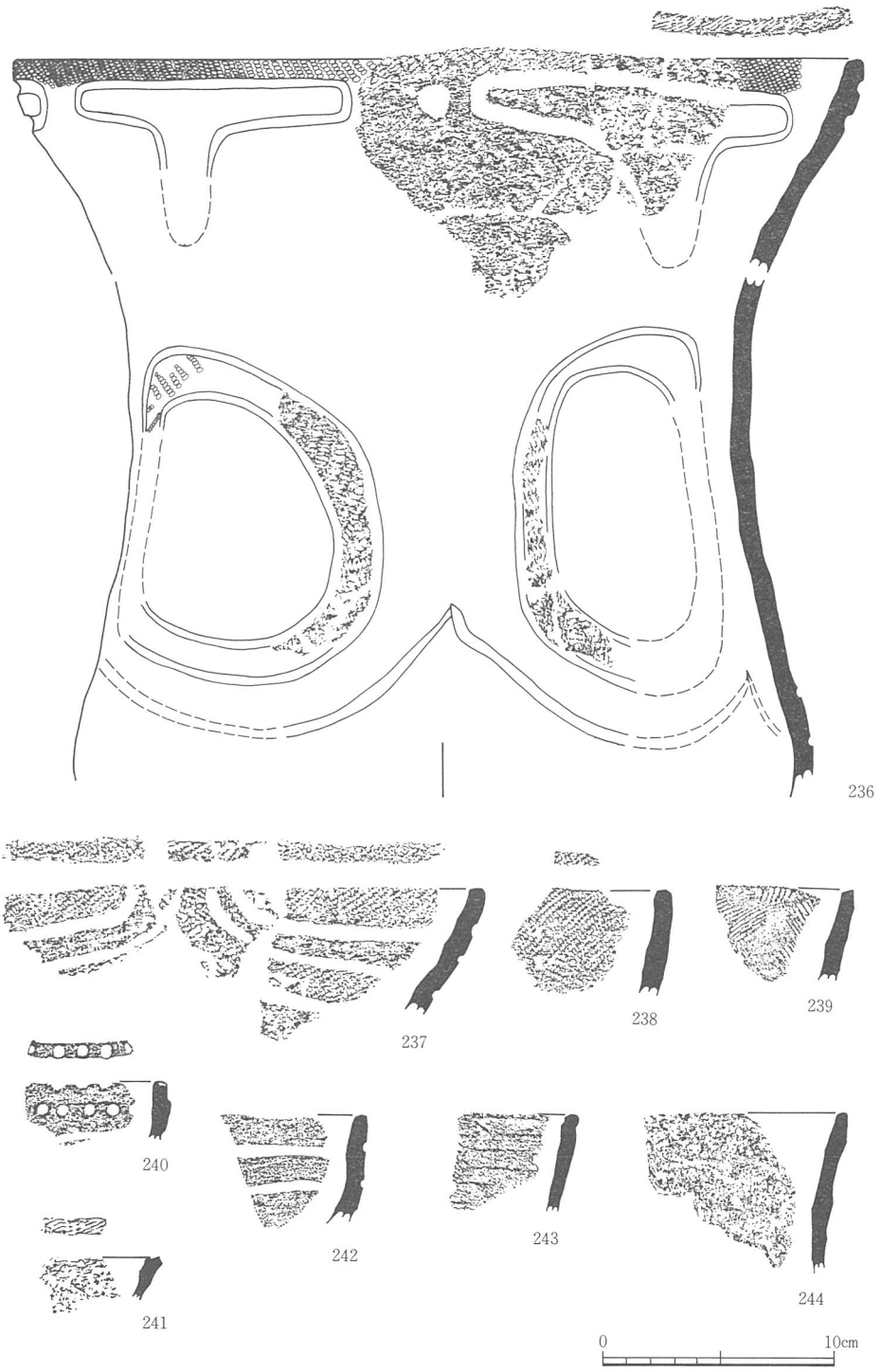
（236）は縄文帯の巡る口縁部を指頭圧痕で二分割し、間に二個の沈線による「T」字状区画文配する。体部の最大径の付近には連弧状の沈線文を付け、それと「T」字状文の間に対向する「C」字ないし「D」字状の沈線区画縄文帯を配しているが、この縄文帯は予め区画された文様帯内を縄文で埋める方法で施文されている。なお、口縁部・体部の縄文原体は単節Rであるが、口唇部の縄文のそれは無節Iが用いられている。口縁部の縄文帯は区画されていないことや、体部の「C」ないし「D」字状文が孤立的なことから、I類に分類できる。

（237）は縄文を充填した区画と無文区画が連弧状をなす。下方に円弧状の沈線が一部遺存しており、文様の中心部に円形の沈線文を配したものである可能性が強い。連弧状文様の重層性からII類に分類できる。

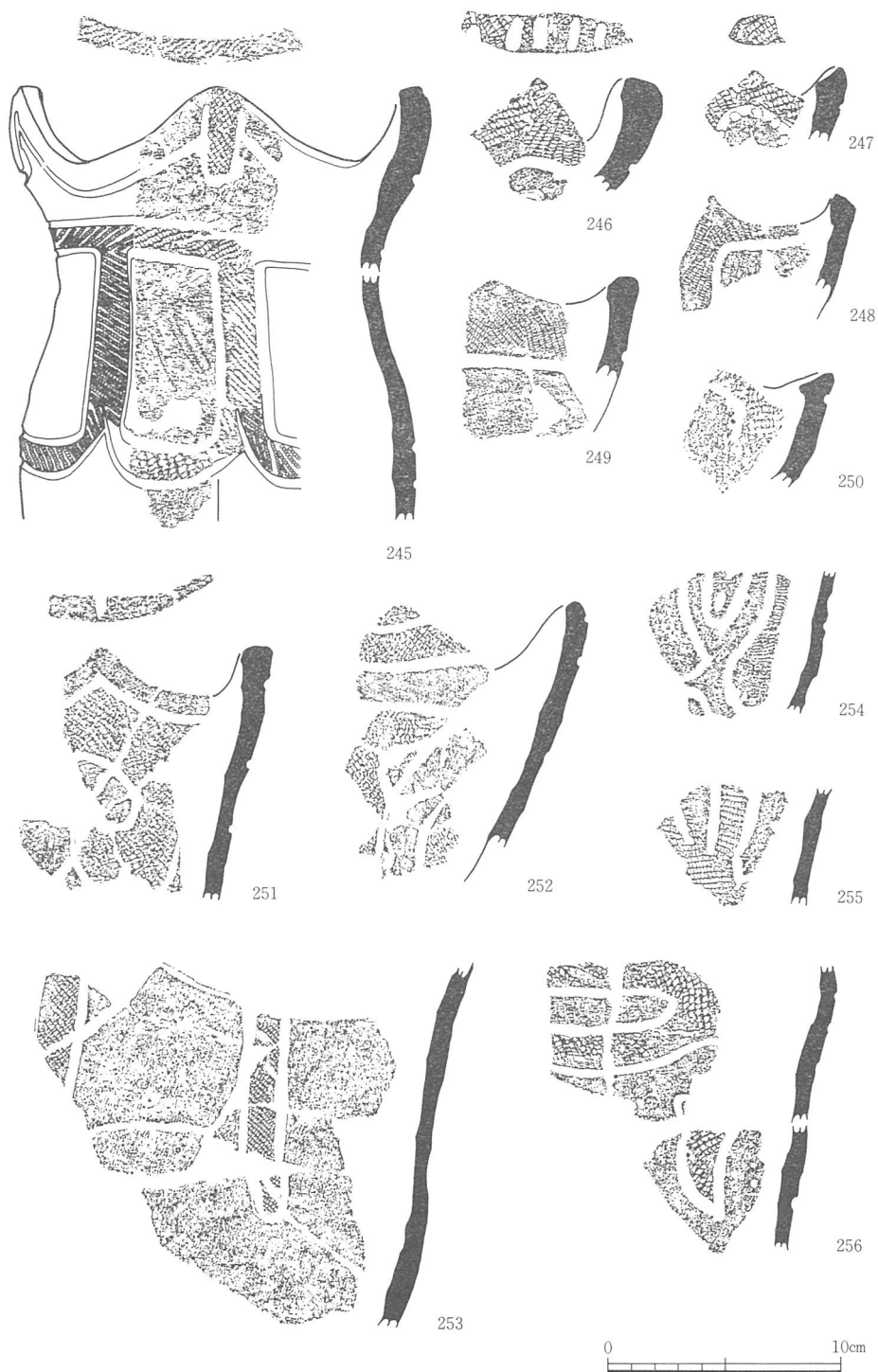
（245）は体部に窓枠状の区画文様が連続しているが、口縁部と体部の文様は繋がっておらず、また波頂部の無文帯と縄文帯を画する沈線は途切れている。区画の不徹底性と文様の非連続性からI類に分類される。

（246～249）はI・IIの区別が困難な土器である。（246）の口唇部拓影の一番左側にある一見すると沈線に見える凹みは、植物質のものが焼成時に焼失した跡で、波頂部の沈線文は5本である。（247）には沈線内に竹筴状工具による刺突文が認められる。

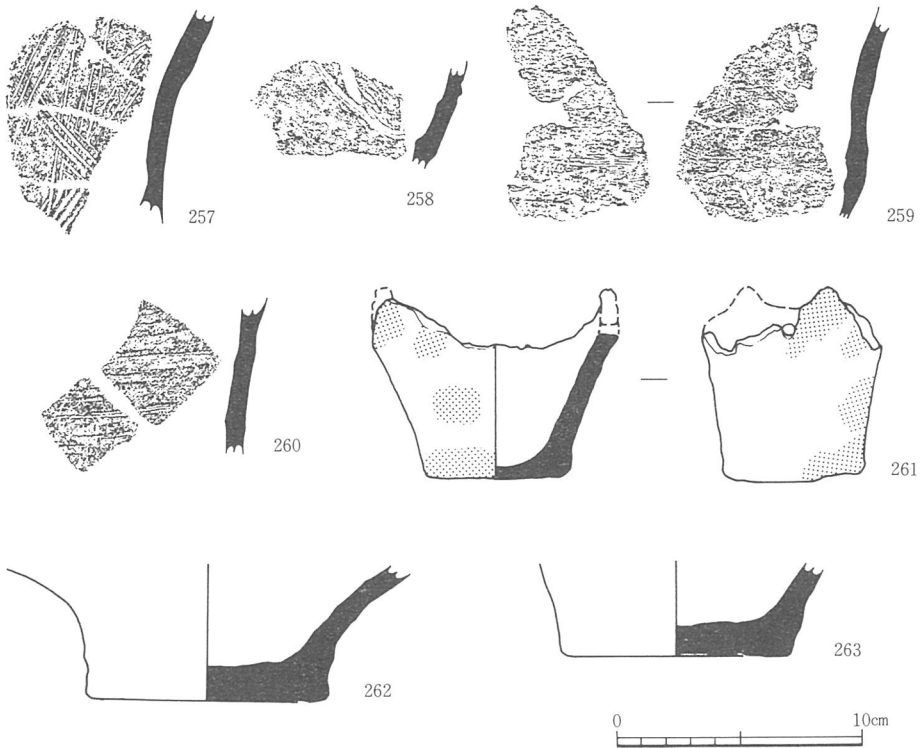
（250・255）は無文帯と縄文帯を画する沈線が途切れており、I類に分類できる。



第44図 2510-〇〇出土遺物



第45図 2510-〇〇出土遺物



第46図 2510-〇〇出土遺物

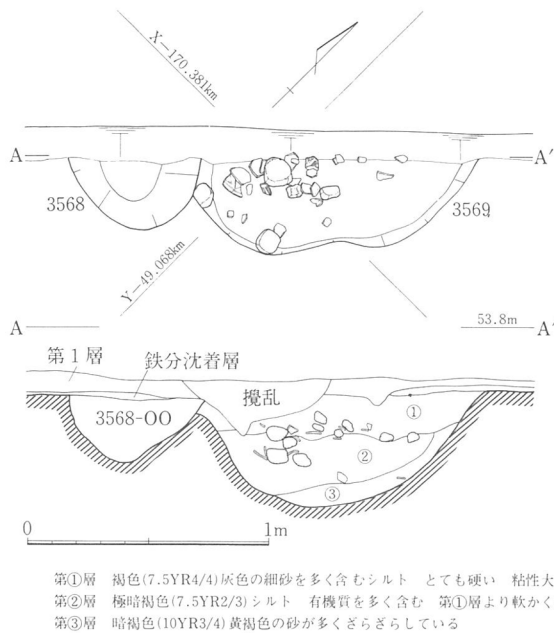
(251～254・256)はII類に分類できる土器である。「J」字状文(251)、曲線文(252)、紡錘状文(254)、垂下文様の付く曲線文(253・256)が確認できる。なお、(254)は巻貝の回転擬縄文、(256)は複節Rの縄文が施文されており、この種の資料は全出土遺物のなかでは夫々1例である。

沈線区画縄文帯を持たないものには有文のものと無文のものがある。有文土器から記す。(238・239)は垂下縄文A種の土器である。(240)は口縁部外面に突帯状のものを造りだし、その部分と口唇部に竹菅状の工具による円形刺突文を施文する。(242)は2本の沈線を施しているが縄文は認められない。(257)は条線文B種。(260)は巻貝による条痕文が付く。(258)は沈線で曲線を描いた後に縄文を施文しているが、縄文が部分的に過ぎないので沈線区画縄文帯に分類して良いのかどうか判断できない。(241)は外器面が剥離しているので文様構成については不明であるが、口唇部に無節1の縄文が付く少数例の一つである。

無文のものには精粗の違いがある。外面に顕著な調整痕が認められない(244)や、内

外面を刷毛目状の痕跡を残す原体で粗く削っただけの(259)は粗製の土器である。一方、(243・261)は器面を丁寧に磨いており、精製土器といえる。(261)の口縁部は小突起が対をなす波頂部が二箇所にある構造で、口縁部の俯瞰は楕円形を呈する。夫々の波頂部の下方には径約4mmの円孔が穿たれ、内外の器面に赤色顔料を塗布している。赤色顔料の遺存しているのは網目で図示した部分であるが、本来は底部以外の全器面を彩っていたものと思われる。

(262・263)は何れも僅かな上げ底状をなす底部片で、(262)は胎土・色調の状況から見て(236)の同一個体片の可能性はある。



第47図 3569-00実測図

3569-00 第47図 図版第11

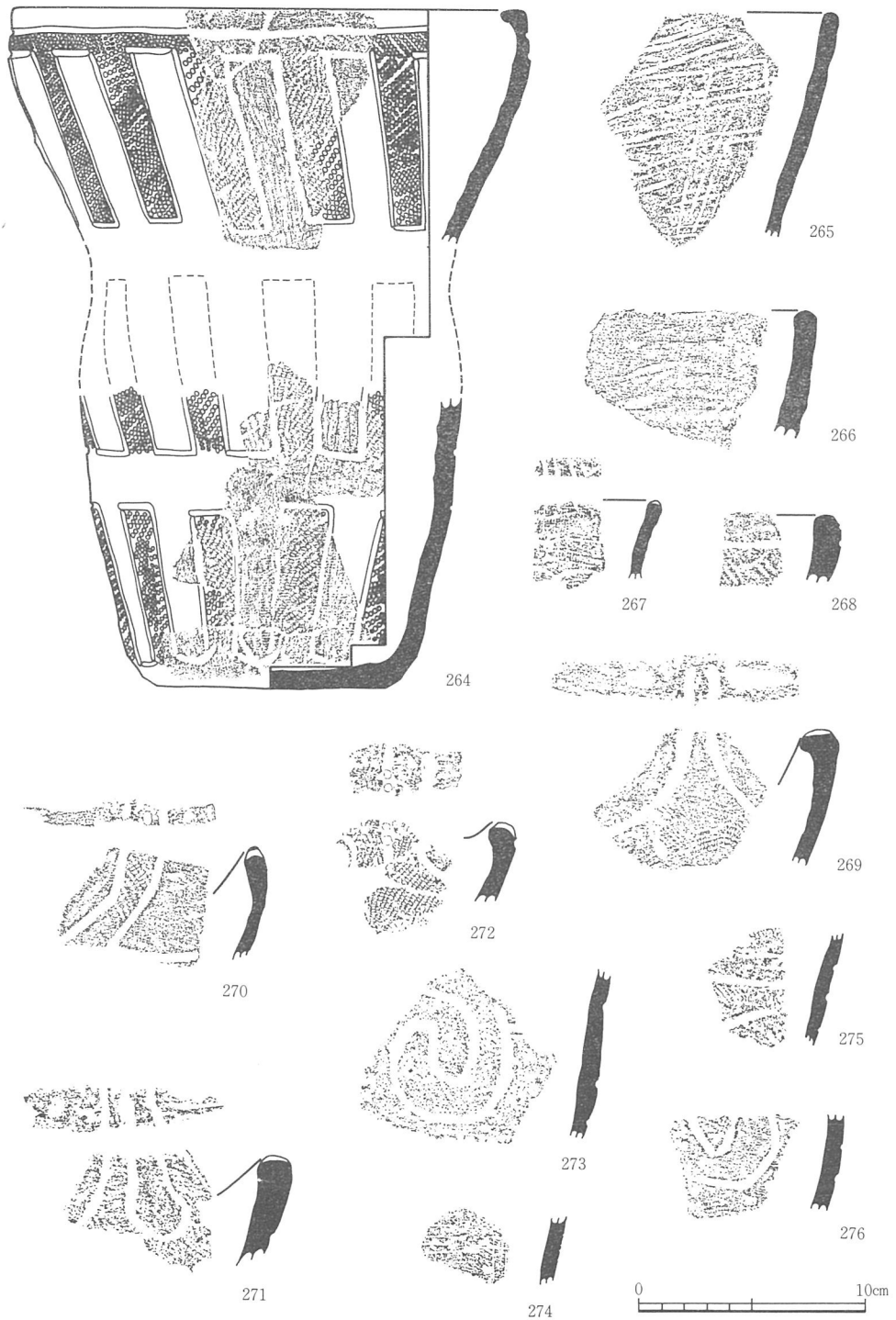
調査区外に主たる部分があり、規模の全容は不明である。また、東南部を後世のピット状遺構に壊されているが、調査した範囲では深さ約45cmを測り、底面の形状は鍋底状を呈する。埋土は三層に分層されるが、遺物は埋土①・②層の層界あたりに集中する傾向があり、出土遺物が層を超えて接合する例もある。このことは埋土①層が上部からの影響により埋土②層から変化したものであることを示唆する。

また、出土遺物のなかには、立位状態で検出されたものが少なからず認められ、この遺構の埋没が人為的なものであったことを示す。埋土中から縄文土器129片・剥片4片が出土しており、層位別では埋土①層からは縄文土器71片・剥片3片(1点は二次加工のある剥片)、②層からは縄文土器33片・剥片1片、③層からは縄文土器38片となる。

出土遺物(264~276) 第48図 図版第97

13点を図化した。何れも器種は深鉢と思われる。

口縁部の形態の判明するものは8点あり、(264~267)が平口縁2に、(270・271)は



第48図 3569-〇〇出土遺物

波状口縁1、(272)は波状口縁2 a、(269)は波状口縁2 bに分類される。口唇部形態は、(264・269・272)が肥厚1、(268・270・271)が肥厚2、他は無肥厚に分類される。

(267)は口唇部に直刻の刻み目が付く。(269～272)は口縁部の円弧状沈線文が口唇部に連続しているが、(270・272)の波長部にはそれとは別の沈線文が付く。なお、(272)の波頂部に付けられた沈線文内には、円形棒状工具による刺突文が付いている。

沈線区画縄文帯をもつ土器は9点ある。(264)は口縁部から底部にかけて、三段のクランク状の沈線文を横位に施し縄文を充填しているが、下二段は縄文帯と無文帯が沈線で区画されておらず、I類に分類できる。(270・271・273・275)は「J」字状文、(273・276)は重層的な文様が確認できるのでII類に分類できる。

(268・272)は分類が不能である。

その他の文様には、巻貝条痕文(265・266)や条線文A種(274)がある。(267)は外器面を削っただけの粗製土器である。

2000-00 第49図 図版第12・13

東南部を7・8世紀の遺構2716-00に壊されているが、平面形は径約1.4mの不整形円形を呈する。最深部の深さは約0.45mで、底面形は鍋底状をなす。埋土は二層に分層できるが、埋土①層は限られた部分に堆積しているだけで後世の掘り込痕跡の可能性も強く、基本的には単一層を埋土にするといえる。遺物は底面から十数cm程離れた埋土の上部に集中しており、砂岩の自然礫も多く出土した。

出土遺物(277～286) 第50・51図 図版第98

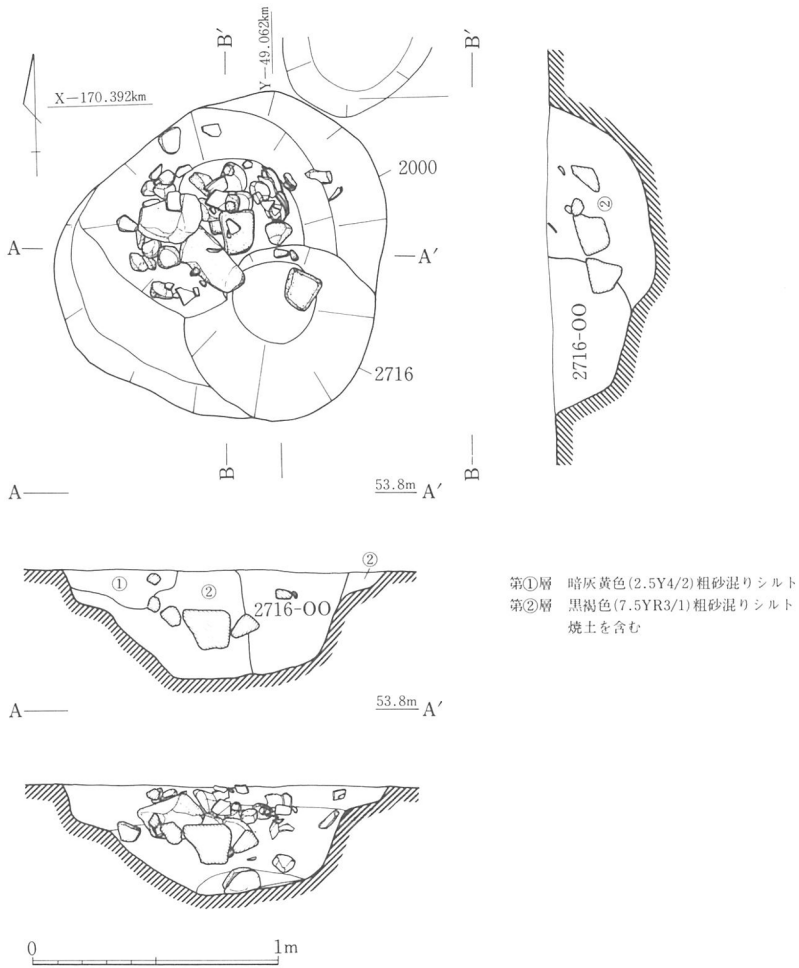
縄文土器218片・剥片7片があるが、そのうち10点を図化した。器種は深鉢が主で浅鉢は(280・283)だけである。口縁部形態が確認できるものは、平口縁1(277)、平口縁2(278・281)、波状口縁1(283)、波状口縁2(282)波状口縁2 b(279)に夫々分類できる。口唇部は、肥厚する(279・280・282)と、肥厚しない(277・278・281・283)があり、(279・280)は肥厚1、(282)は肥厚2に夫々細分できる。(277・279～281)は口唇部に縄文をもち、(283)は口縁部から沈線文が連続する。

沈線区画縄文帯をもつものには(279・282～286)がある。(279・282～285)はII類に分類できる土器である。円形文(279)・「J」字状文(282)や渦巻状(284・285)や曲線文(283)など、定型化もしくは重層的なモチーフを持つ。(279)は口縁部から体部へ文様帯が連続することが確認できる。(283)は口縁部の文様帯を構成する沈線が口唇部で鍵の手状に屈曲して内面に抜けており、阿高系の文様の特徴を備えている。(286)は、

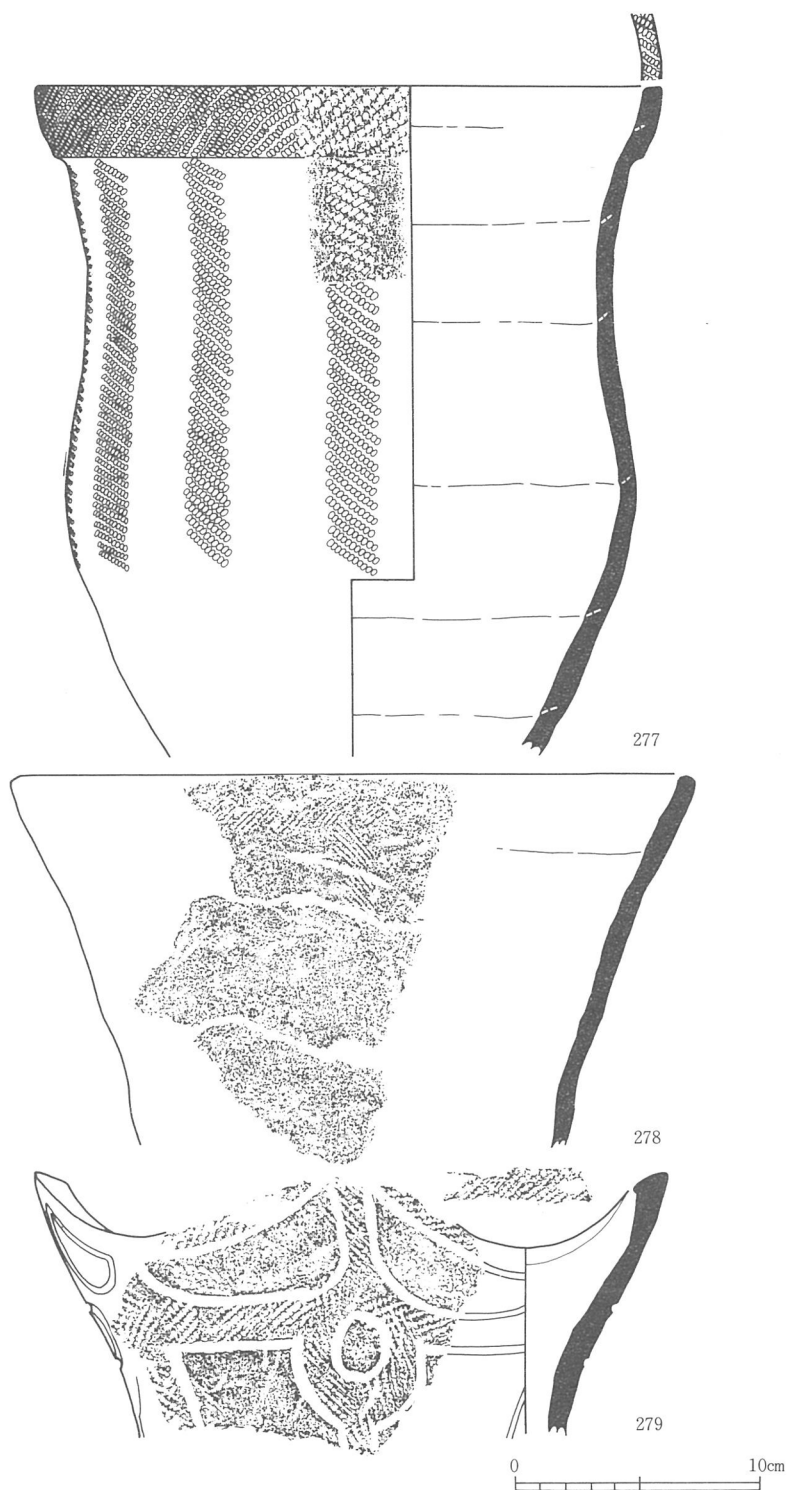
第2節 縄文時代の遺構・遺物

体部の垂下縄文帯の両側に蛇行状沈線文を配しているが、蛇行状沈線文は垂下縄文帯を区画するには至っていないためI類に分類できる。なお、(286)は垂下縄文帯の分類ではC種となる。

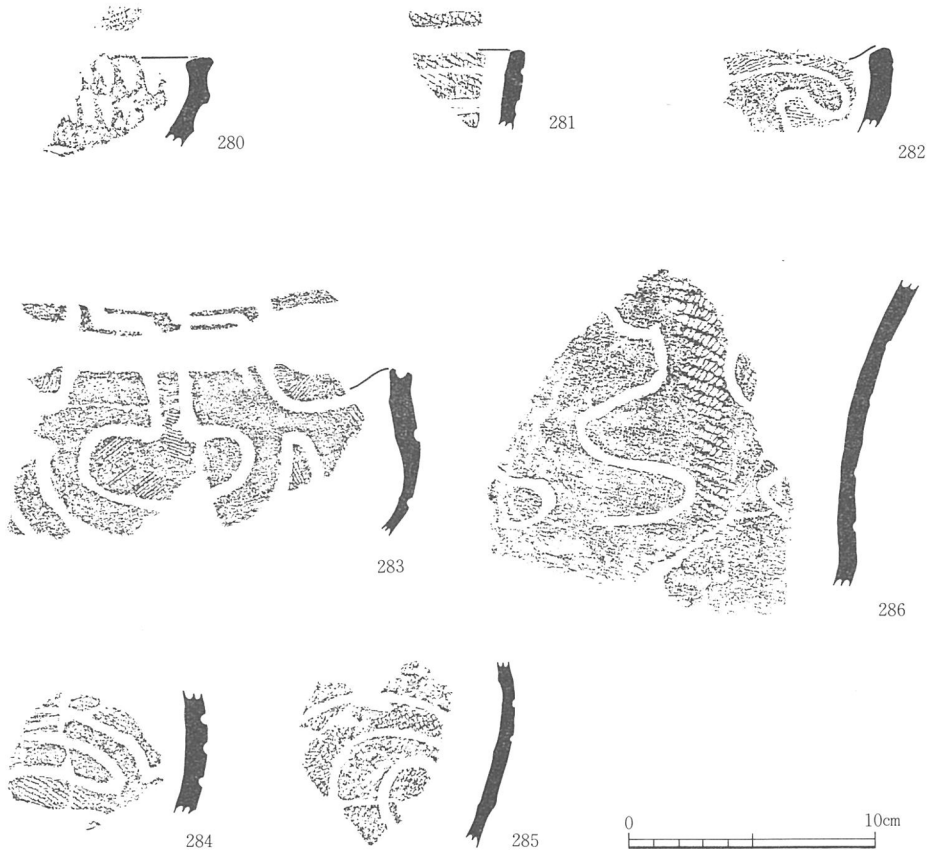
沈線区画縄文帯を持たないものは(277・278・280・286)がある。(277・278)は垂下縄文A種の土器で、(280)には竹筴状の工具を縦に押し引きした列点状の文様が認められる。(281)は縄文の中に2本の沈線が施文されているが、小破片のため沈線区画縄文帯と言えるのかどうか判断できない。



第49図 2000-〇〇実測図



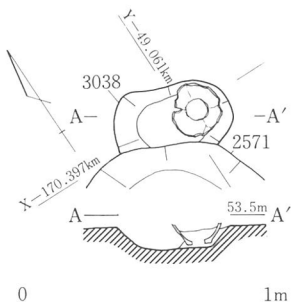
第50図 2000-〇〇出土遺物



第51図 2000-〇〇出土遺物

3038-〇〇 第52図 図版第11

南側を7世紀の2571-〇〇に壊されているが、平面形は東西に主軸を置く長円形を呈するものと思われ、遺存する限りでは南北0.25m以上・東西約0.5mの規模を測る。最深部の深さは約0.08mで底面形は船底状をなす。

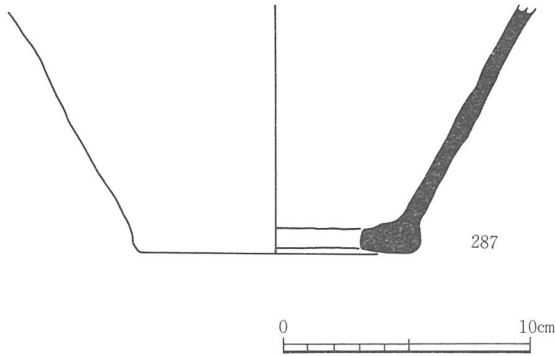


第52図 3038-〇〇実測図

埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)粗砂混じりシルトの単層である。土壌の東側で、底面に接した正立状態で深鉢の底部(287)が出土した。

出土遺物(287) 第53図 図版第94

僅かに上げ底をなす底部片で後期に属するものと判断される。底部の中央に焼成後におこなわれた径約6cmの穿孔が認められる。



第53図 3038-〇〇出土遺物

3310-〇〇 第54図 図版第14
西側を3425-〇〇に壊され、
北側にも中世のピットが穿たれ
る。そのため全体の規模、及び
形状は不明ながら、検出した限
りでは南北2.65m・東西約1.8
mの規模を測り、平面形は不整
円形を呈する。最深部での深さ
は約0.75mで、底面の形状は鍋
底状を呈するが、北側の一部は

浅いフラットな面をなす。埋土は四層に分層でき、埋土①層が「U」字状に堆積する。

出土遺物 (288~332) 第55~57図 図版第99・100

縄文土器677片・剥片27片があるが、その殆どが埋土第①層から出土した遺物である。器種の判明するものは全て深鉢であるが、そのうち45点を図化した。

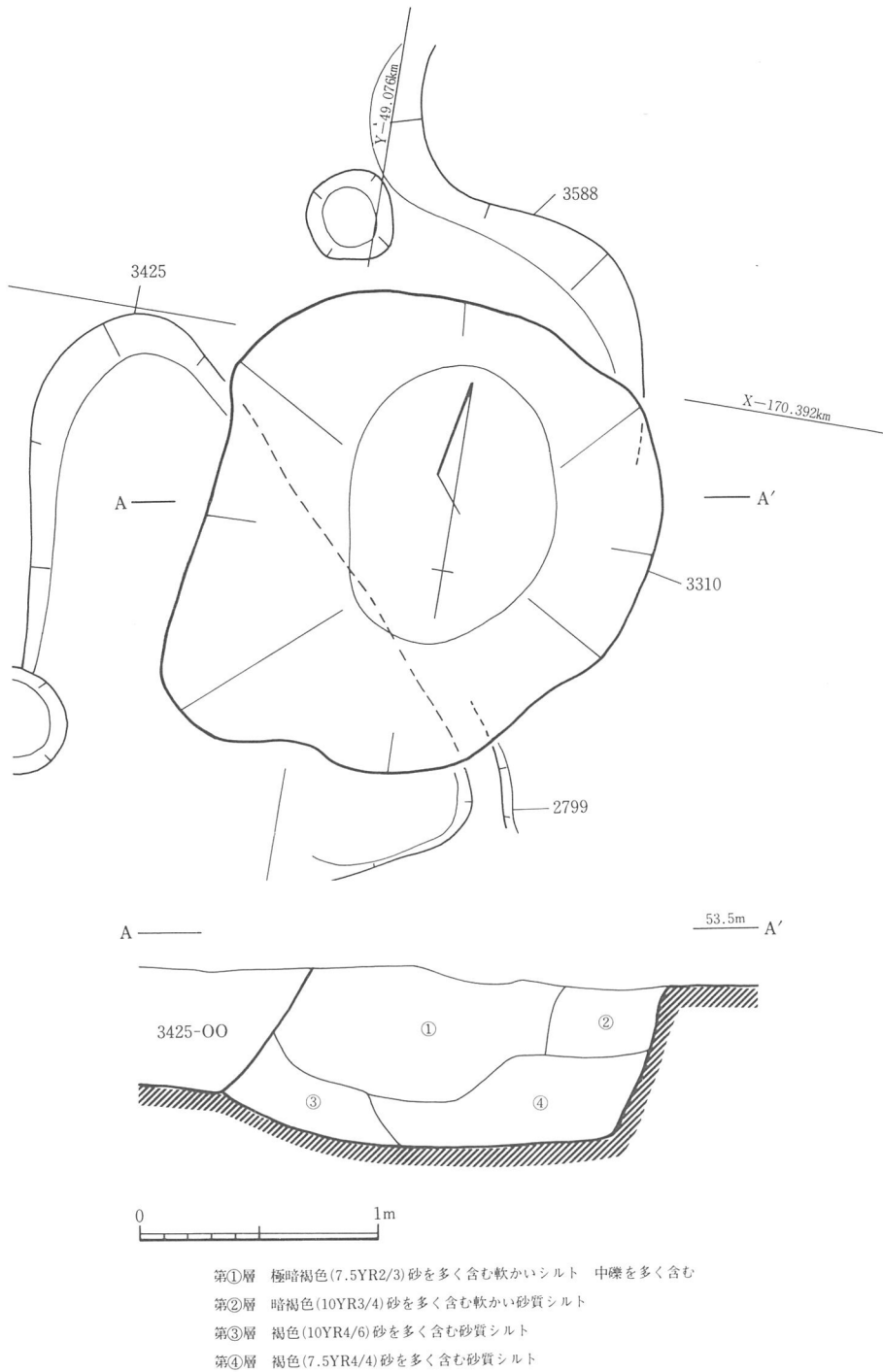
口縁部形態は、(288~301・303~310・312)は平口縁、(313~317)は波状口縁に大別される。前者のうち平口縁1に分類できるのは(288~294)であるが(295・298・300・301)もその可能性がある。他は平口縁2と思われる。波状口縁は、(314)は波状口縁1に、その他は波状口縁2に分類できるものと思われる。波状口縁2のなかで(313・317)は2bに細分される。(316)はコップ状をなす波頂部の一部である。

口唇部の形態は(305)が肥厚1に、(294・298)は肥厚2に、(308)が肥厚3に各々分類できるが、他には肥厚するものはない。これらのうち、口唇部に縄文が付くのは(289・290・292~296・299・303~306・313・317)である。

文様は沈線区画縄文帯を持つものと持たないものに分けられる。前者のうちI類に分類できるものから説明をする。(288)は半載竹管状の工具で逆「C」字状の刺突文を縦二箇所につけ、刺突文を中心に対向する楕円形区画文を配する。口縁端部近くの狭い範囲と、下方に造りだされた突帯状のものには縄文帯が付く。厳密に言えば沈線区画縄文帯の条件を満たしていないが、縄文帯と沈線文で文様を構成していることからその仲間を含めておきたい。そう考えると、沈線での区画が縄文帯と無関係な点からI類と理解できる。

(289)は横方向に二条の沈線を引き、都合三つの区画を設定するが、最上段の狭い範囲にしか縄文がついておらず無文帯と縄文帯の関係は深くない。(292)は口縁部上端に、

第2節 縄文時代の遺構・遺物

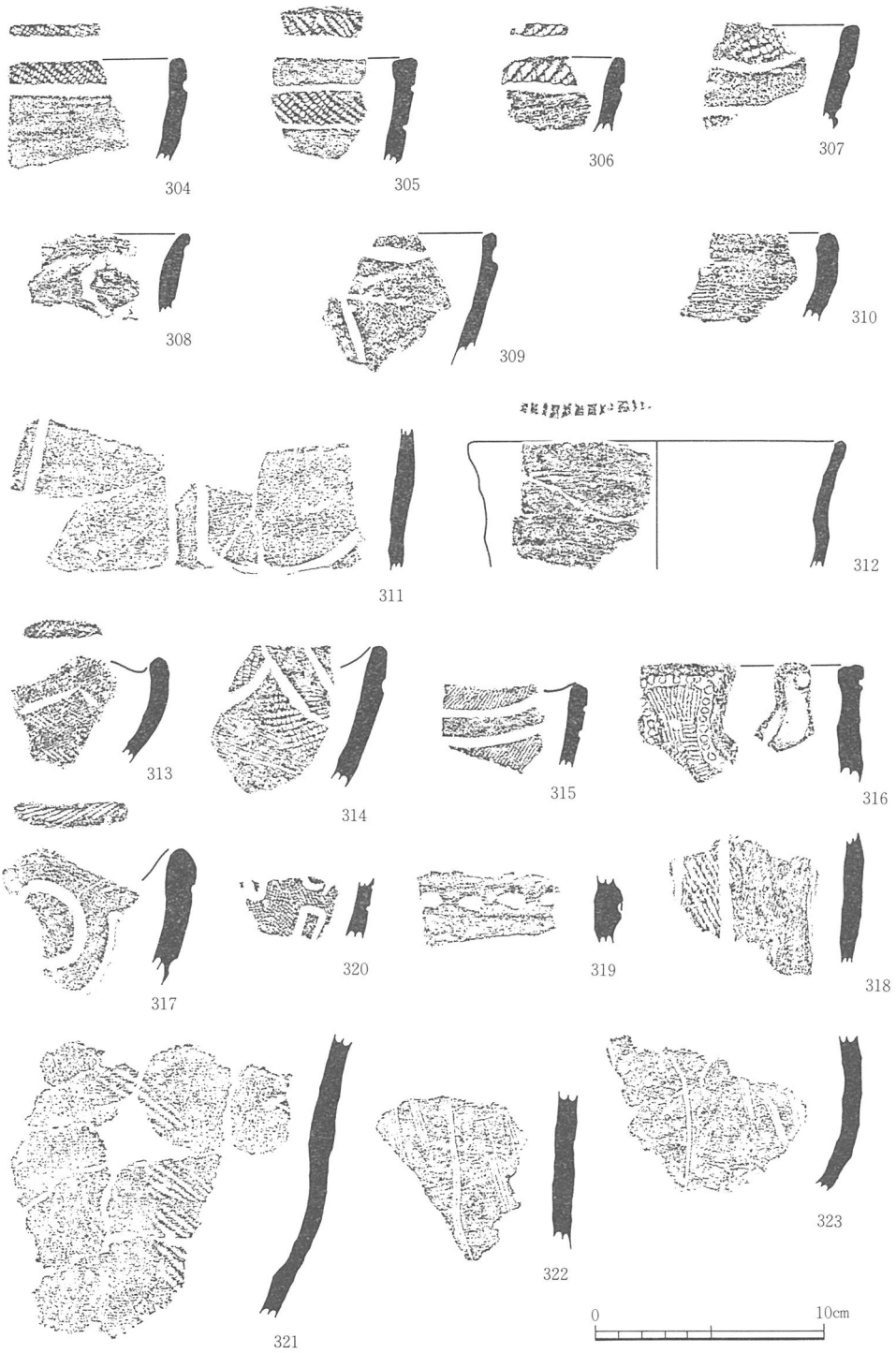


第54図 3310-00実測図

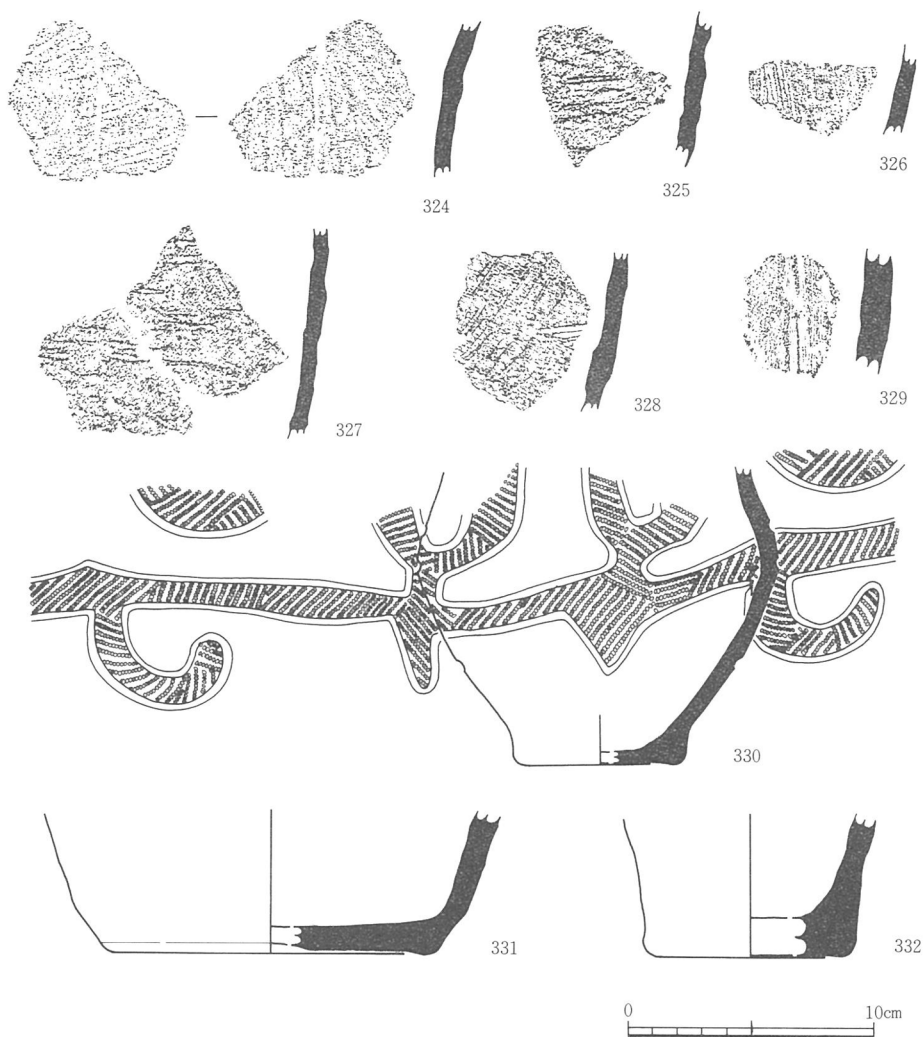


第55図 3310-〇〇出土遺物

第2節 縄文時代の遺構・遺物



第56図 3310-〇〇出土遺物



第57図 3310-〇〇出土遺物

沈線で区画された縄文帯をもつが、その下方は無文のなかに沈線文を付けただけである。

(295) は (288) と類似したモチーフと思われる。(314) は縄文帯の下方の沈線を欠いている。(298) は縄文帯と無文帯を区画する沈線が完結していない。(299) は沈線による横方向の四区画が確認できるが、無文帯が上下に帯連続する。(303) は口縁部の縄文帯が沈線で区画されながら、垂下縄文帯は区画されていない。なお、(303) は垂下縄文C種でもある。

次にII類に分類できるものを説明する。(301・302) は同一個体と判断され、沈線で区画された円形文から二条の沈線区画縄文帯が垂下しており、口縁部から体部にかけての文

様が連続する。この土器は縄文原体に複節Rを使った唯一の例である。(304・306・313・316)は沈線で区画された縄文帯と無文帯が重層的である。なお、(315)は胎土・色調の状況から瀬戸内中部からの搬入品の可能性がある。(330)は紡錘状文・鈎頭状文・逆「J」字状文があり、全ての文様が連続している。以上のほかに沈線区画縄文帯をもつものは(304・306・313・316～318)があるが、これらは何れも小破片のためI・II類の区別が判断できない。(316)は竹菅文を充填した沈線で縄文帯を区画しており、側面にも竹菅文を配置している。

沈線区画縄文帯を持たないものには、口縁部・体部に縄文を持つものと持たないものがある。前者には垂下縄文B種(297)・垂下縄文AないしB種(321)、口縁部に横位の縄文帯があるもの(290・296)、横位の縄文帯の下方に刺突文が付加されたもの(293)がある。後者には沈線文だけのもの(294・308・309・311)、突帯状のものに刺突文を付けた(319)、条線文A種(322・323・328)、巻貝条痕文(310・324～327・329)がある。(311・312)は外器面を板状工具で削った可能性があり、(312)の口唇部には直刻の刻み目が付く。条線文の施文具は、繊維のある草状のものが想定できる。なお、(309・311)は同一個体の公算が大である。

底部の形態は僅かな上げ底状をなす(330・331)と平底の(332)の二形態がある。

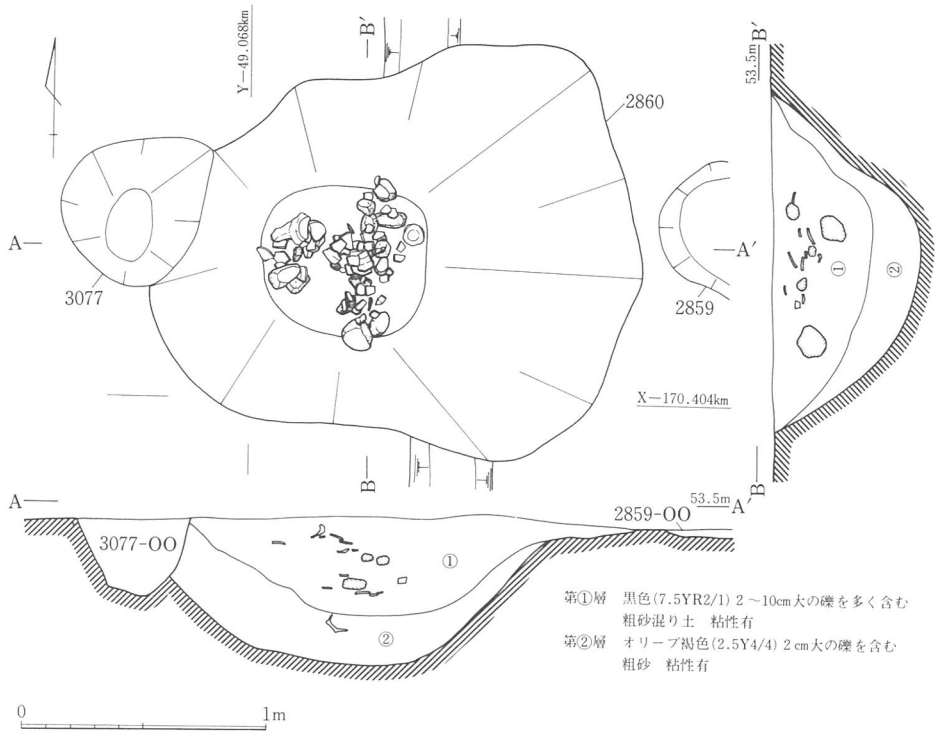
2860-〇〇 第58図 図版第15

西側を3077-〇〇に壊されているが、平面形は東西に主軸を置く不整長円形を呈し、規模は南北約1.7m・東西約2.0mを測る。最深部の深さは約0.6mで、底面形は鍋底状をなす。埋土は二層に分層でき、各々レンズ状に堆積する。

出土遺物(333～363) 第59・60図 図版第101

縄文土器465片・剝片13片のほか、摩耗著しいが縄文土器片と思われるものが32片ある。その殆どが埋土①層からの出土で、②層からの出土遺物は僅かである。図示したものでは(361)が②層からの出土遺物である。

器種は深鉢が殆どで、壺もしくは鉢と考えられるのは(360)だけである。口縁部の形態は(333～341・343・348)は平口縁2、(346・347)は波状口縁1に分類される。(344・350・351)は波状口縁2に分類されるが、(351)は2bに、(350)は波頂部に竹菅状工具による刺突文があることから2aに細分される。その他は細片のため平口縁か波状口縁かも不明である。口唇部の形態は(335・337・340～342・351)が肥厚1、(346・347・350)が肥厚2、(336・338)が肥厚3で、残りは無肥厚に分類される。口唇部に文様の



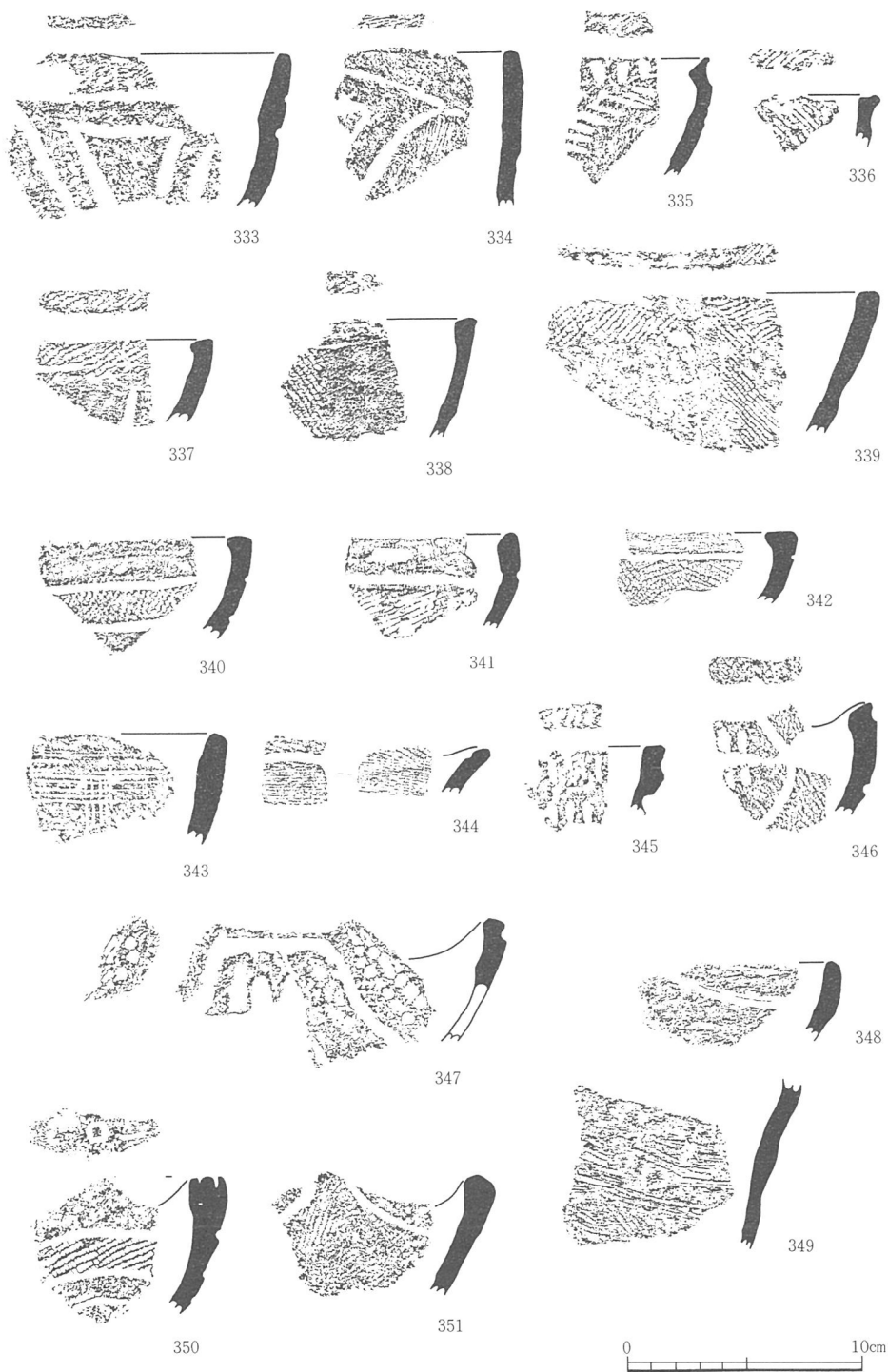
第58図 2860-OO実測図

あるものは(333~339・344~346・350)で、(350)は円形竹菅文であるが、他は縄文である。

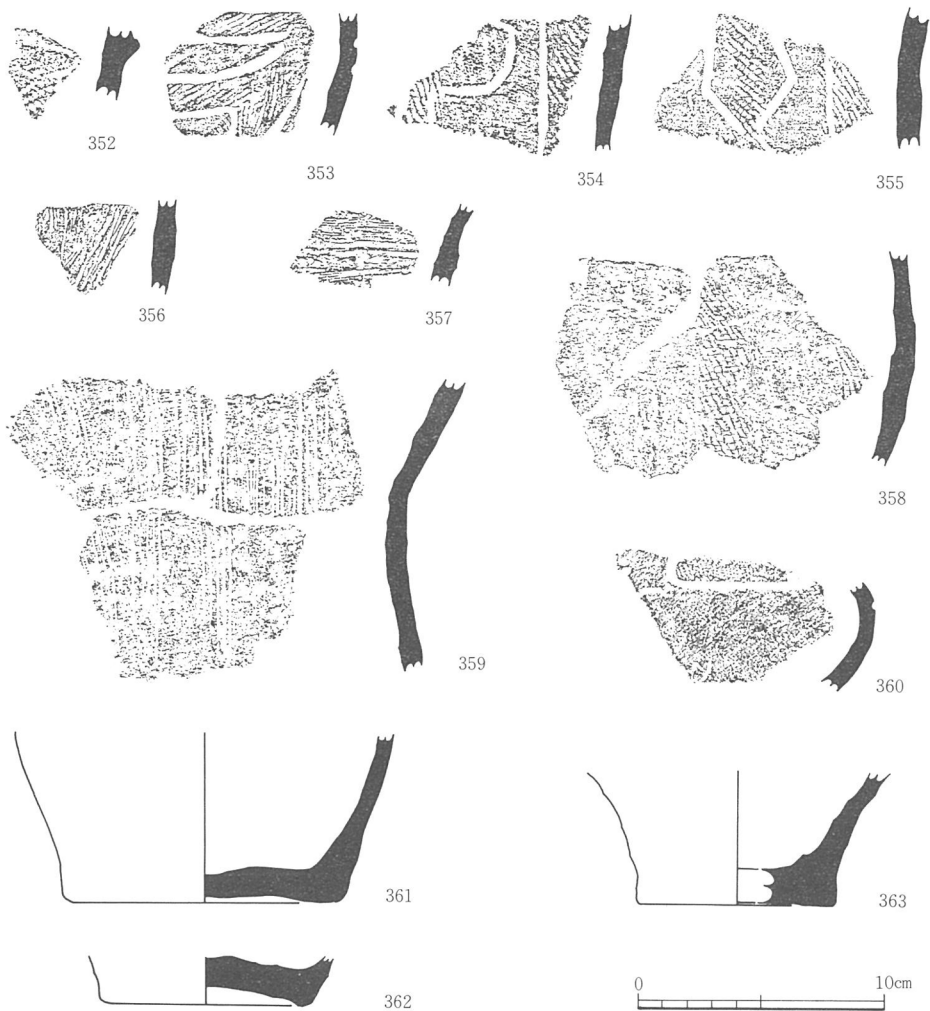
沈線区画縄文帯をもつものには(333・334・337~340・342・346・350・354・355)がある。そのうち、重層的なモチーフが想定できII類の可能性が高いのは(340・350)である。縄文地に沈線文が付加されただけの(333)や、区画沈線が途切れていたり、区画内の縄文の充填が不徹底な(337・354・355)、文様が孤立的な(360)はI類に分類される。

(337)は垂下縄文の分類ではC種となる。また、(346)は曲線で区画された無文帯の中に竹菅状工具を使った刺突文がつき、文様構成上の無文帯の地位が低いという点でI類に含まれる。

(344)は口縁端部の内外面に縄文を付け、口縁部内面に沈線を巡らせている。その限りでは沈線区画縄文帯の要件を満たしていると言えるが、他の同種文様は土器の正面観を前提に施文されているのに対し、(344)は俯瞰が前提の施文である点が異なっている。そのため、(344)は沈線区画縄文帯の範疇から除外する。また、口縁部が緩やかに外湾



第59図 2860-〇〇出土遺物



第60図 2860-〇〇出土遺物

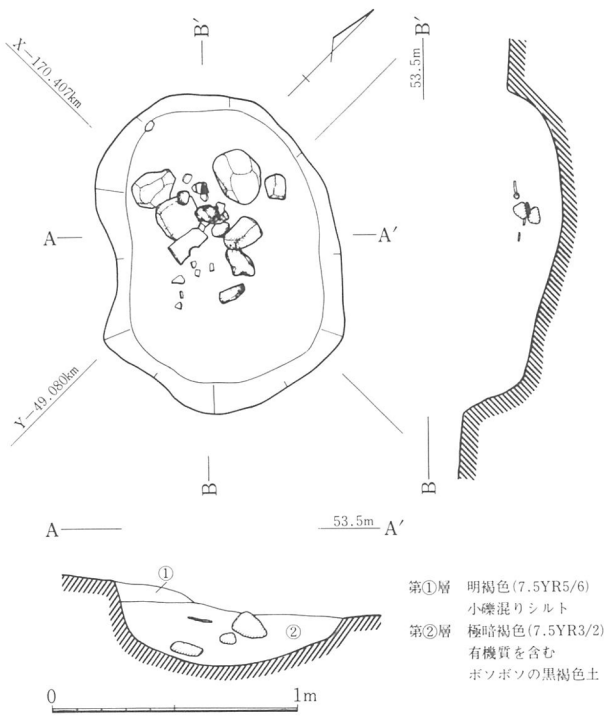
する点も他の土器とは相違した点で、他の土器とは時期が異なる可能性がある。残りのものについては遺存状況が不十分で判別できない。沈線区画縄文帯を持たないものは施文方法が様々である。縄文を文様の基調にするものとしては(336・338・339・352・358)がある。そのうち(339)は垂下縄文A種、(338)は垂下縄文B種、(358)は垂下縄文AないしB種である。(352)には縄文のほか横位の隆帯がついている。(336)は細片のため、縄文以外の文様構成要素が不明である。刺突文の付くものには竹管状の工具を「押し引き」した(335)、薄くて先端が丸い工具を使用した(345)、中心部に透かし穴をあけた

第2節 縄文時代の遺構・遺物

台形状波頂部の外側縁に円形刺突文を付けた(347)などがある。条痕文には巻貝を使用した(348・349・357)や二枚貝を使用した(353)があり、(348・353)は沈線文が付加されている。なお、(348・349)は胎土・色調の状況からみて同一個体と思われる。条線文(356・359)は、A種(356)・B種(359)に分類される。

なお、本遺構出土土器には無節の縄文を使用したものが顕著で、(333・334・336)が挙げられるが、なかでも(336)は口縁部と口唇部に撚りの向きが異なる無節原体を使い分けた特異な例である。

底部は3点図示したが、(363)のように平底のものと、(361・362)のように上げ底をなすものがある。



第61図 3599-00実測図

した。器種は何れも深鉢と思われる。

口縁部形態は、(368)は波状口縁2bに、(364)が平口縁2に分類される。(365～367・369)は平口縁の公算が大きいが、詳細は不明である。口唇部形態は、(365・367)が肥厚1、(368)は肥厚2に、(364・366・369)が無肥厚に分類される。(366)は口

3599-00 第61図 図版第16

平面形は東西に主軸をおく長円形をなし、東西約1.3m・南北約0.9mの規模を測る。深さは約0.32mで、底面の形状は船底状を呈する。埋土は二層に分層され、遺物は埋土②層の上部に集中する傾向にある。遺物の多くは水平状態で検出されたが、立位の状態のものも少数認められ、この遺構の埋没が人為的なものであることを窺わせる。

出土遺物(364～374) 第62図 図版第102

埋土から縄文土器99片が出土しており、そのうち11点を図化

唇部に縄文が付き、(368)は口縁部の円弧状沈線文が口唇部に連続する。沈線区画縄文帯の付く土器は7点あり、(371)は縄文帯と無文帯を画する沈線の途切れからI類に、「J」字状文(370)や円形文(372)及び縄文帯・無文帯の重層的な文様の認められる(368)はII類に分類できる。その他の(365~367)は細片のため分類が困難であるが、(366)は垂下縄文C種の公算が大である。

その他の文様を持つ土器は4点ある。(364・373)は巻貝条痕文、(374)は7~11mm間隔で沈線文が付く。(369)は口縁部の先端から約2.5cm程の範囲に縄文を付け、円形棒状工具による刺突文を二段に配している。なお、(364)には補修痕と考えられる焼成後の穿孔がみられる。



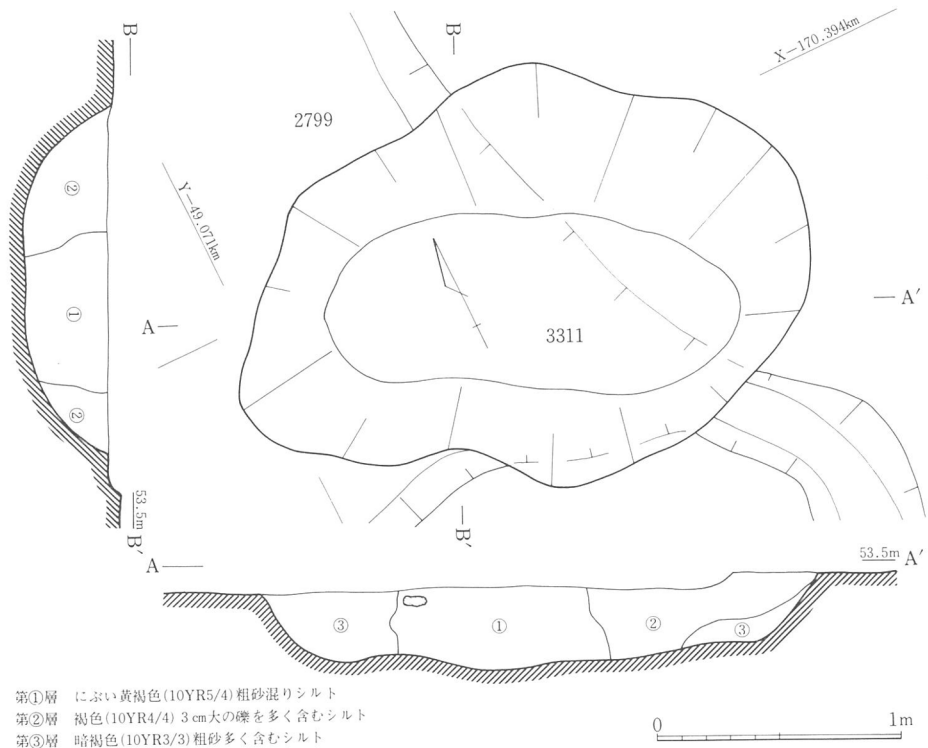
第62図 3599-〇〇出土遺物

3311-〇〇 第63図 図版第17

上部の大半を2799-〇Xに壊されている。平面形は長円形を呈し、その規模は、東西約2.4m・南北約1.7mを測る。最深部の深さは約0.34mで、底面形は船底状をなす。埋土は三層に分層でき、埋土①層が「U」字状に堆積する。

出土遺物

縄文土器が23片出土している。いずれも小破片で図化しなかったが、沈線区画縄文帯の付く土器が確認できる。



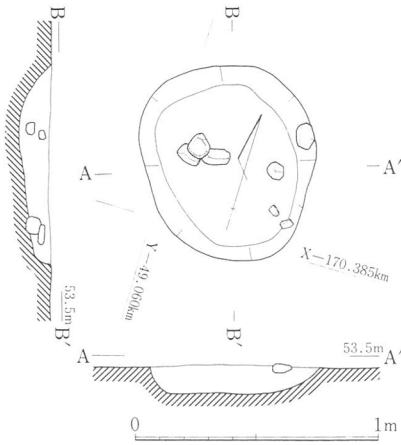
第63図 3311-〇〇実測図

2523-〇〇 第64図 図版第18

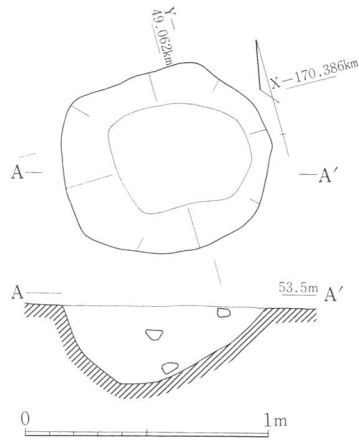
平面形は径約0.7~0.8mを測る円形を呈する。最深部の深さは約0.12mで底面形は浅い鍋底状をなす。埋土は暗褐色(7.5Y R3/4)粗砂混じりシルトの単一層で、3~10cm大の砂岩の円礫を多く含んでいる。

出土遺物

縄文土器15片があるが、何れも無文部分の細片で図化できるものはない。



第64図 2523-〇〇実測図



第65図 2520-〇〇実測図

2520-〇〇 第65図 図版第18

平面形は径0.75～0.85mを測る不整形円形を呈する。最深部の深さは約0.32mで底面形は鍋底状をなす。埋土は褐色（7.5Y R4/3）粗砂混じりシルトの単一層で、約10cm大の円礫を多く含んでいる。

出土遺物（377・382） 第76図 図版第102

縄文土器17片・剥片1片がある。そのうち2点を図化した。器形は何れも深鉢である。

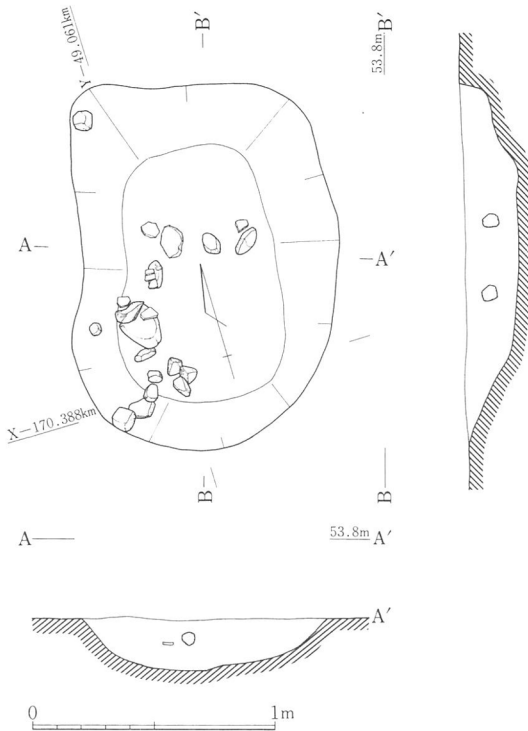
（377）は口縁部形態が平口縁2、口唇部形態が肥厚2に各々分類できる。器面の荒れが著しいが、口縁部の横位の縄文帯と垂下 縄文帯が認められ、垂下縄文A種の土器と判断される。（382）は条線文A種の付く体部片である。

2522-〇〇 第66図 図版第19

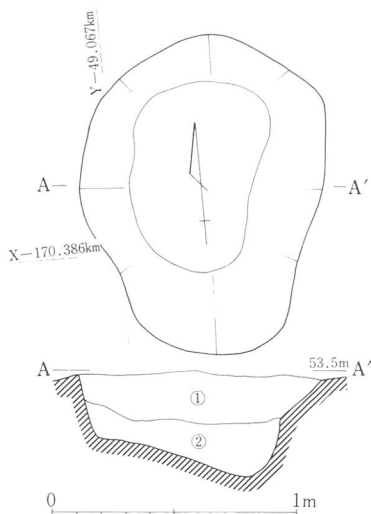
平面形は南北に主軸を置く長円形を呈し、南北約1.5m・東西約1.05mの規模を測る。最深部の深さは約0.23mで底面形は船底状をなす。埋土は暗褐色（10Y R3/4）粗砂混じりシルトの単一層で、5～15cm大の砂岩の円礫を多く含んでいる。

出土遺物（375） 第76図 図版第102

縄文土器158片・剥片2片が出土しているが、図化できたのは深鉢1点だけである。図示した（375）は接合はしないが、胎土・色調・文様の状況から同一個体と判断できる2断片である。口縁部の形態は波状口縁2b、口唇部は肥厚1に夫々分類できる。文様は沈線区画縄文帯II類に分類できるもので、「J」字状文が確認でき、口縁部の沈線は口唇部



第66図 2522-〇〇実測図



第①層 暗褐色(10YR3/4)砂礫混りシルト
第②層 暗褐色(10YR3/3)シルト混り砂礫

第67図 2519-〇〇実測図

に連続している。

2519-〇〇 第67図 図版第16

平面形は南北に主軸を置く長円形を呈し、南北約1.3m・東西約1.0mの規模を測る。最深部の深さは約0.4mで底面形は船底状をなす。埋土は二層に分層できるが、①・②層とも約10cm大の円礫を多く含む。

出土遺物 (378・380・381) 第76図 図版第102

縄文土器29片がある。そのうち3点を図化した。何れも細片のため口縁部形態は不明であるが、器種は深鉢で口唇部形態は(378)が無肥厚、(380・381)は肥厚2に夫々分類される。(378)は沈線区画縄文体を持つが分類は不能である。

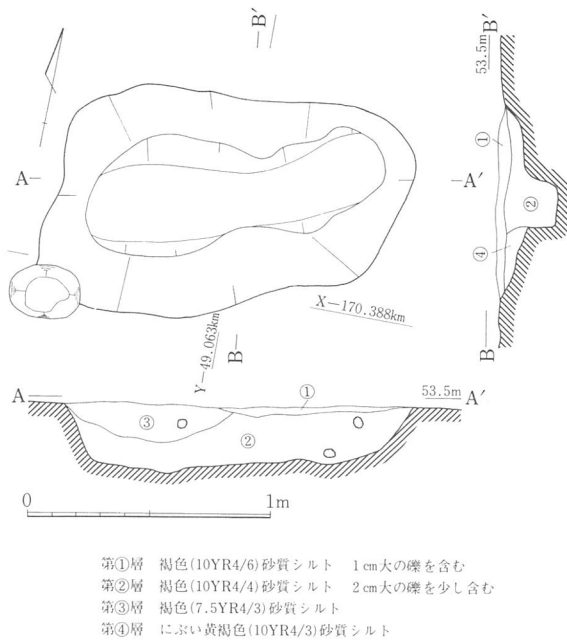
(380)には二枚貝で器面を削ったため条痕文が付くが、不徹底で凹凸が著しい。(381)は器面の摩耗が著しいため縄文は確認できないが、曲線的な沈線文が口唇部に連続している。

2521-〇〇 第68図 図版第20

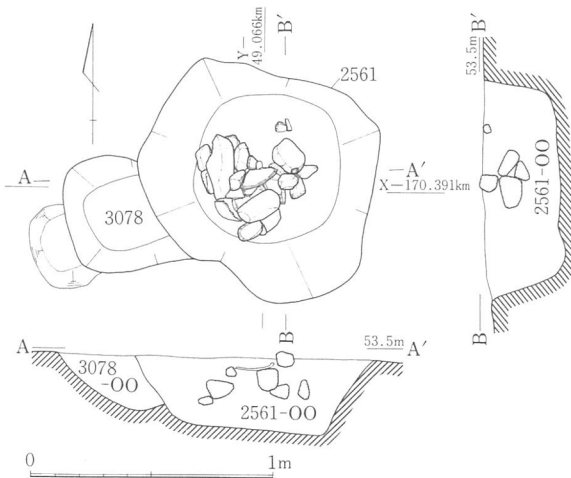
平面形は主軸を東西に置く不整長円形を呈し、南北約0.95m・東西約1.5mの規模を測る。底面の形は船底状であるが、南北断面では段を有した「U」字状をなし最深部の深さは0.25mを測る。

埋土は四層に分層できるが、埋土①層は上部にあった第2層(床土)の影響により鉄分が沈着した層である。

出土遺物 (376) 第76図 図版第102



第68図 2521-〇〇実測図



第69図 2561・3078-実測図

無肥厚に分類できる。(385)は無文の粗製土器であるが、(384)は縄文原体に無節1の撚り戻しを使った沈線区画縄文帯を持つ。そのモチーフは三角形状の文様の天地交互の配

縄文土器18片・剥片1片が出土しており、1点だけ図化した。

(376)は細片のため口縁部の形態や沈線区画縄文帯の分類は不明であるが、口唇部形態は肥厚1に分類できる。なお、口唇部・口縁部の縄文原体は無節1である。

2561-〇〇 第69図 図版第21

平面形は径約1.0mを測る不整円形を呈する。最深部の深さは約0.34mで底面径は鍋底状をなす。

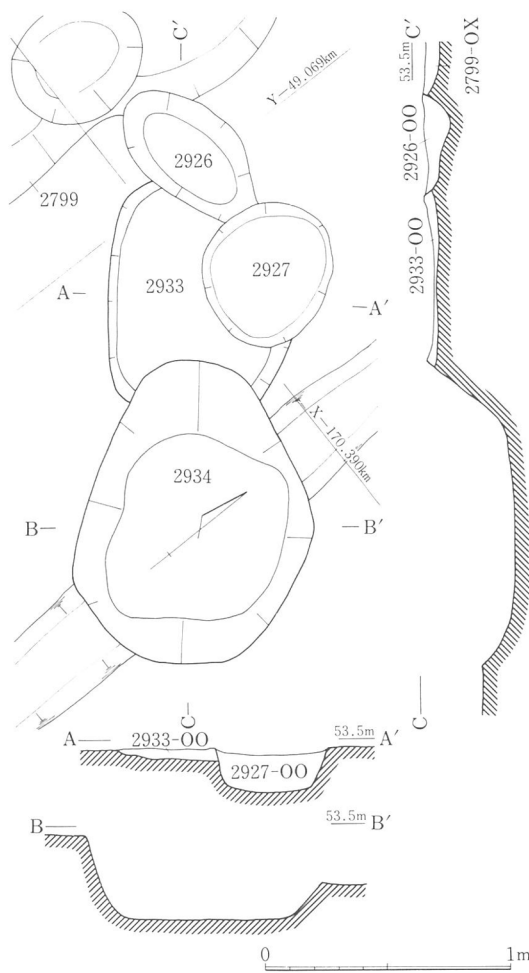
埋土は暗褐色(10Y R3/4)粗砂混じりシルトの単一層であるが、遺物や3~25cm大の砂岩の自然礫が上部に集中して出土した。

出土遺物(384・385) 第76図 図版第102

縄文土器151片・剥片1片が出土している。そのうち2点を図化した。

図化したものは、何れも器種は深鉢で口縁部の形態は平口縁2に分類できる。口唇部の形態は(384)が肥厚1、(385)は

置と考えられ、文様の孤立性からII類に分類できる。



第70図 2933・2934-〇〇実測図

ることから縄文時代の遺構であると判断した。

2934-〇〇 第70図 図版第22

平面形は東西に主軸を置く長円形を呈し、南北約0.95m・東西約1.24mの規模を測る。最深部での深さは約0.34mで底面形は鍋底状をなす。埋土は褐色（10Y R4/6）粗砂混じりシルトの単層である。

出土遺物

縄文土器30片・剝片2片が出土しているが、二枚貝による条痕文の認められる細片が2

3078-〇〇 第69図

東側を縄文時代の2561-〇〇に壊されており、正確な形状・規模とも不明であるが、平面形は東西に主軸を置く長円形をなすものと思われる。遺存する限りでは南北約0.5m・東西0.45m以上・最深部での深さ約0.22mを測る。埋土は単一層である。出土遺物は縄文土器4片があるだけで図化できるものもないが、2561-〇〇に先行する遺構なので縄文時代の遺構と判断できる。

2933-〇〇 第70図

西側を2926-〇〇、北側を2927-〇〇、東側を縄文時代の土壌2934-〇〇に夫々壊されているが、平面形は東西に主軸を置く長円形を呈するものと思われる。遺存する限りでは南北約0.75m・東西約0.95m以上の規模を測る。最深部の深さは約0.20mあり、埋土は褐色（10Y R4/6）粗砂混じりシルトの単層である。遺物はなにも出土していないが、2934-〇〇に先行する遺構であ

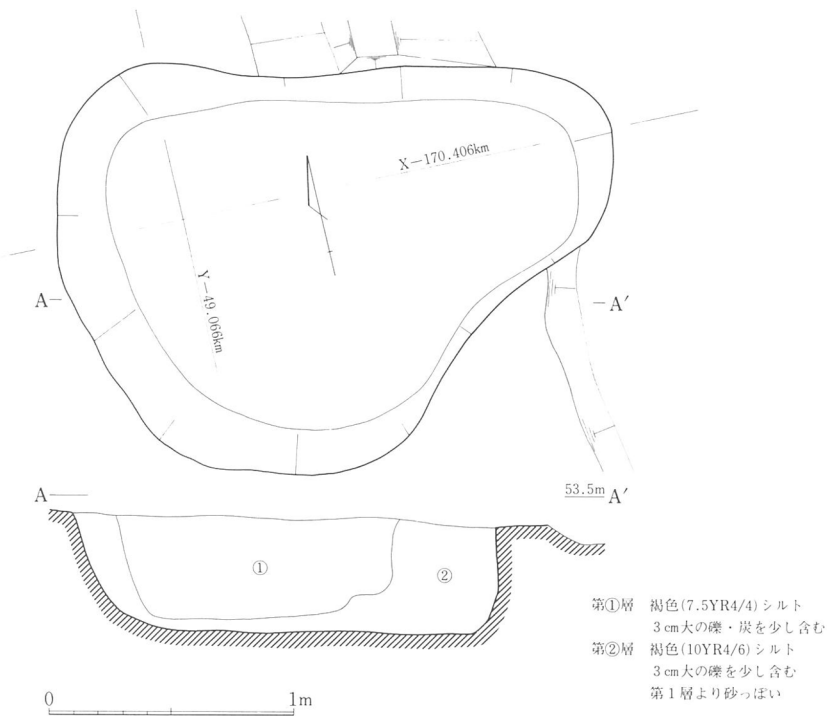
片あるだけで、図化できるものはなかった。

2851-〇〇 第71図 図版第23

東西2.32m・南北1.7mの規模を測り、平面形は不整長円形を呈する。最深部の深さは0.48mで、底面形は鍋底状をなす。埋土は二層に分層でき、埋土①層は「U」字状に堆積する。

出土遺物

埋土①層から縄文土器102片・剥片4片が出土している。いずれも極小破片のため図化しなかったが、沈線区画縄文帯の付く土器が複数確認できる。



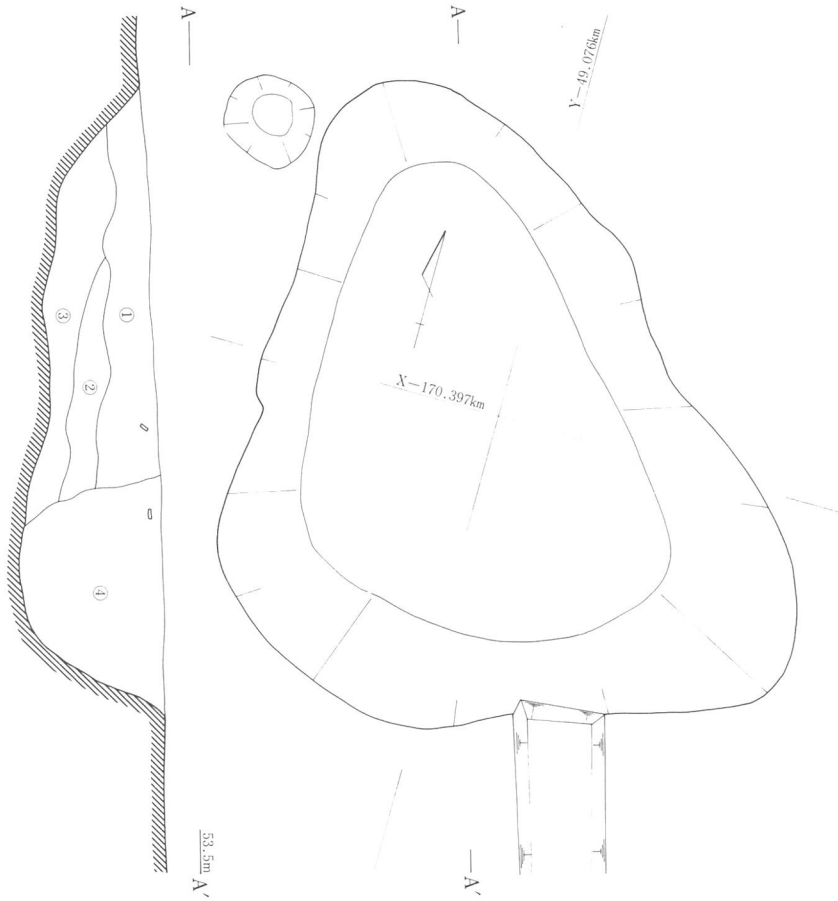
第71図 2851-〇〇実測図

3426-〇〇 第72図 図版第23

平面形はおむすび状をなし、規模は南北約2.5m・東西約1.9mを測る。最深部の深さは約0.51mで、底面形は船底状をなしている。埋土は四層に分層でき、埋土④層は「U」字状の堆積を示しているが、水平に堆積した他の埋土を上部から切るような状況であるし、ことさら遺物も集中していない。従って埋土④層は時期の新しい掘り込みの痕跡かもしれない。

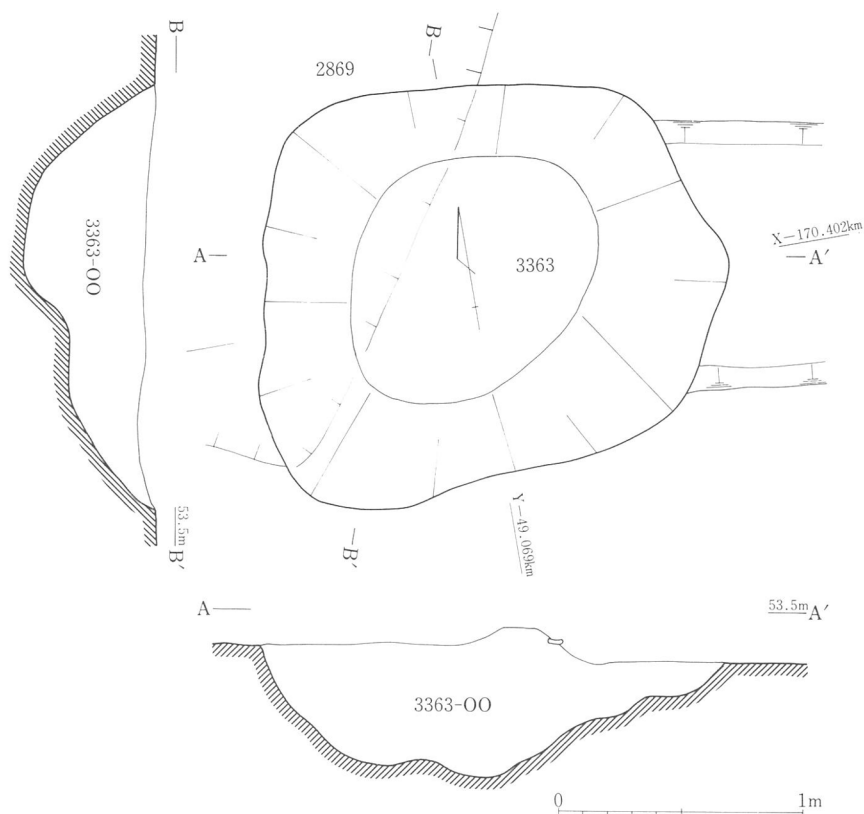
出土遺物 (383) 第76図 図版第102

縄文土器59片・剥片2片があり、そのうち1点を図化した。他に巻貝条痕文の付くものが1片、二枚貝条痕文の付くものが2片、沈線区画縄文帯の付くものが1片あるが、これらは何れも細片のため図化しなかった。(383)は口縁部形態は不明であるが、口唇部は無肥厚である。器面が摩耗しているため縄文は確認できないが、曲線的な沈線文と横位の隆体が付いている。



- 第①層 黄褐色(10YR5/6)粗砂混りシルト 炭粒少し含む やや粘性有
- 第②層 褐色(10YR4/6)粗砂シルト
- 第③層 褐色(7.5YR4/4)粗砂混シルト
- 第④層 褐色(7.5YR4/3)粗砂シルト 炭粒・5cm大の礫を少し含む やや粘性有

第72図 3426-〇〇実測図



第73図 3363-00実測図

3363-00 第73図 図版第24

西側の上部を7世紀の遺構2869-00に削平されているが、平面形は東西に主軸を置く不整長円形を呈し、南北約1.6m・東西約1.9mの規模を測る。最深部の深さは約0.5mで底面形は鍋底状をなす。埋土は暗褐色(10Y R3/4)粗砂混じりシルトの単一層である。

出土遺物(379) 第76図 図版第102

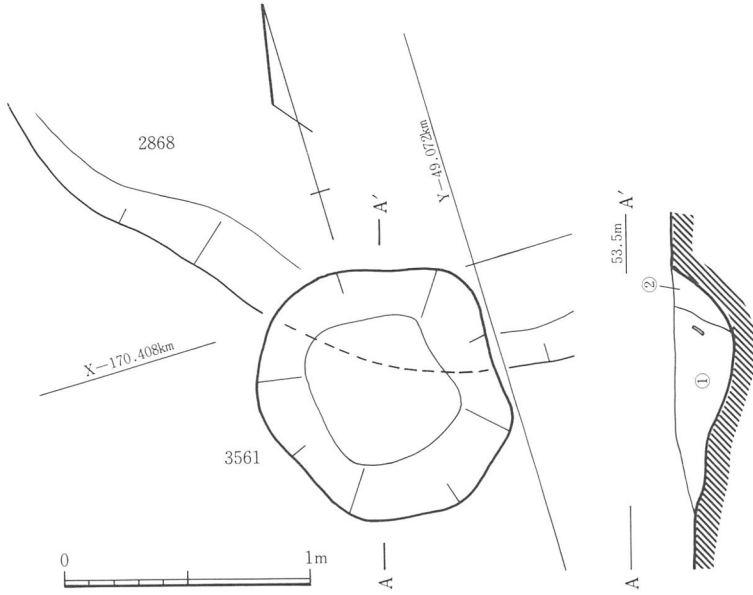
縄文土器35片・剥片1片が出土している。そのうち1点を図化した。他には巻貝条痕文の付く土器が3片ある。(379)は器種は壺と思われ、摩耗のため一部に縄文の認められない部分もあるが、研磨された無文帯と縄文帯が重層的な文様を構成しており、沈線区画縄文帯II類に分類できる。

3561-00 第74図 図版第25

上部を2868-00に壊されているが、平面形が円形に近い小規模な土坑である。直径約0.9~1.1m・深さ約0.25mを測り、底面の形状は鍋底状をなす。埋土は二層に分層でき、

第2節 縄文時代の遺構・遺物

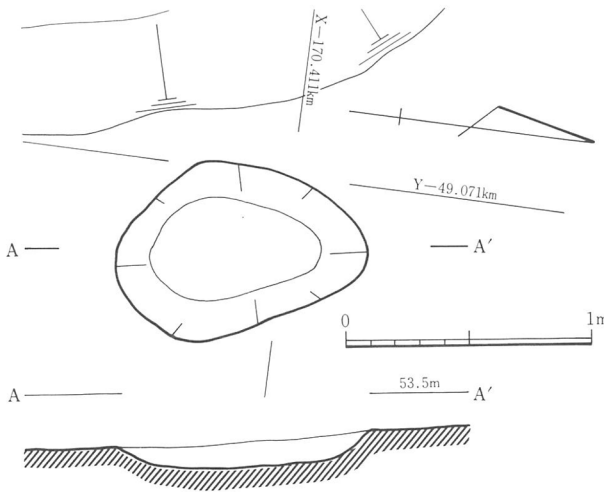
埋土①層から縄文土器10片が出土している。沈線文が付いたものが2片、単節Rの縄文が付いたものが1片あるが、何れも細片で図化できない。



第①層 黄褐色(10YR5/6)第②層より粘りのないシルト
第②層 暗褐色(10YR3/4)粘性の強いシルト 小・中礫を多く含む

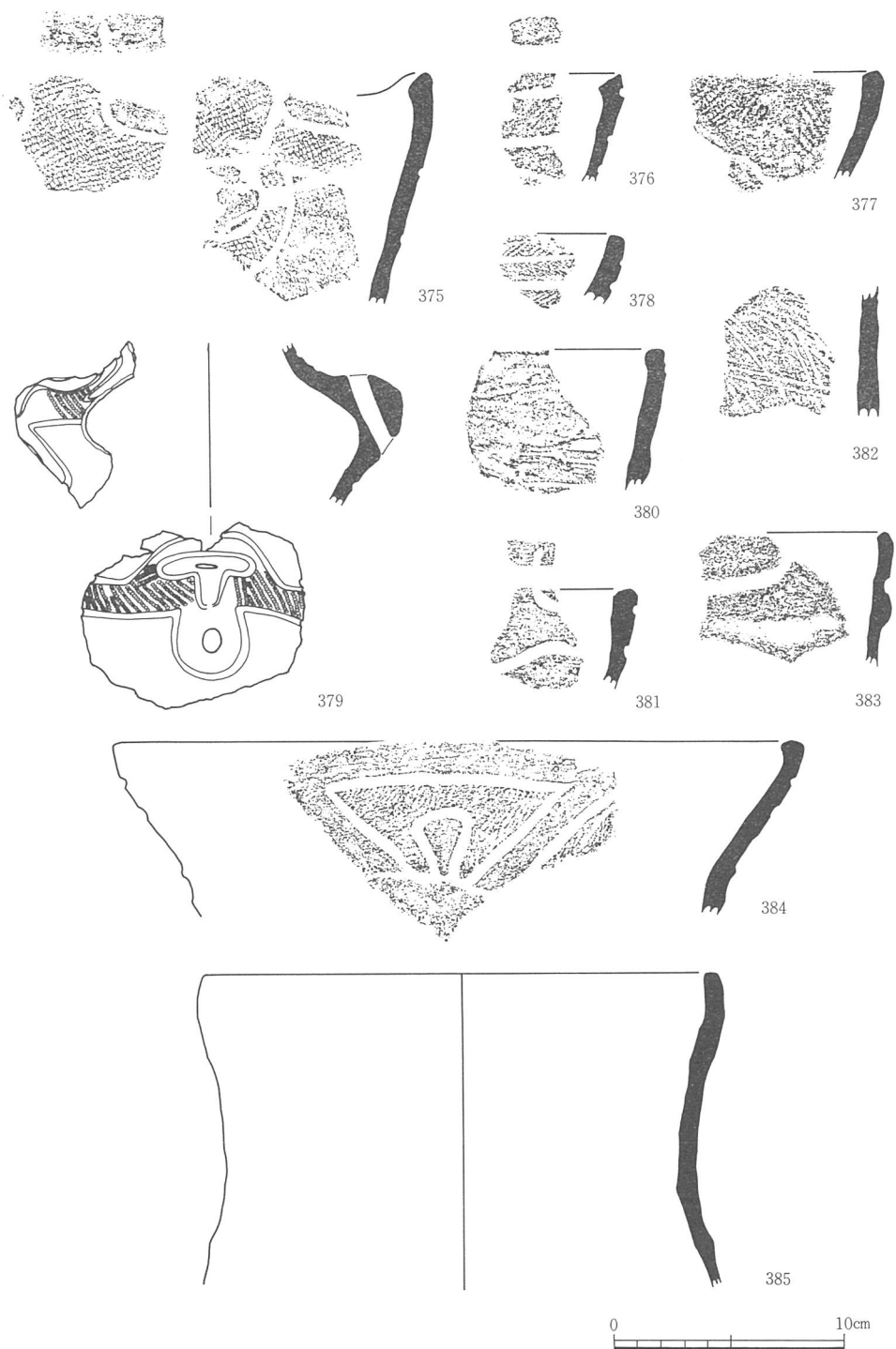
第74図 3561-〇〇実測図

3552-〇〇 第75図 図版第25



第75図 3552-〇〇実測図

平面形は長円形を呈し、長軸を南北におく。規模は南北約1.0m・東西約0.75m・深さ0.1mを測る。埋土は単一層で、粗砂・小礫の混入した黒褐色(10YR2/3)シルトである。埋土中から縄文土器10片が出土しており、沈線文の付いたものが1片あるが、何れも細片で図化できない。



第76図 その他の土壌出土遺物

第3項 小結 第35・77図

以上、縄文時代のものと考えられる遺構と遺物について記述をしてきた。ここでは、上述の内容を取りまとめ、遺構群の性格と時期について検討すると共に、遺物についての若干のデータ整理をおこなう。

A. 遺構群の特徴

1. 検出された遺構は、ピット状をなすものもあるが大多数は土壌状の遺構である。
2. 遺構は段丘崖近くの小範囲に集中しており、幅10mあまりの帯状に分布が認められる。
3. 遺構の中にはヒト・獣の骨片が検出されたものがある。
4. 埋土の状況から判断すると、埋没後に再度の掘削がおこなわれた形跡のある遺構が少なからずある。
5. 出土遺物には少数の剥片・二次加工のある剥片はあるが石器はなく、土器片が主体である。
6. 土器は完形品もしくは完形品であったと思われるものは少数で、殆どは小破片である。しかしながら、完形品であったと思われるものには、底部穿孔の認められるものや、赤色顔料の塗布された特殊な器形のものがある。

1・3及び6の特殊な土器の検出は、遺構が土壌墓であることを示唆する積極的要素であろう。完形品の土器が少ないのは、土器の供献があまりおこなわれなかったことを示すに過ぎない。そう考えれば、4の再掘削の形跡は再葬行為がおこなわれた可能性を示すものと評価できる。縄文時代の墓壙群には求心的な分布を示す例が^{註11)}間々みられ、2の帯状分布もその類型の一つである可能性があろう。また、土壌の規模と個々の位置関係に注目すれば、3～6基の土壌が小群をなし、調査地外の一点を中心に放射状に配置されているように見ることも可能である。調査地西側の部分の調査結果を得なければならぬが、こうした土壌の配置状況も土壌群が墓坑である公算を大きくするものといえる。

以上のように、検出された遺構群を土壌墓群とすれば、2510-00から多量に検出されたエゴノキ属の花粉は、死者にその花が手向けられた可能性を示すものと言える。仮にそうではなくて、エゴノキ属の花粉が埋葬時の混入だとしても、この花粉から我々は彼もしくは彼女が初夏に葬られたことを知ることができるのである。

ソバの花粉については、分析したほとんどの土壌から微量が検出されている点と、ソバの栽培が縄文時代後期以前に遡る例が今のところ確認されていない^{註12)}ことからすれば、第V

章の結論の如く、ソバ花粉は後世の混入の公算が大であろう。しかしながら、近年の発掘調査でヒョウタン・エゴマのような、縄文時代前期まで遡る外来栽培植物の例が増加していることからすると、ソバ栽培のより古い例が今後見つからないとは限らない。その例証のためには調査当初からの目的意識的な資料採集が必要なことは言うまでもない。今回の花粉分析に際しての資料採集は、極めて不十分であったと言わざるをえない。

B. 遺構の時期

土壌から出土した縄文土器の年代観について検討するが、その大部分は小破片資料で個々の資料の持つ情報量は限られている。また、近畿地方の縄文土器の編年体系自体未だ不明な点が少なくなく、出土した縄文土器の個々について類例を検索し時期比定をおこなうにも限界がある。ひとまず土器の持つ諸属性の分析に立ち返る必要がある。そのことを念頭にして本書では土器の分類をおこない記述してきた。最初に土器の出土状況と分類結果の関係を調べ、その後で時期的な検討に進みたい。

先にみたように検出された遺構を土壌墓とすれば、供献されたとおぼしき完形土器は埋葬もしくは再葬の時期を示すものと見做すことができよう。埋葬と再葬の間には土器型式の変化を伴う程の時期差は想定できないので、いずれにせよ供献土器は土壌の年代を示すものと考えて良い。そして、供献土器に伴う小破片土器は、その多くが埋土上層に集中する傾向が認められたので、再葬時の儀礼に用いられたか、周辺に散布していた遺物が混入したか、あるいはその両方の原因による。土器片と同時に少数とはいえ剥片が出土しているので、後二者の蓋然性のほうが高いのであろうが、何れにせよ小破片の土器は供献土器と、同時期か供献以前の土器ということになる。

さて、供献土器とその他の土器を出土した土壌は2525・2510・3310-00の3基である。2510・2525-00の供献土器はともに波状口縁1で、前者は無文で後者はII類の土器である。3310-00の供献土器は口縁部を欠いているが、文様はII類の土器である。次にこれらの供献土器と同時期もしくは古いはずの伴出土器について見ることにする。

2525-00の伴出土器には波状口縁2 a・平口縁1の形態があり、文様にはI・II類、条痕文、沈線文、垂下縄文と思われるものがある。2510-00の伴出土器には波状口縁2 a・2 bと平口縁1・2の形態があり、文様はI・II類、沈線文、条痕文、条線文B種、垂下縄文などがある。3310-00の伴出土器には波状口縁1・2 b、平口縁1・2の形態があり、文様はI・II類、沈線文、刺突文、垂下縄文、条痕文がある。

やや煩雑になったが、本書の分類に従う限りでは、波状口縁1の土器と波状口縁2 a・

2 b 及び平口縁 1・2 の土器は、同時期もしくは後者が古いという仮説が成立する。そして土器の文様類型はⅡ類に対して、Ⅰ類及びそれ以外の多くが同時期もしくは古いという仮説が成立する。

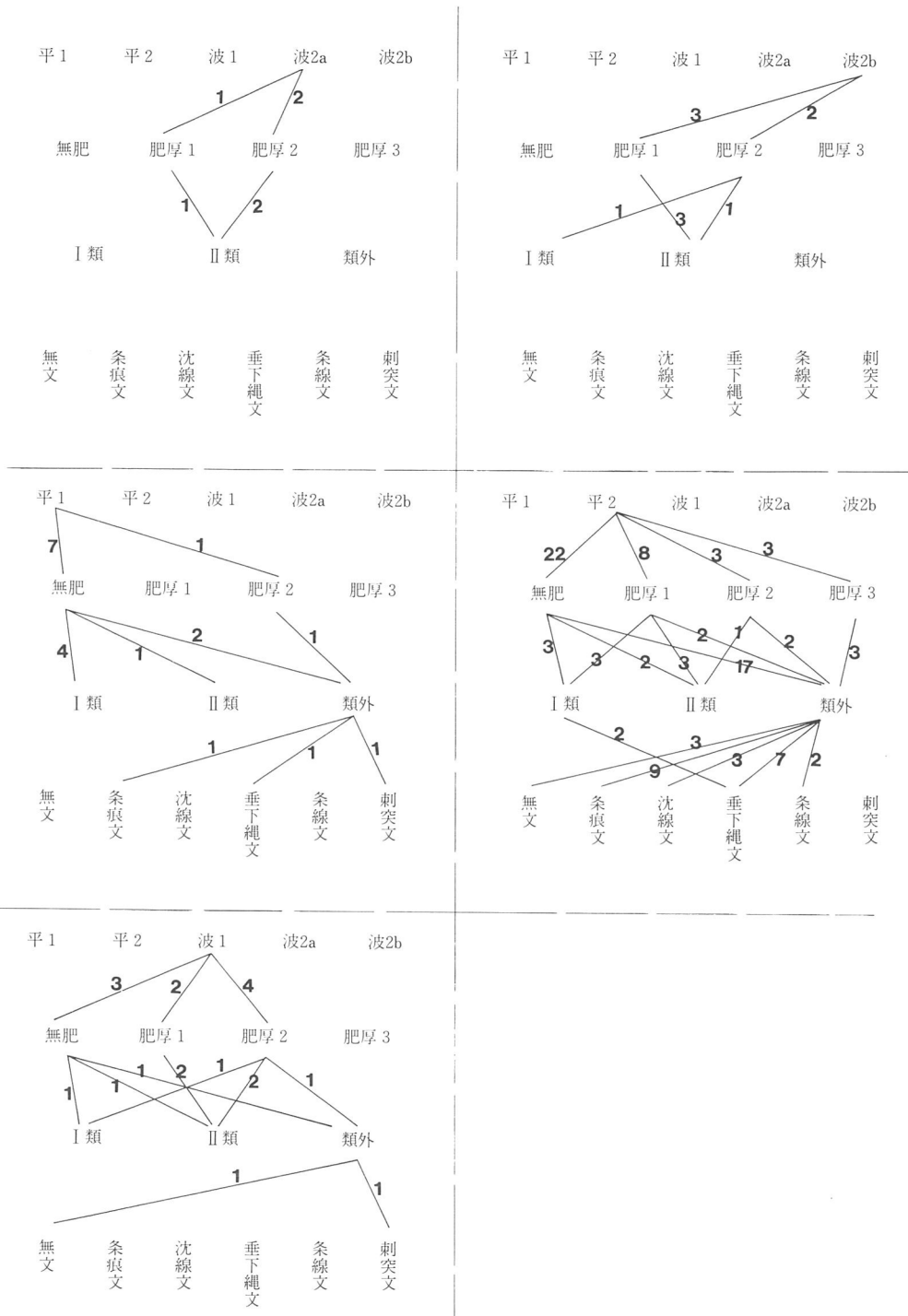
次に分類可能な土壌出土遺物総体について、分類項目相互の有機的關係を調べ、既知の編年観との関わりを検討する。

第77図に各分類項目の相互關係を示した。項目を結ぶ線は、例えば平口縁 1 の口縁部形態をもつ A という土器がどのような文様類型をもつかを示したものである。線上に示した数字は資料数を表す。この数字は実際には個体数に近いものと考えて良いが、これには各項目の一つでも不明のものは省いている。その結果、小破片では判別がつかないⅠ・Ⅱ類の資料数が、識別容易なⅠ・Ⅱ類以外の資料より少なくなっている。また、Ⅰ類に分類されながら類外の垂下縄文に結ばれているものは、垂下縄文 C 種の土器で第77図では変則的存在である。

さて、分類の基礎をなすのは口縁部の形態である。口縁部形態で平口縁 1・波状口縁 1 としたものは共に中期末的な形態といえることができる。また、口唇部に波頂部を区分する沈線を加えた波状口縁 2 a は、波状口縁 1 の変化形態と見ることができ、中期末的な形態の残存と見ることが出来る。これら中期末的な口縁部形態と文様の類型の關係を見てみると次のことが判明する。

平口縁 1 はⅠ・Ⅱ類及びそれ以外の大部分の文様と關係がある。波状口縁 1 はⅠ・Ⅱ類とそれ以外の少数の文様と關係がある。波状口縁 2 a はⅡ類の土器に限られる。Ⅰ・Ⅱ類以外の文様については一概にはいえないが、中期末的な口縁部形態の土器はⅠ・Ⅱ類の文様と強い關係があるといえる。区画沈線内に縄文を充填したⅠ・Ⅱ類のうち、Ⅱ類は中津式平行期のモチーフといえることができるが、Ⅰ類の定義の一つである孤立的モチーフは、その限りでは後期前半の土器にも見られる。しかしながら、口縁部形態との関わりから、Ⅰ類もまた中期末的な様相のある土器のモチーフを構成すると結論される。従って、Ⅰ・Ⅱ類の文様を持つ土器は、中津式平行期以前のものを見做すことができ、Ⅰ・Ⅱ類の判別困難な類似文様の土器もそうである蓋然性が高いであろう。

類型外とした文様類形のうちで編年の位置の明らかなものとしては垂下縄文 A 種の土器が挙げられる。垂下縄文 A 種の土器で口縁部が平口縁 1 のものは泉分類Ⅰ C 種に、平口縁 2 のものはⅡ C 種に夫々相当する。垂下縄文 B・C 種はその変形の公算が強く、同時期に近い時期のものであろう。北白川上層式に顕著な条線文 B 種の土器も、2525-00 の出土



第77図 分類項目の関係

事例を見る限りでは、中津式平行期にも存在すると考えるべきであろう。刺突文・条痕文も中期末的な口縁部との関係が確かめられる。類型外とした文様を持つ土器の殆どが平口縁の土器であることは、土器の形態と文様の関係の傾向と判断される。その顕著な顕われが波状口縁2 a・2 bがI・II類以外の文様を持たないことである。

以上の中期末的な口縁部と文様類型の関係から、平口縁2・波状口縁2 bの形態もまた同時期の土器の公算が大きいことが導きだされる。

同様のことは口唇部に付けられた縄文からも証明される。後期前半の土器には口唇部に縄文が付けられることは稀であるが、遺構から出土した縄文土器口縁部105片のうち、40片の口唇部に縄文が付けられており、口唇部の縄文は設定した文様類型の全てと関係する。また、口唇部の刻み目がすべて直刻なものも、対象資料全てが福田K I以前の後期前葉であることを示している。

このように分類対象とした土器には、分類項目全ての相互関係が成立し、この関係と先の仮説とは、分類されたすべての土器が同時期の場合に整合性をもつ。そして、これらの土器群には、中期末的な様相の強いもの及び後期前葉の中津式平行期のものが顕著な存在であることからみて、その時期は中期末～後期前葉と見做すことができよう。

供献土器を持たない多くの土壌出土遺物も上述の分類項目の組み合わせから成っている。分類項目に該当しない土器についても、その多くはI・II類の判別が不能な土器に過ぎず問題はないが、2860-00出土の(344)は北白川上層式の可能性があり問題が残る。しかしながら、(344)が北白川上層式の土器だとしても、他に確実に同時期に比定される土器がないことからみると、なんらかの事情で混入した疑いが強いものと考えられる。

従って、今までの検討の結果、検出された土壌の時期は、大枠では中期末～後期前葉に限定されることになろう。ただし、明瞭なI類の土器が出土していない2506-00などに他との時期差を認める余地は残る。

C. 縄文原体の種類

第2表に、土壌から出土した土器のうち、縄文原体の種類が判明した資料数を示した。()は各行の合計資料に占める%である。この表では口唇部と口縁・体部の原体が異なる場合は口唇部の原体は除いている。また、資料数は破片数なので、傾向の差異を問題にする場合は、完形に近い土器を出土した遺構については、そのことを勘案する必要がある。2525-00からは完形に近い深鉢が出土しており、その個体には単節Rの破片が28片あるので他の遺構出土資料と比較するには、その数を20程度は減じて考える必要がある。ほ

第2表 縄文原体の種類 ()内は%

遺構名	単節R	単節L	無節r	無節l	複節R	計
2506	9 (26)	26(74)				35
2503	5 (50)	5 (50)				10
2525	67(61)	42(38)		1 (1)		110
2510	58(52)	50(45)		1 (1)	2(2)	111
3569	9 (56)	7 (44)				16
2000	9 (23)	27(69)		3 (8)		39
3310	32(29)	73(66)		5 (5)		110
2860	14(22)	46(71)	1 (1)	3 (4)		64
3599	7 (64)	4 (36)				11
2522	1 (10)	9 (90)				10
2521		1 (50)	1 (50)			2
2520		2 (100)				2
2519		1 (100)				1
2561	2 (16)	5 (42)		5 (42)		12
3363	1 (100)					1
3426	1 (33)	2 (67)				3
計	215(40)	300(55.8)	2(0.4)	18(3.4)	2(0.4)	537

かにはそのような操作が必要なものはない。

そうすると資料数が30以上ある遺構については、単節のR・Lがほぼ同数か単節Lが多い傾向にあるといえる。全資料における単節R・Lの比率も僅かに単節Lが上回る程度で、各遺構毎の比率と近似している。

仮に遺構の時期の違いが縄文原体の種類の組成の違いに反映しているとすれば、ここで検出された遺構は近接した時期にあるものといえよう。無節原体については、絶対数が少ないためl・rの組成は問題にしようがない。しかしながら無節原体の資料が3片以上ある2000・3310・2860・2561-〇〇は、他の遺構に比べて無節原体の資料が多いといえる。

土器の胎土・色調

第3表に土壌から出土した土器のうち、胎土の識別可能な土器片とその色調の関係を示した。()は各行の計に対する百分比である。胎土は包含されている特徴的な鉱物の組成の違いで分類した。その他とあるのは角閃石や金雲母を含まず、石英・長石・チャートなどだけが包含されているものである。色調は近似色を5群にまとめて分類した。色調の5群と標準土色帳の色名との関係は次のとおりである。

1群. 2 YR-7/5・7/8・6/5・5/6、2群. 5 YR-7/8・6/4・6/6、7.5 YR-8/2~8/6・7/2~7/6・6/4・6/6、3群. 5 YR 5/4、7.5-Y R 6/3・5/1~5/6・4/2・4/6、4群. 2.5 YR-8/4、10 Y R-8/3・8/4・7/1~7/4・6/3~6/6、5群. 2.5 Y R-5/1・5/2・4/1、10 Y R-6/2・5/2~5/6・4/1~4/4・3/1

第3表 縄文土器の胎土・色調 ()内は%

色調\胎土	角閃石	金雲母	角閃石・金雲母	その他だけ	計
1群	0(0)	9(52.9)	0(0)	8(47.1)	17
2群	5(1.9)	63(31.3)	1(0.4)	201(74.4)	270
3群	2(1.3)	33(21.2)	3(1.9)	118(75.6)	156
4群	4(1.0)	78(21.3)	3(0.8)	281(76.8)	366
5群	2(0.8)	57(22.7)	5(2.0)	187(74.5)	251
計	13(1.2)	240(22.6)	12(1.1)	795(75.0)	1060

まず、土器の色調と胎土の関係を検討する。資料数が100以上ある2～4群を構成している土器の胎土の組成比率はほぼ近似したもので、全資料の組成比率とも似通っている。つまり、識別したかぎりでは土器の色調と胎土の違いには相関関係は認められないことになる。

次に胎土の違いを問題にする。

土器に含まれている鉱物のうち、角閃石・金雲母は花崗岩を出自とする鉱物で、和泉地方産の土器には一般的には含まれておらず、河内地方産の土器に顕著に認められる。従って、これらの鉱物が顕著に認められる総量の凡そ25%を占める土器は、河内地方からの搬入品の公算が強いといえる。なお、これら搬入品の可能性の強い土器の遺構別出土数を検討してみたが、特別な傾向が認められる遺構はなかった。

第3節 弥生時代の遺構・遺物

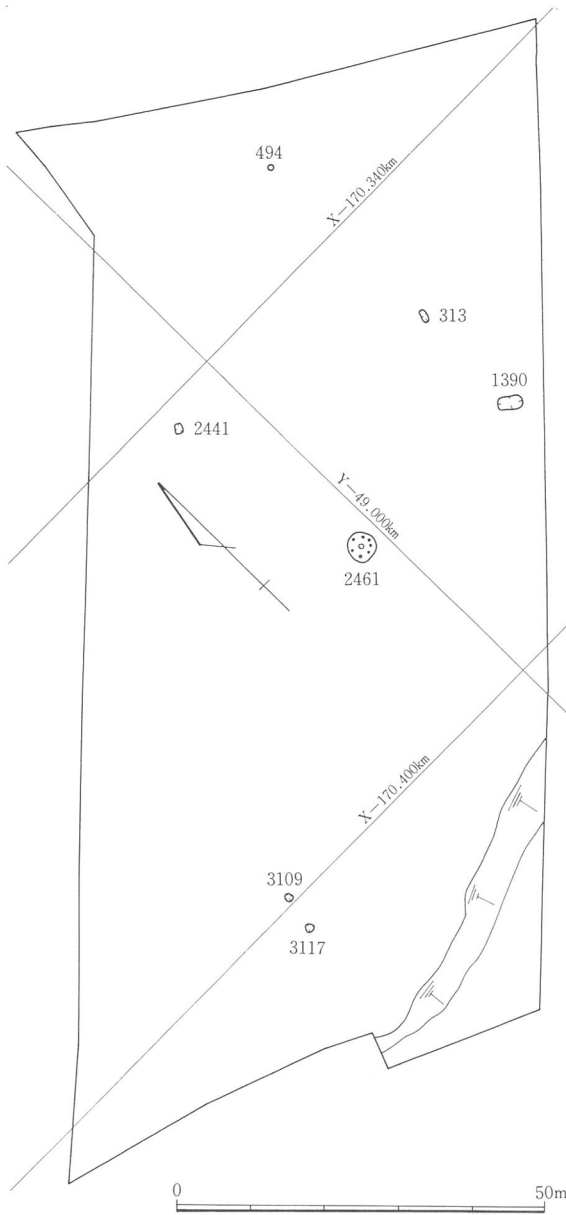
第1項 概況 第78図

弥生時代に関する遺構・遺物は調査地域の中央部及び南部を中心に検出されたが、その数はほかの時代に比べて少なく、遺構も一部の土器棺墓を除いて、後世の遺構の切り合いや水田耕作などの攪乱を受けていた。また、弥生時代以後の遺物包含層から畿内第Ⅲ様式～第Ⅳ様式に属する壺・甕・高杯・水差し・鉢などの口縁部や体部の破片が出土したが、その多くは細片であり、今回図示できたものは3点のみである。以下に主な遺構・遺物について順を追って記述する。

第2項 各遺構と遺物

2461-O D 第79図 図版第26

F20地区東南部に位置する直径約5mの円形堅穴住居跡で、検出面は標高53.45mを測る第7層の上面である。



第78図 弥生時代の遺構配置図

最大は1.4mである。なお、周壁溝を切る2730-O Pは2744-O Pの添え柱の可能性もあるが、その位置は主柱穴の外側にあり、2744-O Pとの距離もわずか10cmしかないため、住居跡に伴う柱穴でないかもしれない。

住居跡の床面のほぼ中央に位置する2728-O Oは、炉跡とみられる土壌で、平面プラン

住居西南部の壁、及び周壁溝は、2460-O Sや後世の掘り込みで削平されていたが、床面は比較的良く残っていた。検出面から床面までの深さは25cm前後あり、その中央には土壌状の炉跡(2728-O O)が認められた。住居跡内の埋土は黄橙色シルトブロックを含む黄灰色シルト、褐色粘質シルト、灰を少量含む黄褐色シルトなどであり、これらは住居跡周辺の土壌に酷似しているため平面プランの検出時には困難を伴った。

周壁溝は幅約20cm、深さ6cm前後あり、幅の割には浅い。溝内には暗褐色シルトブロックを含む褐色シルトが堆積していた。

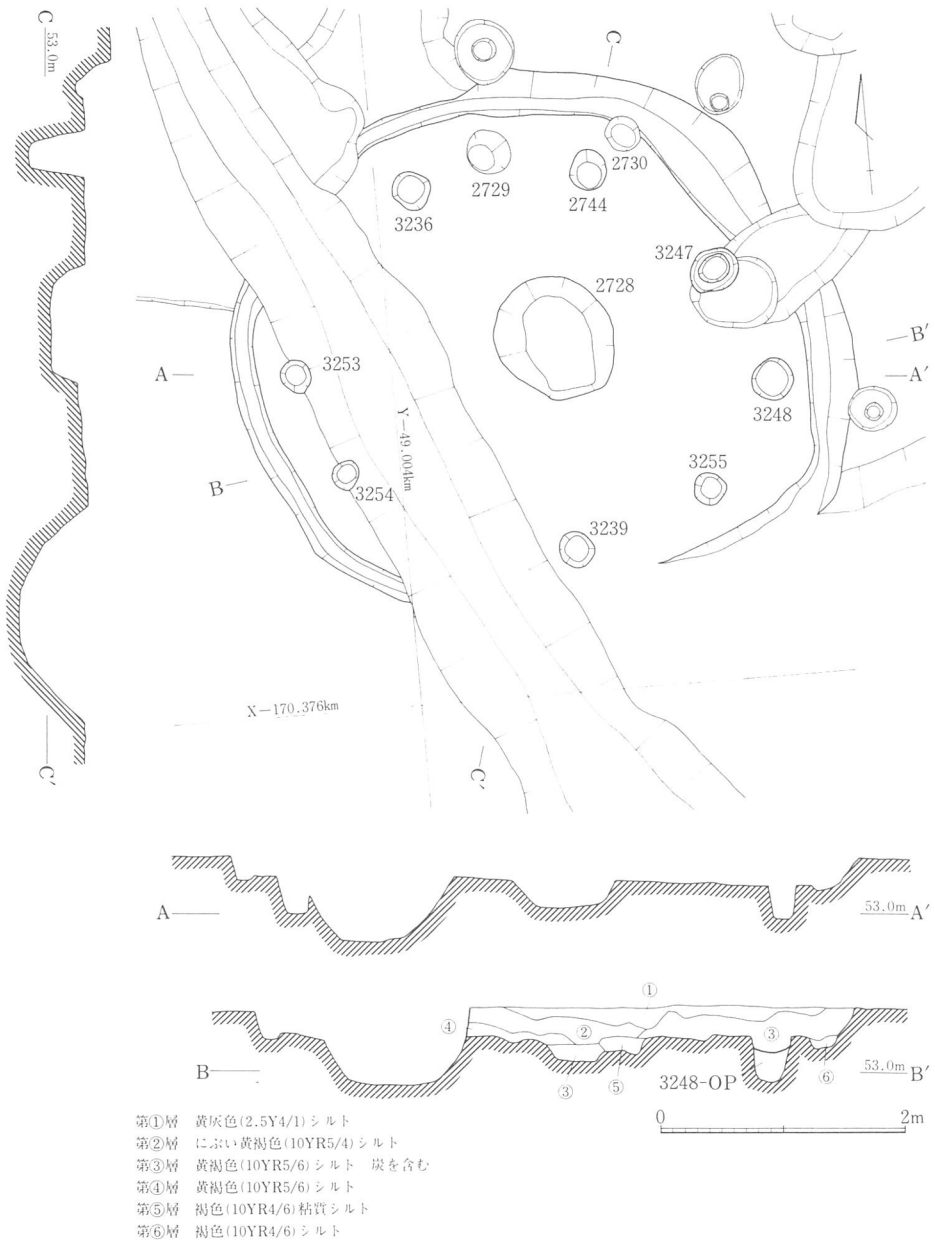
床面はほぼ平坦に整えられており、一部では黄褐色シルトを用いた整地がみられたが、床面の全体におよぶような貼床は認められなかった。

柱穴は床面の周縁部から10箇所確認された。各柱穴の掘形の規模は直径30cm前後で、深さ25~35cmを測る。柱痕跡は3247-O P(直径約20cm)以外は明らかにできなかった。柱の間隔は平均1mあり、最少は70cm、

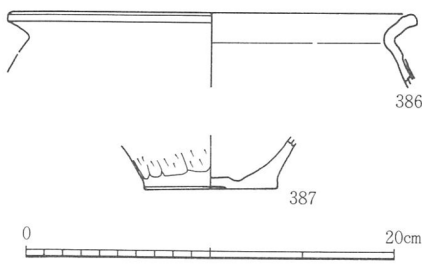
第3節 弥生時代の遺構・遺物

はややいびつながら直径約1mの円形を呈し、深さは20cm前後を測る。埋土は灰を含む黄褐色シルトである。

本住居跡に伴う遺物は、住居北部の床面直上から出土した甕2個体分の細片のみである。



第79図 2461-OD実測図



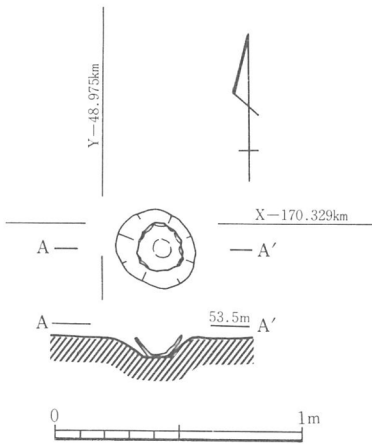
第80図 2461-O D出土遺物

色調は黄褐色を呈し、焼成はややあまく、胎土中に石英・長石・チャート・赤色酸化鉄粒を含む。口縁部の形態や外面のヘラケズリから、畿内第IV様式に属するものと思われる。

出土遺物 (386・387・1003) 第80図

図版第103

保存状況が悪く、全体を復原することはできなかった。口縁部径22.2cm、底部径7.3cmを測る。口縁部は頸部から「く」の字状に外反しており、端部を面取り気味におさめている。底部は、何れも外面の中央が若干凹んでおり、外面を縦方向にヘラケズリ調整する。



第81図 494-O P 実測図

は標高53.8mを測る地山面である。平面プランは隅丸長方形を呈し、長辺2.2m以上、短辺1.1m以上、深さ約0.15mを測る。埋土は暗灰黄色(2.5Y R4/2)小礫・粗砂混じりシルトの単一層で、畿内第IV様式とみられる水差しの把手(図版第104-1002)をはじめ、弥生土器の細片が出土した。

494-O P 第81図

G16地区の北西部に位置するピット状の遺構で、検出面は標高約53.4mを測る第7層の上面である。平面プランは約30cmの円形で、深さは10cm前後を測る。遺構の埋土は灰黄褐色(10Y R5/2)で、内底面上から畿内第IV様式とみられる壺の底部が出土した。

出土した土器は風化が著しく、復原・図化が困難であった。

1390-O O 付図

3109-O O 第82図 図版第27

F20地区の南部に位置する直径53cm、深さ約15cmのピット状の遺構で、検出面は標高53.42mを測る地山面である。遺構の上部は、後世の耕作によって攪乱されており、残りは良くない。遺構の断面形状は、逆台形状を呈し、中央部より、底面から6cmほど浮いた状態で、壺の体部片が出土した。埋土は3~5cm大の円礫を多く含むにぶい黄褐色砂礫混じりシル

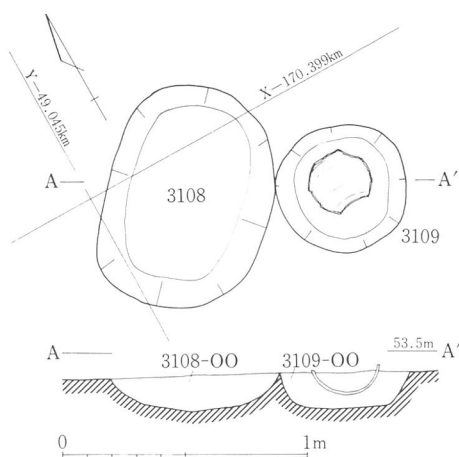
G16地区のほぼ中央部に位置する土壌で、検出面

は標高53.8mを測る地山面である。平面プランは隅丸長方形を呈し、長辺2.2m以上、短

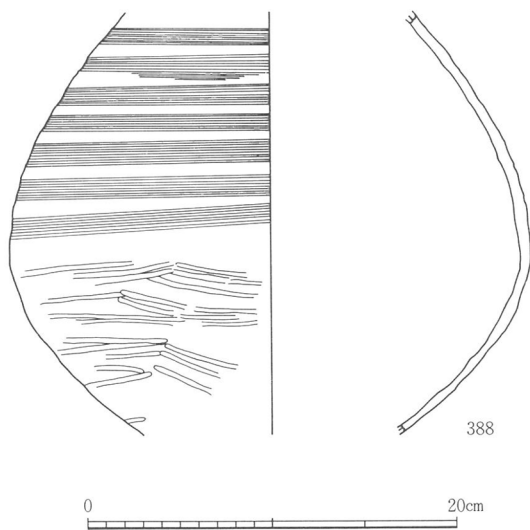
辺1.1m以上、深さ約0.15mを測る。埋土は暗灰黄色(2.5Y R4/2)小礫・粗砂混じりシ

ルトの単一層で、畿内第IV様式とみられる水差しの把手(図版第104-1002)をはじめ、

第3節 弥生時代の遺構・遺物



第82図 3109-〇〇実測図



第83図 3109-〇〇出土遺物

トで、わずかな炭片がみられた。本遺構は、土器棺墓（3117-〇〇）の北側に位置することから土器棺墓の可能性も考えられるが、今一つ確証はない。

出土遺物（388） 第83図 図版第103

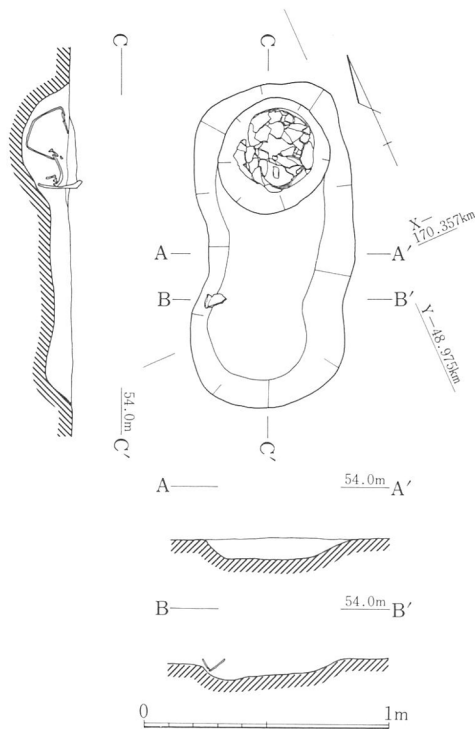
中央部の幅28.4cmを測る体部片で、中程から上半にかけて、櫛描き直線文を7段巡らせており、各文様帯間にも、横方向のヘラミガキを一種の文様として描いている。体部下半の器面調整は外面が、横および左上がりのていねいな断続的なヘラミガキで、内面は剝離しておりわからない。色調はに

ぶい赤褐色を呈し、焼成は良い。胎土中に石英・長石・雲母粒のほか、多量の角閃石を含んでおり、河内地域（生駒西麓産）からの搬入土器と思われる。体部が球形で、頸部が長い畿内第II様式に属する広口壺の一部であろう。

313-〇〇 第84図 図版第28

G16地区の西部に位置する土器棺墓で、検出面は標高53.8mを測る第7層面である。遺構の上部は後世の耕作の攪乱を受けており、土器棺の蓋の一部は遊離していたが、棺身自

体は、ほぼ現状をとどめていた。墓壇の平面形は隅丸長方形を呈しており、短辺約60cm、長辺1.3mで、深さは検出面から20cm前後を測る。墓壇内の北端部が直径約45cm、深さ20cmほど掘り込まれており、この中に土器棺が設置されていた。土器棺の周囲及び墓壇内の埋土は、地山のブロックを多量に含む灰黄褐色シルトである。土器棺の棺身は広口壺を転用しており、棺の蓋には口頸部を打ち欠いた甕の体部を用いていた。棺身・蓋ともに、穿



第84図 313-〇〇実測図

はやや不明瞭で、体部の上半から頸部の上半にかけて、5段の粗い櫛描き簾状文を逆時計回りに施している。体部の器面調整は、外面が縦及び横方向の粗いヘラミガキで、内面は粗い縦方向の断続的なハケである。口頸部の内面の調整はヨコナデを基調とするが、頸部の下半から体部にかけては、ユビオサエがみられる。底部はほぼ平坦にナデ整えられており、厚みは全体に薄い。体部の下半には黒斑及びビスの付着が認められる。色調は橙色を呈し、焼成はあまく、胎土中に石英・長石・チャート・赤色酸化鉄粒を多く含んでいる。

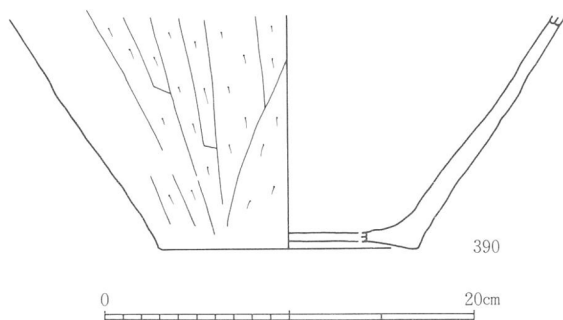
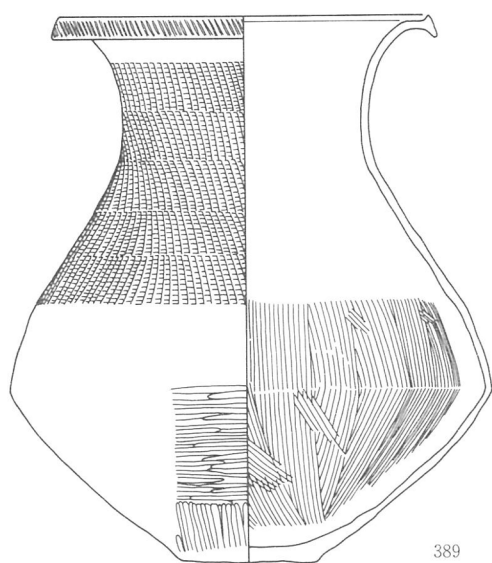
体部の形態や櫛描き簾状文の施文状況及び胎土などからみて、畿内第IV様式に属する在産の土器と思われる。

甕 (390) 体部下半から底部にかけての破片で、底部径14cm、残存器高13cmを測る。底部は浅い上げ底状を呈し、その厚みは、体部より薄い。体部の器面調整は、外面が縦方向の粗いヘラケズリで、内面はハケを施した後、ナデ整えている。色調は明褐灰色から黄橙色を呈し、焼成は良く、胎土は少量の雲母粒を含む以外は、(389)と変わらない。畿内第IV様式に属する在産の甕の底部であろう。

孔はみられない。土器棺内には、粘質を帯びたシルトが堆積していたが、遺骸や副葬品は認められなかった。棺身の大きさからみて、小児の埋葬が推定される。なお、本遺構の墓壇は二重であり、土器棺の南側にも広い空間があることから、別の埋葬も考えられたが、調査の過程では明らかにできなかった。

出土遺物 (389・390) 第85図 図版第103

広口壺 (389) 口径21.4cm、器高29.6cmを測る。口縁部は緩やかに外上方に伸びる頸部から水平に外反した後、端部を上下に拡張しており、その外端面には、櫛状施文具による細かい刻み目が巡る。最大径は体部の中程にあり、その形態は算盤玉状を呈する。頸部と体部の境



第85図 313-〇〇出土遺物

砂混じりシルトが堆積していたが、遺骸や副葬品はみられなかった。棺身の大きさからみて、小児を埋葬した土器棺墓と思われる。

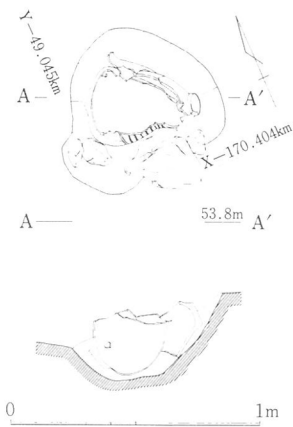
出土遺物 (391・392) 第87図 図版第103

広口壺 (391) 口径17.7cm、器高43.5cmを測り、口縁部はわずかに内傾しながら直立する頸部から水平に開く。口縁端部は若干面取られており、内外面ともに、ていねいなヨコナデ調整を加えている。最大径は扁球形状を呈する体部の下方にあり、体部と頸部の境界は不明瞭である。頸部の上半から体部の中程にかけて、13帯の櫛描き直線文を時計回りに施した後、この間に12個の扇形文を6方向に交互に施している。体部文様帯の下部は、

3117-〇〇 第86図 図版第27

F25地区の北部に位置する土器棺墓で、検出面は標高53.32m～53.50mを測る第7層面である。

遺構の中央部は後世の攪乱を受けていたが、土器棺自体は比較的良く残っていた。墓壙は径約55cmで、やや不整形な楕円形を呈し、深さは20～30cmを測る。墓壙の断面形は偏球形状を呈し、その中央部に土器棺がやや斜めに設置されていた。土器棺の南側は4個の角礫で支えられており、墓壙内は2cm前後の円礫を含む暗褐色(10Y R3/3)砂礫混じりシルトで埋め戻されていた。棺身に壺を、蓋には深鉢状の甕を転用しており、ともに穿孔は確認されていない。土器棺内には有機物を含む黒褐色細粒



磨滅しており、調整は観察しにくいが、おそらく横方向の
ていねいなヘラミガキと思われる。内面は器表面が剥離し
ており、頸部にしぼりめ様のナデがみられた以外、調整は
わからない。底部の裏面は、粗くナデ整えており、色調は
暗赤褐色～茶褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中に石
英・長石・雲母のほか、多量の角閃石を含んでおり、河内
地域（生駒西麓産）からの搬入品で、畿内第II様式に属す
る土器と考えられる。なお、体部外面の一部には、ススが
付着している。

甕 (392) 口径44.6cm、器高30.6cmを測り、口縁部は
第86図 3117-〇〇実測図 緩やかに外反しつつ伸びる体部から、わずかに丸味をもっ
て開く。最大径は口縁部にあるが、口頸部と体部との境界は不明瞭で、全体の形態は鉢に
近い。口縁部の器面調整はヨコナデで、体部の調整は内外面ともに、幅7mm前後の横方向
のやや粗いヘラミガキである。頸部の内外面には、口縁部の成形の際のユビオサエが残る。
色調は茶褐色を呈し、焼成は良く、胎土は(391)と変わらない。畿内第II様式に属する
もので、河内地域（生駒西麓）からの搬入品であろう。

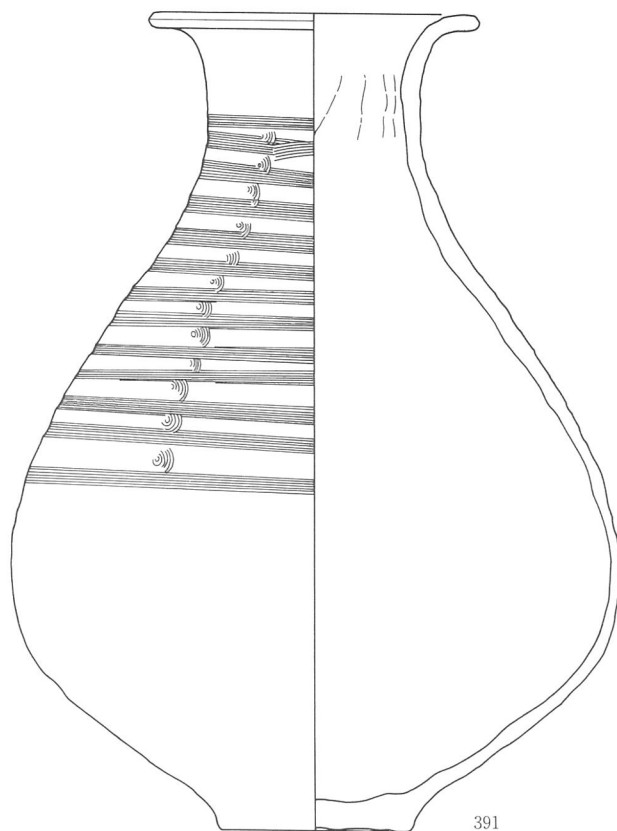
2441-〇〇 第88図 図版第29

F20地区の東部に位置する隅丸方形を呈する土壌で、検出面は標高約53.45mを測る第
7層の上面である。遺構の南部分を後世のピット状遺構に壊されている。平面プランは隅
丸長方形を呈しており、長辺1.13m、短辺60cm、深さは約30cmを測る。埋土は褐色粘質シ
ルトのブロックを含む黄灰色粘質シルトで、断面観察の結果、土壌内は意図的に埋め戻さ
れていることが確認された。

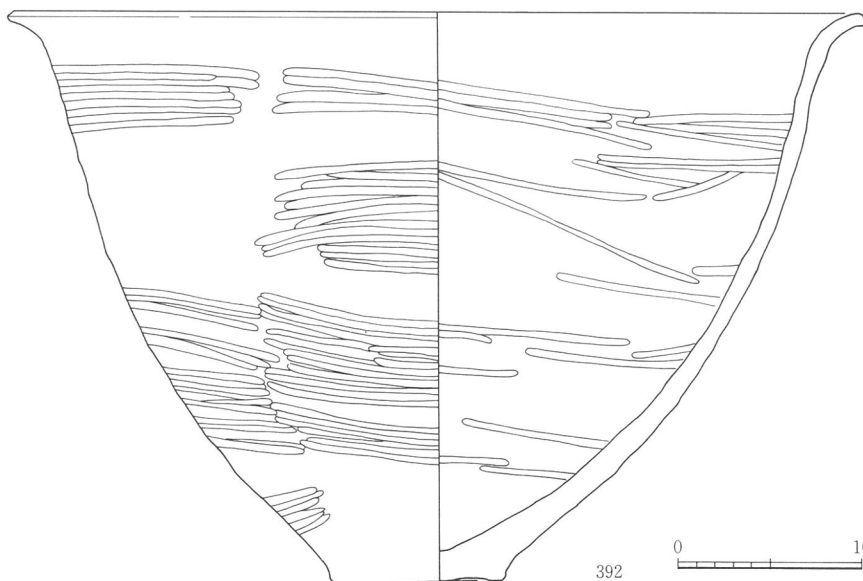
遺構の上部は後世の攪乱を受けていたが、北部より20cm大のやや扁平な石とともに、広
口壺3点・無頸壺2点・甕1点などが出土した。これらの遺物は図示したように、土壌の
底面から15cm前後浮いた状態で出土したことから、本来は土壌上に置かれていたものと考
えられる。また、出土した土器のうち、広口壺2点は頸部の下半、無頸壺は脚台部の接合
部以下が意図的に打ち欠かれていた。以上の諸点よりここでは本遺構の性格を土壌墓と考
え、打ち欠きのみられる土器については、供献土器とみておきたい。

出土遺物 (393~398) 第89図 図版第104

広口壺 (393・394) (393) は口頸部のみが完存しており、口径27.4cmを測る。口縁



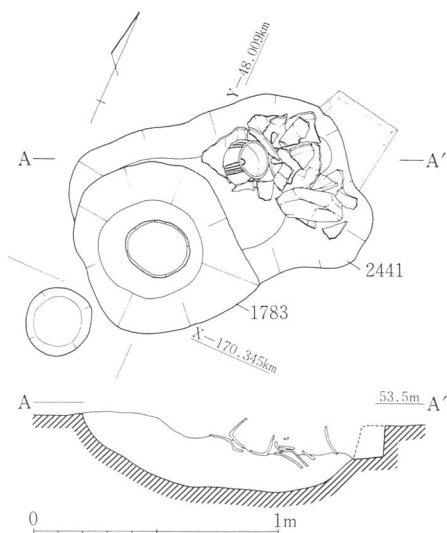
391



392

0 10cm

第87図 3117-〇〇出土遺物



第88図 2441-〇〇実測図

を測り、口縁部は頸部から屈曲して直立する受け口状のもので、口縁部の上端を若干拡張し、やや丸くおさめている。口縁部外端面に3状の凹線文が巡る。口頸部の器面調整はヨコナデと思われるが、器表面が剥離しており明らかでない。色調は浅い黄橙色を呈し、焼成は良く、胎土は(393)と変わらない。

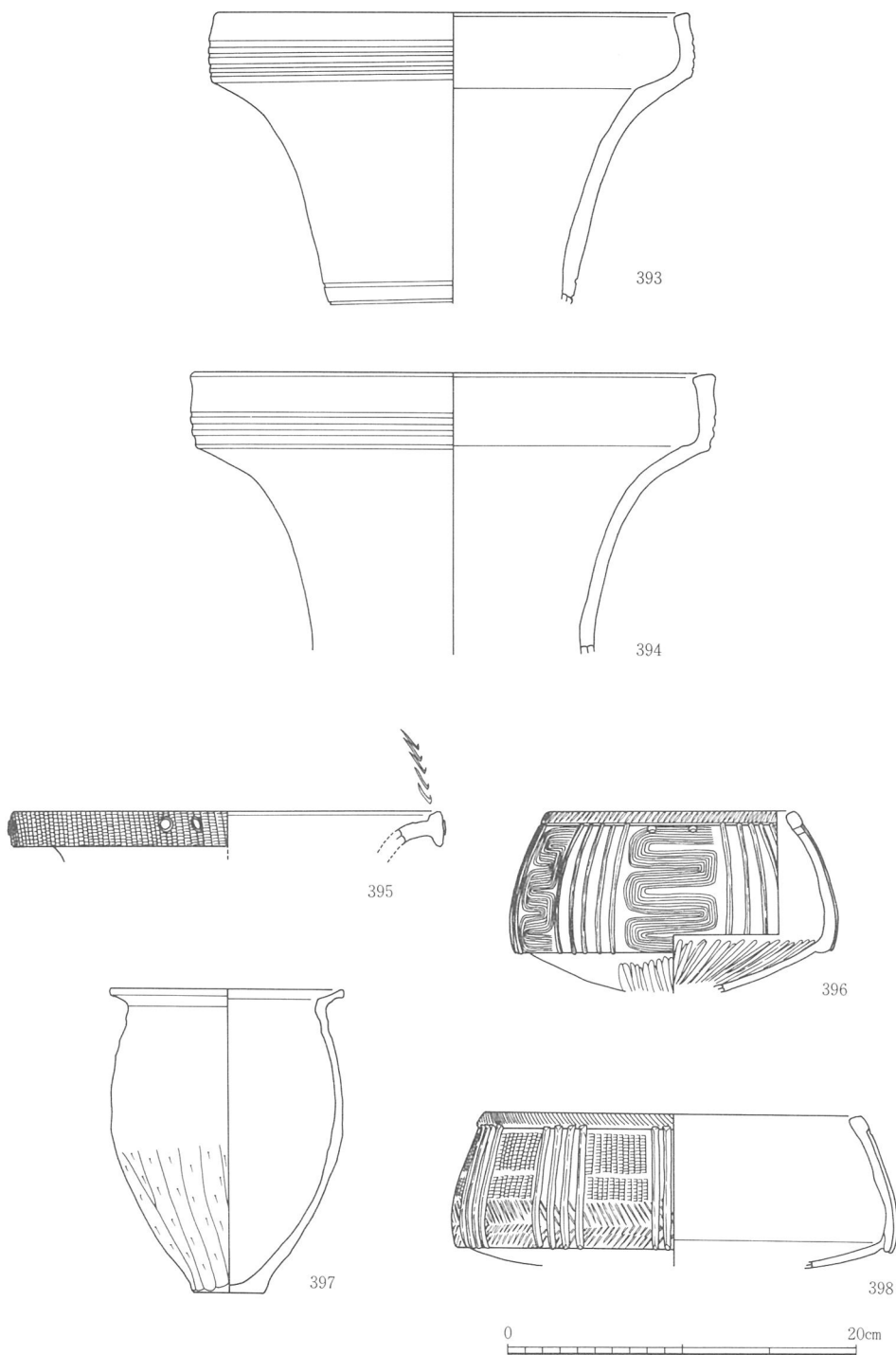
広口壺(395) 口径24.3cmを測る口縁部の小片である。外反する口縁部端を上下に拡張しており、口縁部の外端面を粗い櫛描き簾状文と二個一對の円形浮文で、内面も刺突文によって加飾している。色調は橙色を呈し、焼成は良好で、胎土は(393)と変わらない。

台付無頸壺(396・398) (396)は口径14.0cmを測り、脚台部を意図的に打ち欠いている。身部の器高は10.3cmあり、屈曲して内傾する体部から口縁部に至る。口縁部はやや丸味をもつ鈍い段状口縁で、その外端面には粗い刺突文が巡る。口縁部の直下には、二個一對の紐穴を穿つ。体部の器面調整は上半部がナデで、下半部は内外面ともに縦方向の粗いへらミガキであり、上半部には5本一組の棒状浮文と縦方向の櫛描き流水文を交互に施文している。色調は褐色を呈し、焼成は良く、胎土中に角閃石・石英・長石粒を多量に含む。河内地域(生駒西麓)からの搬入土器である。

(398)も脚台部を欠損した台付無頸壺で、口径21.2cm、身部の器高8.8cmを測り、屈曲して内傾する体部から段状口縁部に至る。口縁部の外端面を櫛状施文具による刺突文で、体部の上半部を櫛描き簾状文と綾杉状の刺突文及び4本一組の棒状浮文で加飾している。

部は緩やかに開く頸部から屈曲して直立し、やや内傾した受け口状を呈する。口縁部の上端は面取り気味におさめられており、調整は強いヨコナデである。口縁部の外端面には4条の凹線文が巡る。頸部の器表面は内外面ともに剥離しており、器面の調整は明らかでないが、下端には2条の凹線文が施されている。色調はにぶい褐色を呈し、焼成は良い。胎土中に石英・長石・チャート粒を含む。なお、頸部の下端には意図的な打ち欠きが認められる。

(394)も(393)と同様に頸部の下半以下を意図的に打ち欠いている。口径30.0cm



第89図 2441-〇〇出土遺物

体部の器面調整は内外面ともにナデで、色調は暗赤褐色を呈し、焼成は良い。胎土の状況は(396)と同じで、河内地域からの搬入土器である。

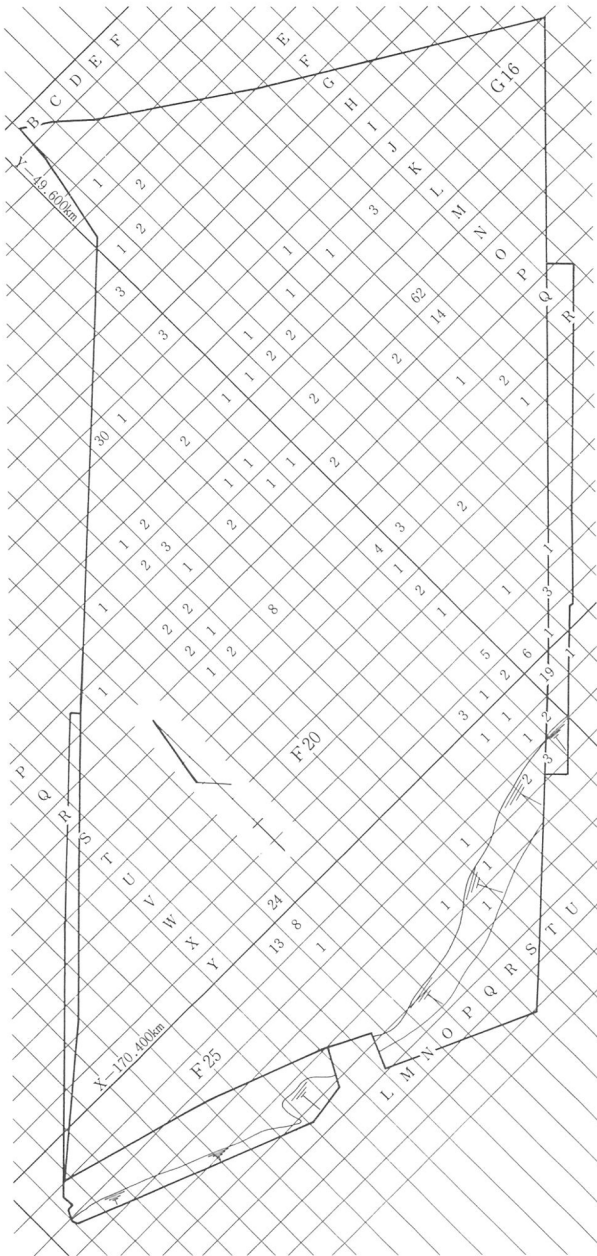
甕(397) 口径13.1cm、器高18.1cmを測るやや小型の甕である。口縁部は頸部から屈曲して外反しており、端部の近くを強くヨコナデして丸くおさめている。体部の形態は倒卵状を呈し、器面調整は外面の下半部を縦方向の粗いヘラケズリで、内面はナデ整えている。色調は黄橙色を呈し、焼成は良く、胎土は広口壺(393～395)と同じである。

以上の土器は、広口壺(393・394)の口縁部に凹線文がみられ、生駒西麓産の台付無頸壺の段状口縁部も全体に鈍く、簾状文も間隔やタッチが粗雑であることなどから、畿内第IV様式に属するものとみておきたい。なお、広口壺の口縁端部の拡張もさほど顕著でなく、台付無頸壺(396)にみられる縦型の流水文もていねいに施されていることから、第IV様式でも比較的古いものと思われる。

第3項 小結

以上、今回の調査で検出された弥生時代の主な遺構・遺物について述べてきた。これらの遺構の時期は中期の初頭(3109-00・3117-00)および中期後半(2461-0D・313-00・494-0P・1390-00・2441-00)に二分され、前者は、遺跡の南を西流する槇尾川を望む中位段丘の段丘崖に近い場所に、後者は、段丘上のやや高い場所に位置している。同様なことは、第90図に示したように、弥生土器の分布状況についてもいえるが、なかでも弥生時代中期後半(畿内第IV様式)の土器は、竪穴住居跡の周辺からその背後にあたる浅い谷状地形にかけて分布する傾向が窺われた。以上の遺構や遺物のうち、畿内第II様式土器を転用した土器棺墓は、本遺跡では初出であり、これは当地域における弥生時代の開始が中期初頭まで遡ることを示すものであろう。また、畿内第IV様式土器を伴う竪穴住居跡や土器棺墓・土壙墓をはじめ、当該期の石器とみられる磨製石包丁や石錘・石鏃などは、弥生時代中期後半には当地においても、水稻農耕を生業とする集落が存在したことを裏付けている。

池田寺遺跡が位置する槇尾川の流域には、対岸に位置する万町遺跡や池田下遺跡および弥生時代中期末から後期初頭の高地性集落として有名な観音寺山遺跡をはじめ、後期後半から古墳時代前期の大規模な集落とみられる和気遺跡などが点在している。これらの遺跡は池田寺遺跡を除き、槇尾川の南岸を西に張り出す丘陵上あるいは中・低位段丘上に位置しており、万町遺跡・池田下遺跡・和気遺跡などのように、弥生時代中期(畿内第III～第



第90図 弥生土器の平面分布

期初頭の観音寺山高地性集落に移動したことも考えられる。

今後、池田寺遺跡及び周辺部の調査が進めば、弥生時代中期初頭あるいは中期後半の集落跡が新たに発見される可能性もあり、槇尾川の北岸のみならず、同川水系における弥生

IV様式)に成立するものが多い。また、和気遺跡を除く他の3遺跡は、槇尾川を挟んで、近距離に對置しており、池田下遺跡でも複数の竪穴住居跡に隣接して、方形周溝墓をはじめ土壇などが検出されている。これらの遺跡は近年調査の手が加えられたばかりであり、弥生時代の集落および墓域の範囲や構造については、明らかでない部分もあるが、何れの集落も同時期に存在した可能性が強い。つまり、槇尾川を挟んで對置する池田寺・万町・池田下の各集落は有機的な関係を保ちながら、集落周辺の水田可耕地(段丘縁辺部の谷水田や小規模な開析谷など)を求めて成立した集落と考えられるのである。

一方、当地域の遺跡ではこれまでのところ、畿内第V様式の土器は確認されていない。池田寺・万町・池田下遺跡の中期後半の弥生集落が後期初頭まで存続しないとすれば、南方約2kmに所在する弥生時代中期末～後

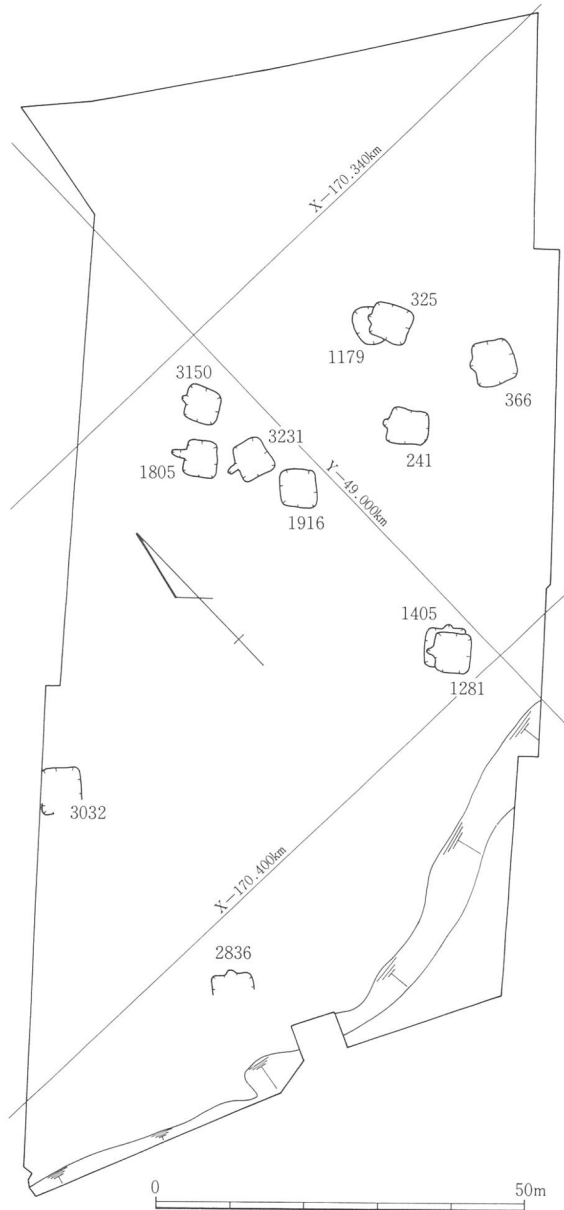
時代の地域的な動向がより鮮明になるものと思われる。

第4節 古代の遺構・遺物

本節で扱うのは、6世紀後葉から10世紀代にかけての遺構・遺物である。当該期の遺構には竪穴住居・掘立柱建物・土塋・溝・ピット状遺構などがあるが、これらをその帰属する年代から見れば、6世紀後葉から7世紀代に属するものが最も多く、検出遺構の中心をなしている。ついで8世紀代の遺構が多く、9世紀以降は時代が下降するに従って数を減じる。以下、まとまった遺構群として認識できるものから順に記述を進めてゆく。

第1項 竪穴住居群 第91図 図版第1～5

6世紀後葉から7世紀前葉に比定できる竪穴住居跡（以下、住居跡とする。）を合計十二棟検出している。これらはすべて平面形が方形を呈し、一辺4.2m～5.0m程度の規模のもので、一棟がやや大きいが全体として然程の格差はない。これらの住居跡のうち1179・1916-O Dには竈がないが、その他の住居跡には造り付けの竈があり、竈は北西ないし北東壁



第91図 竪穴住居配置図